

324  
663

6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 7

始



35.2.11

324

663

324-663

河口慧海著

西藏傳印度佛教歷史

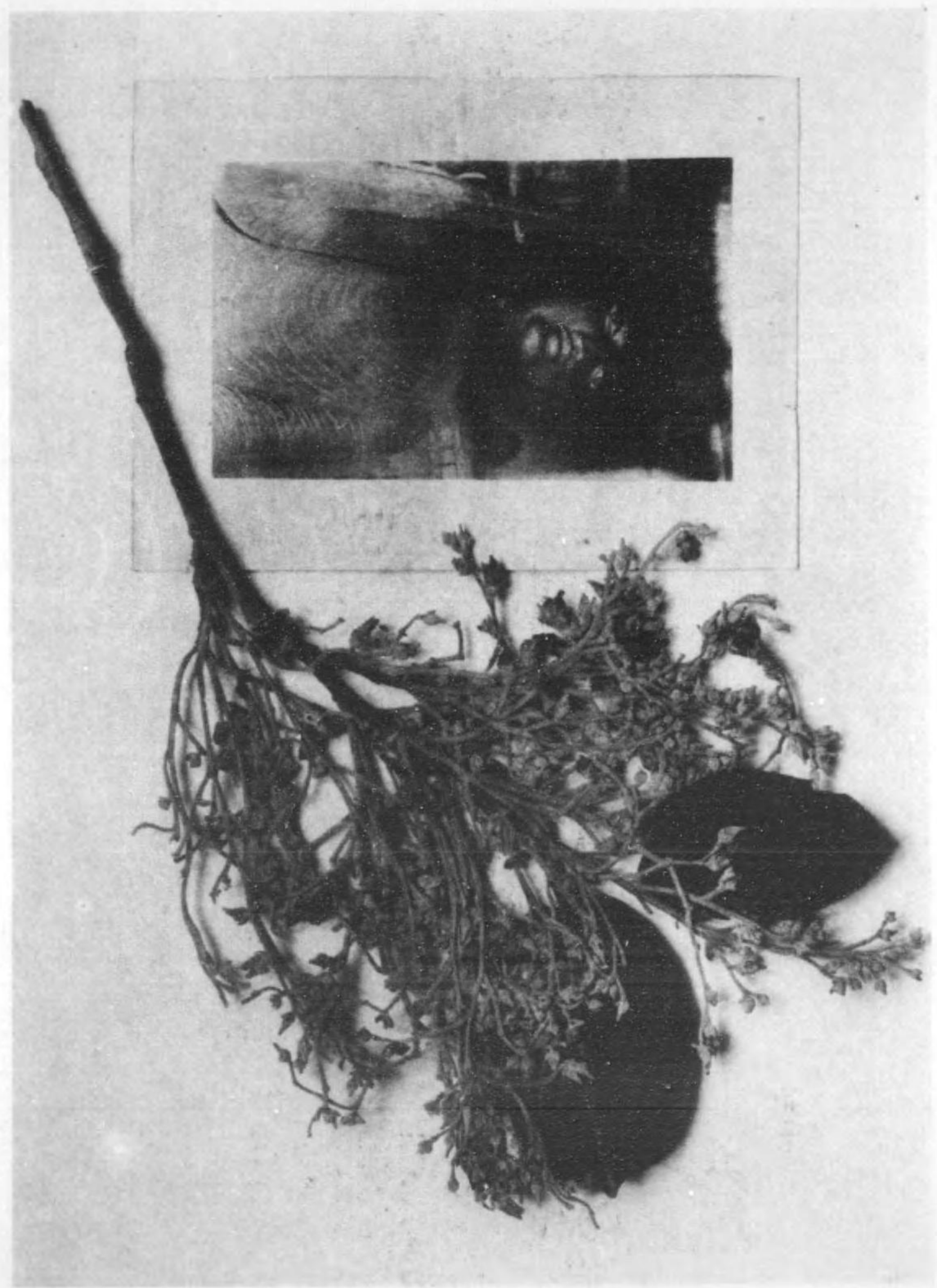
上

一名 釋迦牟尼佛之傳









[Faint, illegible text or markings on the right page]

### 西藏傳印度佛教歷史序

古來我國に傳ふる所の印度佛教史は、大抵支那より傳ふる所のものにして、近年少しく泰西學者の説を傳ふる者あり。然れども其西藏傳に至ては、直接に西藏語より翻譯せしものは、余の未だ嘗て見聞せざる所なり。而して西藏傳の印度佛教史上に必要なる所以は、間々他の支那傳及泰西學者の間に傳はらざる所の歴史的材料ありて、印度歴史の大缺陷を補ふに足るものある事是れなり。

上卷佛傳の部に於ては、支那に傳ふる所と、一々異なりと云ふには非ざれども、猶ほ西藏譯のみに存して、支那傳等には全く傳はざる傳説あり。又同じ事も記事の方法異なるよりして、稍や別事の觀を呈するものあり。此等は歴史の研究上特種の方法として、學者の注意を要する點なるべし。而して最も缺陷多き佛滅後の佛教史中、特に殆んど全く支那には傳へざる所の佛教滅亡史、即ち西曆第七百年代より、一千二百年代に至るまで、五百年間の出來事は、西藏傳には最も詳細に傳ふる所にして、是れ西藏佛教家の世界佛教に對する一大功績なりと云ふも、敢て過言に非ざるなり。

故に西藏傳を忠實に翻譯する時は、從來我國に存せざりし新材料を、世の學者に供給することとなり、隨て研究進歩の一新史料を得ることなるなり、是れ余の本書を翻譯し、且つ編纂する所以なり。

本書は主として西藏に傳ふる歴史的材料を成るべく廣く且つ多く紹介せんと欲するが故に、或一の歴史書のみを翻譯せず、西藏に著名なる數種の著書を撰んで、其中より逐次翻譯して、序に隨つて編纂せり。其等の書名は以下の如し。

- 1 ラムリム、ギユツバイ、ラーマイ、ナムタハル、ンガバ、  
Lamrim rGyüdpai Lamai rNamthar ngapa.
- 2 道順傳燈史傳 ンガバ      ラハサ、ホタラ版  
グイヅールヤ、カルボイ、ヤーセル、  
Vaidurya dKarpoi gYasel.
- 3 白瑠璃除銷      ラハサホタラ版  
バクサム、ジョンサン、  
dPag bSam Jon Sang.

如意寶樹(史)

寫本及カルカッタ活字版

- 4 タムバイ、チヨエキ、コルロエ、ギユルワ、  
Dampai Chhoski aKorlos bGyur Ba.

轉正法輪(史)

寫本

- 5 ギヤチエル、ロルバ、  
rGya Cher LorPa.

大方廣遊戲(經)

シカチエ、ナルタン版

- 6 テーセク、テンバイ、チヨエ、チユン、  
bDe gSheg gsTan Pai Chhos Byung.

善逝教法史

シヤール版、タシルフンブー版、カム、テルケ版

- 7 タムチヨエ、バハクユルツ、チユンツル、  
Danchhos aPhags Yul Du Byung Tshul.

印度正法史

著者ターラナータハ

- 8 デブテル、ンゴンボ、



青歴史

著者クンケン、チャクナ、バツカル、チャン

9

ジヤムベ、シンゼ、セーコル、ラーマイ、チヨエチエン、

aJam dPal<sup>g</sup> ShirJe<sup>g</sup> Shad<sup>s</sup> Kor bLamai Chhos Byung.

妙徳夜摩部喇嘛歴史

著者バルジヨル、ルフンツブ

10

カーバブ、ズンデン、ギ、ギユツ、

bKa Babs bDun lDengi Gyud.

七流教法史

著者ターラナータハ

11

タムバイ、チヨエキ、チユンツル、テンバイ、ギヤムツオル、ジユクバイ、ヅーチエン

Dampai Chhoski-Byungshul-bsTanpai-rGyantshor aJigpai-Gru-Chhen.

正法史の海に入る大船

コンチヨク、ルフンツブ、サンゲー、ブンツオク、共著

前記の中、上巻中に引用せる、第一より第六に至るまでの書に就て解説して、其云何なる史書たるやを明かにすべし。

1

略名 ラムナム、ンガバ

著者エセー、ギヤルチエン、

詳名

チャンチュブ、ラムキ、リムバイ、ラーマ、ギユツバイ、ナムバル、タハルバ、ギヤルテン、ジエーバイ、ゲンチヨク、ブフルチエン、ノルブイ、テンワ、ンガバ、

譯

菩提道順傳燈喇嘛史傳、佛教の最美最莊嚴の寶珠聯

本書は上函四百七十四丁、下函四百九十七丁あり。西藏新佛教黃帽派の傳燈史にして、同派一般の權證とする所なり。其序述の方法は、初めに佛傳を序し、次に七祖、次に中道派の傳燈喇嘛の歴代を叙し、次で唯識派の諸祖を傳し、次に大行派の歴代の諸祖を誌して、此三派の秘傳を一人に相傳せしチヨーオ、バルデン、アーヂシヤを記し、次で同祖より西藏カーダムバ派歴代の高僧を傳し、次で新佛教の開祖宗喀巴よりして其法系の大行者法金剛の傳に至るまでを誌せり。本書は傳燈喇嘛を序する事を主としたる者なるが故に、同派の傳燈に入らざる他の高僧大徳の傳記を略する所あり。同派教系の相續を述ぶるに詳かなるは、大に取るべき所なれども、一般佛教の歴史には缺けたる點少からず。是れ本書のみに依ること能はざる所以なり。著者はエンサーワの秘法を傳へたるロブサン、ナムギャルと牟尼教圓滿成就の主たるンガクワン、チャムバとの二尊宿より、菩提道順の秘法の皆傳を受けたるエセ

1、ギヤルチエンにして、黃帽派中の權威ある大學者なり。最勝生第十三の丁羊の年（西曆紀元一千七百九十七年）に本書を著述せり。

2 略名 ヤーセル 著者 テーシー、サンゲー、ギャムツォ、

詳名 テンチヨエ、グイヅルヤ、カルボレー、チーレン、ヤーセル、トンギ、シンレー、トンチエツ。

譯 白瑠璃科學に就て問答除銷義の表相顯示

本書は四百七十三丁の書にして、其名の示す如く、著者が嘗て著はせし所の白瑠璃科學に就て、多くの不審を起せし者あり。其等に答ふる爲めに、著はせしものにして、書名は白瑠璃科學に生せし銷を除くの義に取れり。白瑠璃科學は曆法、天文學、占星學を説明する者にして、中に佛教歴史に關する部分あり。而してヤーセルは佛傳に關しては、秘密乘非佛說等の不審を説破する爲めに誌せし者にして、西藏學者著述の佛傳中、最も微細なる點に於て、詳細を極めたるものなり。

著者はテーシー、代理法王サンゲー、ギャムツォ（覺海）西藏曆最勝生第十二の初年丁卯の年（西曆一千六百八十六年）グイヅルヤ、カルボを著はし、次でヤーセルを著はせ

り、テーシーは西藏に於て稀に見る所の大學者にして、又大政治家なりき。テーシーの著はせし者は、此外にグイヅルヤ、ンゴンボ（青瑠璃、醫學藥學を誌せる者）バルタム（政治學）等あり。著者テーシーは五代法王言方（ラグワン、ヤムツキ）海の實子なりと信せらるゝ人にして、一千六百五十年、五代法王は蒙古王のゴーミ、テンジン、チヨエ、ギヤルより、全西藏國を寄附せられて、政權上の法王となるや、後、清朝は西藏の政治上に大に干涉せんと欲せしかば、同國に種々の困難を惹起するに至れり。其頃五代法王死したるも、テーシーは其死を秘して喪を發せざることを十二年、或は云ふ十八年なりと。テーシーは其間に法王政府の基礎を強固にして其喪を發せり。斯の如く彼は其政治上の權力強大なるに拘はらず、自著の白瑠璃科學に就て、諸學者に其批評を求めて、其れに對して、丁寧に答へしものは、本書に引く所のヤーセルなり。彼が學者としての態度の公明なりしことを知るべし。

3 略名 バクサム、ジョンサン 著者 スムバ、ケンボ、エセー、バルジョル、

詳名 バクサム、ジョンサン、セー、チャーワ、バクユル、ギャナク、チエンボ、ボエ、タン、ソクユルツ、ダムバイ、チヨエ、チエンツル。

譯 如意寶樹と云ふ印度、大支那、西藏、蒙古に於ける正法歴史

カルカッタ版サラット、チャンドラダース編の索引付

英譯 Part I. History of the Rise, progress, downfall of Buddhism in India.

本書のみは西洋綴の活版印刷キク版のものにして、他の書物は西藏出版なれば長方形の木版なり。本書第一部印度佛教史に百四十六頁と、故サラット氏編の解釋的索引百四十八頁あり。第二部西藏歴史はサラット氏の九頁の序文と二十六頁の目錄と、二百八十三頁の本文あり。二部合して一卷となせり。本書の原書を西藏にて公にしたるは、一千七百四十七年にして、サラット氏が印度にて出版したるは一千九百〇八年なり。

本書序述の方法は、初に世界の成立、構造、組織、來歴等を述べ、諸佛の出世不出世の事由を明かにし、特に釋尊の系統、及此世界に出づる所由を説いて、佛傳を序せり。本書の佛傳はヤーセルの如く詳密に非ざれども、他に誌さざる所を誌したる所ありて、大に取るべきものあり。佛滅後の歴史に至ては、他書の如く一派の諸祖高僧を序するに專にして、他の諸派の高徳を簡略する嫌ひなく、公平に佛教全體の高僧及外護

者を叙して、一般教勢の推移云何を知らしめたるは本書の特色なり。斯の如く一般を主とせしを以て、種種の歴史に於て省畧せられし處ありて、精密に研究する者に對しては、不便なる點少なからず。是れ本書の特質に於て、己むを得ざる次第なりと云ふべし。

本書の著者スムバ、ヤンボ、エセー、ハルジョル大喇嘛は、西藏曆最勝生第十二の甲申の年(西曆一千七百〇二年)北部西藏のアムド洲ゴンルン寺附近の地に生る、彼の祖先は西部西藏のスムバ地方より出でしを以て、家名をスムバと云ふ。而して彼は其家名を以て著しく世に知らるゝに至れり。

彼の甚だ幼なる時、彼は自ら其卓越せる前生の再來身なることを證明せしことあり。其學ぶや非常に優れたる才能を以て、讀書習字等に熟達せり。彼は又スムバ、ジャブツン、(貴族の尊稱)とて、大に世に知らるゝに至れり。九歳の時ゴンルン寺に入りて、チャンキヤ、ラーマに隨ふて、出家得度してエセー、ハルジョルの名を享く。彼は其師及ツブカン、チヨエキ、ギャムツオ、並に多くの大喇嘛等より、因明、修辭學、詩學、佛教の儀式、並に俱舍、唯識、三論等に對する諸派の哲理を學び、又數學、醫學、音樂、繪畫、並に顯

密二部の儀規等を、二十歳に至るまで修學し了れり。是れに加ふるに彼は天文學、占星學、觀相學に於て、前哲の諸説を修了して、前人未發の卓見を有するに至れり。而して彼が大學者なりとの雷名は、西藏、支那、蒙古の諸大學者を壓伏するに至れり。彼は二十歳にして西藏本土に行き、首府ラハサ市のレボン大寺に學生として入學せり。翌年彼はツァン洲に行き、班禪大喇嘛ロブサン、エセーに隨ふて、具足戒を受け、比丘となれり。二十二歳の時、彼はヤールン河岸の靈地なるサムヤエ寺に順拜してギヤルレ、リンボチエ(ンガクワン、チクメ)に遇ふて大に歡喜せり。ギヤルレは彼に對して彼の本誓たる支那國に佛教布及の事等、總べて彼の爲すべき運命の事業を讒言せりと云ふ。廿三歳の時彼はレボン大寺のコマン大學の學長に推撰せらる。翌年中央洲と藏洲との争鬭起るや、彼は佛教の嚴重なる戒律に違反してコマン大學の僧衆をして、彼等の敵に對して、兵器を用ふることを強いて許するに至れり。而して他の諸大學も亦其例に倣ひて、戰爭するに至れり。彼は五ヶ年間コマン大學々長の職を盡して、後アムドに歸れり。

三十歳の時、彼はギヤルレの讒言に隨ひて、約八十人の學僧を入るゝに足る寺院を

建て、バルデン、オエセルの建てしサムテンリン山寺及同十五人の僧衆とを、此新寺の管轄下に移して、後にスムバ山寺と名づけたりき。三十四歳の時乾隆帝清高祖位に着く。其翌年チャンキヤ、バルワイ、ドルヂエと共に支那に行けり、帝彼等に問ふに種々の事を以てす。中に就き、スムバ、ケンボは其答辨流るゝが如くにして、少しの困難も感せざりしかば、帝は大に彼を信任して、蒙古諸王の精神的指導者となし、フトホトウと云ふ高僧の官位を授けたりき。彼は高僧の官位を辭退したる外、總べて清帝の優遇は皆是れを受けたりき。彼は高僧の官位を以て、世の榮譽を求むる者の爲めに必要なれども、彼自身には要なしとして辭したるなり。帝は彼喇嘛の無欲なるを讚歎して曰く、我廣大なる版圖に於て、斯かる高位の授與に對して、斯くまで無欲なる人の存することは他に見ざる所なり。是れよりして彼は帝に益々尊敬せられ、眞の喇嘛なりと讃せらるゝに至れり。彼は九年間支那に留錫せり、當ラブランの總裁たりしチャンキヤはスムバ、ケンボをして、西藏語一切藏經の支那國に散在するものに至るまで、總て校正せしめたりき。スムバは其事を満足に終はりしを以て、ラブラン總裁は彼にバンヂタと云ふ最高の學位を與へ、其れに相當する黄色の肩

衣を送れり。彼は五年間北京に住する時、帝は毎月彼を招いて、佛教々義を問ふこと  
數時間に及ぶ事あり而して彼は滿州、蒙古、北京の住民等より非常の尊敬を受けた  
りき。

彼のアムドに歸らんとするや、帝及チャンキヤ、並に支那蒙古の諸王は多大の贈物  
を爲せり。彼は五臺山に住する事一年、曼珠師利菩薩を禮拜供養せり。彼は歸路北方  
に旅行するや、アラクシヤに行いて、蒙古人より甚大なる贈物を受けたりき。四十三  
歳の時、彼はゴンルン寺の主僧に任せらる。彼は支那蒙古にて得し多大なる財寶を  
以て、西藏の法王並に班禪喇嘛及セラ、レボン、ガンデン、タシルフンブーの四大寺等  
に贈れり。彼は又多くの佛像、碑文、窠塔婆等を建立せり。

彼は又多數の書を著はせり。彼は西藏の曆書、天文學、占星學に満足せざるや、同種の  
古書即ち著書の異なる者、二十種を對照研究して、一大論文を誌せり。彼はケーツ  
プ、ジェミブートンとは他の者等より正しと云ふことを發見せり。彼は行年七十五  
歳にして死す。西曆一千七百七十六年に當れり。其著書は以下の如し。

1 普明鏡 (數學、天文學、占星學)

2 甘露滴 (醫學理論)

3 實驗 (實際醫學)

4 白水精鏡 (診察法)

5 衛生法 (養生、看護等の法)

6 身語意處中線量法 (像圖、象徴の構造及分量)

7 聲明修辭演劇

8 如意寶樹史 (本書に引用せる書)

9 神通力を得せしむる所の眞言法

10 瞻部洲普說 (世界地理誌)

11 瑜伽法 12 運命學 13 禪定學等なり。

14 畧名 タムバイ、チヨエキ、コルロエ、ギユルワ。

15 詳名 タムバイ、チヨエキ、コルロエ、ギユルワ、ナムキ、チユンワ、ケーバイ、カート  
ン、レクバル、シエツバ。 寫本、著者不明

譯 轉正法輪史學者表歡喜の善說

本書はペーマ體の寫本にして中本なり。初丁より七十三丁までありて後を缺く。故に著者の名を知る事能はず。文體は皆偈文にして暗誦に適せり。内容は第一世界總説、第二佛傳、第三結集、第四三寶所依由來、第五印度王統傳あり。第四は六十四丁の裏に至て終はり、其れより第五の印度王統傳は六十四丁、阿闍世王に始り、七十三丁ゴウ、バテ王の記事に至て後は欠本となれり。以下記事の量を以て察するに、二三の欠丁あらんと思はるゝなり。本書は多くは歴史的文章のみにして、神話に渡ること少なければ、まゝ取るべき材料あり。著者は不明なるも明確なる頭腦を有したる人の著なること明かなるを以て、本書に引用する所以なり。本書寫本はタシルフンブ寺に於て、或學僧より讓受けたるものにして、三百餘年を経過したる古本なり。

5 略名 ギヤーチエル、ロルバ、

譯名 バクバ、ギヤーチエル、ロルバ、セー、チャールワ、テクバ、チエンボイ、ドー。

梵名 ラリタ、莽スタラ、ナーマ、マハーヤーナ、スートラ。

譯 聖大方遊戯と名づくる大乘經。

本書は佛部藏經經部、カハバにありて、十八卷二十七品、二百八十一丁(ギヤンチエ寫

本)にあり。本經は佛世尊が淨居天の自在天王の請に依て、舍衛城祇園精舍に於て、佛自らの傳記降生よりワラナシー鹿野苑の最初轉法輪までを説かれたるものなり。本經は余りに廣博に失する嫌ひあれども、稀に引用の必要を感ずる所あり。佛傳としては最も古きものゝ一なりと云ふべし。

6 略名 テーセク、テンバイ、チヨエ、チユン、 著者ブートン、

譯 善逝教法史

詳名 テーワル、セクバイ、テンバイ、サルチエ、チヨエキ、チユンネ、スンラブ、リン

ボチエーイ、ゾエ。

譯 善逝の教法を明かにする法生史たる言實の藏。

本書は西藏に於て最も廣く行はれたる史書にして、又最も古き西藏著述の一なり。木版三版あり以下の如し

1 シヤール版、 小字中本 百九十丁

2 タシルフンブー版、 大字中本 二百四十四丁

3 カムデルケ版、 小字中本 二百三丁

内容はデルケ版に依れば、初丁より百十七丁まで印度佛教史を誌し、其れより終りの二百三丁まで西藏佛教史を誌せり。上編は三十三丁まで佛教々理及修行法に就て、其要領を説き、太で七十八丁まで明劫暗劫及賢劫の事より佛因位及佛傳を誌せり、其れより結集等より佛教隆盛時代及び其滅亡史に至るまでを誌せり。著者ブートン、リンチエン、ヅブは、西暦一千二百八十八年に生る。西藏に於て未だ曾て見ざりし博學深識なる大著述家にして、又著明なる喇嘛なり。彼は顯部蜜部は云ふに及ばず、科學に至るまで許多の書を著はせり。又西藏に於て、初めて一切藏經の彙類を爲せし人にして、佛部カンチヤン祖師部の二に分ち、是を細分して現今存するが如き彙類の基を起せり。本書善逝教法史は著者三十三歳の時(西暦一千三百二十一年)に著せしものなり。彼は一生佛教の傳播に従事せり。晩年タシルフンブー寺の東、十哩の地に存する、シャール寺に住し、行年七十歳(西暦一千三百五十八年)同寺に瞑目せり。以上の六書は各著者の屬する宗派の異なるに時代異なるに、其性格の異なる等よりして、其歴史の材料、組織、詳畧等を異にする點少なからず。假りに一書を撰んで翻譯する時は、一派に偏するか。或は一個人の主義に偏するか。何れか一方に局限す

る恐れあり、西藏に傳ふる一般の材料を逸することとなるが故に、上記の六書より取捨して翻譯することゝせり。此等の六書は佛傳に就ては、西藏所傳中代表的典籍なれば、此等を材料として撰定したる者なり。而して此等六書の外第七より第十一までの五書は、佛滅後の歴史には缺くべからざるものなれども、佛傳に關しては異説なきものなれば、本書に引用する必要なし。唯だ此に一言せざるべからざることハ、ラナータハ著の印度正法史にして、此書に獨乙譯あるを以て、我國の學者間には甚だ名高きものなれども、其中佛傳を缺けるを以て此に引用する事能はざるなり。上記十一書十三種の西藏書籍は、唯だ第七のタラナータハ著の印度正法史を除きては、皆余の西藏より將來せしものにして、カルカッタ版の如意寶樹史のみは、余が同地にて購求せしものなり。而してタラナータハ著の印度正法史は、大谷本願寺派の寺本婉雅氏が西藏より將來せし者にして、余は同氏より借讀せり。此に厚く同氏の厚意を謝する所以なり。

大正十年十二月八日

編者 河口慧海

### 西藏傳の經書に題す

慧海

ひまらや山の北崑崙の南、  
 漢蜀深山の西にある、  
 周圍の山は摩教徒さへ、  
 印度の如き熱もなく、  
 蟲も鮮き國なれば、  
 此上もなき自然の藏、  
 印度國民墮落して  
 外道と共に摩教徒は、  
 時に藏國高僧は、  
 群山はてなき雪の原、  
 劫盜の難も厭はずに、  
 印度僧の將來せし、  
 諸典も今に残りける

カラコラン雪嶽の東にて、  
 世界最高の山原國。  
 侵し得ざりし自然の城、  
 又濕もなき西藏國。  
 古經珍書の保存には、  
 衛藏の名に實もあり。  
 正法受くるに堪へずして、  
 破佛の業に寺焼けり。  
 生命を惜まず嶮峻の、  
 瘴毒高溪河々や。  
 超えて集めし聖典や、  
 梵書に依りて譯されし  
 古來高僧の徳を仰がん。

### 凡例

本書は成るべく廣く西藏に傳ふる歴史的材料を集むるを以て目的としたる故に、  
 假令ひ吾人には神話の如くに感ぜらるゝ記事と雖も、西藏人等は確實なる歴史  
 として傳ふるを以て、同國所傳の歴史的材料として、一も省かず譯し置けり。是れ或  
 は何等かの事實を示すものにして、歴史研究の資料とならんと思へばなり。  
 引用書類中同一事實を叙するに當て、多少の相違ある時は兩方の記事を譯出せり。  
 本書は材料出處の確實なることを示す爲めに、一節の終りか、或は史題の變はれる  
 毎に、其引用せし書名と其丁數或は頁數を誌せり、是れ原書を讀む者の爲めに便宜  
 ならんと思はるればなり。  
 譯語に註釋を施さずしては不明なるものあり。斯かる語には括弧中に其註釋を誌  
 し置けり。又地名、人名、術語等の原音にして假名のみにて不明なる時は、羅馬字にて  
 梵音或は西藏音を音譯し置けり。從來梵語の漢字に音譯せられて漢字を用ふる習  
 慣となれるものは、其漢字を用ひて傍らに正しき發音を假名にて附しおけり。例せ



ば般若をブラツギヤと音譯してハンニヤと附けざるが如し。  
佛跡等の現今明白なるものは、余の實地踏査より得たる現狀の説明を附記しおけり。其外他説の引用、或は本文中の概説並に余の説等は、皆一般低くして括弧内に誌せり。

二

## 西藏傳印度佛教歴史目次

### 上卷 釋迦牟尼佛の傳

- 第一章 拜語より藍毘尼苑カシヒニ名義の起原に至る
- 第一節 拜語及分類 二頁ヨリ三頁マデ
  - 如意寶樹史の翻譯拜語、同著者著作の拜語、妙音の異義、佛教歴史著作の必要、釋尊在世と滅後との區別
- 第二節 佛陀出世の國土 三頁—六頁
  - 世界出現の理由、正法誕生地摩揭陀國の特徴、南瞻部洲の四大河と四大山脈、同住民の特徴 六頁
- 第三節 世界人類用語の數並に時限の算法
  - 三界の構造、劫波カレバの大中小の算法
- 第四節 明劫暗劫の別 六頁—七頁
  - 明劫中、賢劫、大譽劫、如星劫、功德莊嚴劫中、佛出世の數、無限數の大劫波

一

第五節 賢劫千佛出世の原由 七頁—九頁

悲華經と賢劫經との異点、輻輪王の一千の王子、寶藏如來の一千王子等に對する授記、西藏法王寶瓶抽籤法の典據、金剛手菩薩の因位たる法心大臣

第六節 賢劫の名の起原 九頁

淨居諸天の賢劫命名賢バハドラの梵語義

第七節 增劫減劫の別 一〇頁

減劫佛の出世、增劫に佛の出世する世界

第八節 人類の起原 一〇頁—一三頁

光音天人の降天化生、此土衆主宿福の漸減、完全期三有期、二有期、鬪爭期の區別及期間、摩訶三摩多王の撰定及其梵語義、收獲六分一の租稅

第九節 四族或は五族の起原 一四頁—一五頁

四族起原の正説明、及其神話第五族の存在、娑婆世界の名義

第十節 賢劫中過去佛の出世 一五頁—一七頁

拘留孫佛出世時の異同、八相成道と十二相成道、印度太古の王都普陀羅城の所在、太古の諸城市及國王等、金仙佛と護光佛との出世

第十一節 釋尊の系統 一七頁—二〇頁

クリクリ王の普陀羅城に移住、憍多摩姓の起原、憍多摩族を日種、甘蔗族精生族と云ふ理由、釋迦族と命名の事歴、釋迦族迦毘羅仙人の製圖に隨つて迦毘羅城を作る、黎車蔑族の起原、釋尊の祖父獅子頰王の四王子と四王女

第十二節 釋尊の母后近親、並に藍毘尼苑名義の起原 二〇頁—二二頁

善覺王其妃藍毘尼の爲に藍毘尼苑を作る、佛母摩訶摩耶夫人の誕生淨飯大王、摩訶摩耶を聚る

第二章 釋迦牟尼佛本生略傳

第十三節 菩提道順喇嘛傳燈史拜語 二一頁—二四頁

佛世尊禮拜、唯識派中道派の二祖に禮拜、唯識派傳燈喇嘛禮拜、中道派傳燈喇嘛禮拜、秘密派傳燈喇嘛禮拜、新派の遠祖アーヂシャ禮拜、佛教歴史

著述の期願

四

第十四節 佛出世の稀有 二四頁—二六頁

無限數の衆生の安樂利益の源泉、妙法源泉の佛陀にある事、佛出世の稀有なる所以、三大阿僧祇劫の佛陀の修行

第十五節 釋尊因位の初發心 二六頁—二八頁

陶器師の子光作(釋尊)往古の前身、大釋迦牟尼佛之供養して發心す、釋尊因位の無數の誓願、地獄の車夫と生れし時の大慈悲的發心

第十六節 本生傳、光有王及無垢腕童子 二八頁—三一頁

光有王たりし時、白象の實例に依て發心せし事、無垢腕童子、未得月幢如來前に於て供養して無上道心を起せし事

第十七節 本生傳、精進行童子、商事慧賢 三一頁

精進行童子は大蘊如來の前に於て大乘道に於て不退轉位を得し事、商事慧賢と生れて修行せし事

第十八節 本生傳、雲童子 三二頁

燃燈佛の時、雲童子と生れて、如來に散華の供養をして、如來より釋迦牟尼佛となるべしとの讖言を與へられし事

第十九節 本生傳、婆羅門海塵 三二頁—三四頁

海塵鬪争期中五濁惡世の衆生を濟度せんとの五百の大誓願を寶藏如來の前に立つ、寶藏如來の讚歎

第二十節 三無量大劫に供養せる諸佛の數 三四頁—三五頁

初め大劫に七萬五千の諸佛を供養す、中の大劫に七萬六千の諸佛を供養す、後の大劫に七萬七千の諸佛を供養す

第二十一節 報身佛の化度 三五頁—三七頁

三無量大劫の修行にて成佛し能はざる事、無量不可思議恒河沙數の諸佛に供養せし事、阿迦尼瑟吒國土にて報身釋尊の化度、阿迦尼瑟吒國土と阿迦尼瑟吒天即ち色究竟天と異同

第二十二節 迦葉波佛の授記 三七頁—三八頁

婆羅門上主、迦葉波佛より次の出世佛、釋迦牟尼世尊たるべしとの授記

五

を與へらる、上主は死後正妙頂菩薩と生るゝこと  
第三章 佛誕生より防水工事まで

第廿三節 佛誕生前の瑞相 三八頁—四二頁

佛誕生地藍毘尼苑の前兆諸瑞相、藍毘尼苑の現状、雪山脈の大光景、佛誕生地の實地測量、阿輸迦王建立の石柱及摩耶夫人佛誕生の石像

第廿四節 降生勸請の自然樂歌 四二頁—四三頁

淨居諸神の佛出世讖言、鹿野苑五百仙人の火定入滅

第廿五節 五事觀察、位を彌勒菩薩に授く 四三頁—四六頁

時を觀する事、國土を觀する事、種姓を觀する事、血統を觀すること、母となり得べき徳ある女に就て觀する事、正妙頂菩薩は一生補處の位を彌勒菩薩に授く並に説法

第廿六節 降親史多天 四六頁—四八頁

淨飯王の宮城に八瑞相現はる、菩薩は摩耶夫人に尊母性徳圓具と名づくる光明を放射す、尊母右脇の淨曼荼羅内に入胎

第廿七節 菩薩の宿胎 四八頁—四九頁

菩薩入胎後甘露を飲んで成長す、胎内の化度、誕生時の近くや三十二の瑞相出現す

第廿八節 悉達太子誕生 四九頁—五二頁

淨飯大王及善覺王は諸臣を派して藍毘尼苑を掃除す、藍毘尼苑の瑞相、摩耶夫人の藍毘尼苑御幸、無憂樹花の満開芳香、釋尊誕生、天上天下唯我獨尊の宣言、無邊の空間に満つる大供養、同時に諸國王子の誕生、一切意成就太子と命名せらる

第廿九節 仙人等太子の相を觀す 五二頁—五四頁

觀相師等の讖言、諸天善神の歡聲、阿私陀仙人等の熟議、佛母摩耶夫人の崩去

第三十節 悉達太子神祠の參拜 五四頁—五五頁

釋迦婆縷陀那藥叉の足下に禮拜を奏請す、釋氏の勇者等太子の威徳に歴せらる、父王太子を釋迦牟尼と命名す、又神中神と名く

第三十一節 阿私陀仙人の菩薩觀相 五五頁—五七頁

阿私陀仙人の行空神通力失墮、仙人菩薩を觀相して如來となることを識言す、菩提道次第の要點

第三十二節 太子學術技藝を學ぶ 五七頁—六〇頁

太子の戴冠式、太子天然莊飾の絶美、太子サルヰミットラに就て工巧明を學ぶ、習字板上の習字、五百種以上の文字、太子文字の自性を説明す。太子アルジュナに就いて數學を學ぶ、又弓術、擊劍、柔道を學ぶことを示さる、又天文學、醫學、歌舞、音樂等に至るまで其蘊奥を極めたることを示さる

第三十三節 悉達太子理想の婦人 六〇頁—六三頁

太子の理想的婦人の定義の詩、理想的婦人の撰定及び父王の注意

第三十四節 太子婚を擇ぶ 六三頁—六五頁

理想に適合の婦人耶輸陀羅女、父王太子をして城中の娘等に施物を與へしむ、太子は耶輸陀羅女に大なる施物を與ふ

第三十五節 競技結婚一名自撰結婚 六五頁—七〇頁

釋迦族の青年勇者等競技場に集る、提婆達多嫉妬心に依りて一歴して美象を殺す、悉達太子尸象を投げて道を開く、象谷の由來、文學數學等より高飛、游泳、競走、投石、劍術等の競技、射術の競技、箭泉の由來、太子耶輸陀羅女と結婚す、迦毘羅城の位置及箭泉の現在處、及其考証

第三十六節 太子の防水工事、慈悲心鳥類に及ぶ 七〇頁—七二頁

ロヒタ河水の氾濫、太子は提婆達多と諍ひて大雁の生命を保護す、優陀夷の毒蛇退治、太子大木を二つに折て氾濫の水源を防ぐ、途中觀相家の太子觀相、太子ゴーパー女を聚る、

第四章 四門出遊より成佛まで

第三十七節 四門出遊、老病死出離法を觀す 七二頁—七八頁

歌舞音樂の聲に出離を進むる歌、本生傳中の誓願を想起せしむる歌、太子東門に出で、老者を觀て驚く、南門に出遊して病者を觀る、西門に死者を見る

第三十八節 臍部樹下の禪定 七八頁—七九頁

大王太子をして農業を視せしむ、太子農家耕作の辛苦を觀す、太子墓所の死體を見て深く無常を觀す

第三十九節 父王に出家の出願、耶輸陀羅女との別離 七九頁—八二頁

太子二十九歳の四月八日愈々出家せんことを決心す、父大王の二凶夢、摩訶波闍波提夫人の八惡夢、大王太子の爲めに鹿生女を聚る、父王四門を防禦して太子の出家を防ぐ、太子は父王に出家せんことを願ひて遂に其許可を受く、太子の決心、耶輸陀羅女の惡夢、耶輸陀羅女と同衾せらる

第四十節 出家 八二頁—八七頁

出家時日の異説、毘沙門天王出家の梯道を作る、出家時の朝まで經たる國々及距離、三結髮塔にて太子は馬丁車匿に別る、塔前にて斷髮して黄色衣を着く、ヤセル史の因陀羅王の黄色衣献上説、三結髮塔の所在、菩提道順の實修に於て釋尊出家の實例

第四十一節 菩薩頻毘沙羅王の施國家を辭す 八七頁—九〇頁

棄惡仙人菩薩に花と果物とを供養す、阿囉羅仙人に遇ふ、阿囉羅、迦囉羅

の二仙人より無所有處及び非想非非想處の心の口傳を受く、菩薩究竟の解脱を得んが爲に尼連禪那河に向ふ、王舍城の所在、頻毘沙羅王の獻國家を辭して修道の決意を示さる、菩薩の苦行に依て大沙門と稱せらる、事、菩薩は淨飯王等より送りし侍者の中、阿若憍陳如等五人の止ることを許す

第四十二節 菩薩、尼連禪那河岸の苦行 九〇頁—九四頁

尼連禪那河の西岸林中にて一意惠心不動定に入る、六度の苦行、化度の諸縁を廣く結ぶ、菩薩美相沙門と名けらる、菩薩は善生女と悦力女との乳粥大供養を受く、菩薩華果有巖窟より出で、菩提樹下金剛寶座に向ふ、華果有巖窟は前正覺山石室にして現今のツング、シリールなる所以及其現在の處

第四十三節 華果有巖窟より菩提樹下まで 九四頁—九六頁

地神天神等の菩薩に對する行路の大供養、草賣吉祥菩提樹下の菩薩に草を獻す、菩薩樹下に草座を敷いて安坐す

第四十四節 降魔 九六頁—一〇二頁

草座上の金剛不壞の決心、十方諸菩薩の菩薩に對する大供養、菩薩は惡魔征伏の大光明を放て惡魔王等に挑戰す、魔王は千萬億の大軍を引卒して大に菩薩を攻撃す、魔王敗北す、菩薩と魔王との問答、菩薩の地証印、大地女神の証明、魔王三女を派して菩薩を誘惑せんことを、菩薩完全に諸魔を降伏す

第四十五節 成道 一〇二頁—一〇四頁

菩薩四諦十二因縁の法を知て廓然大悟す。一切衆生悉有佛性の宣言、十方諸佛の釋迦牟尼佛訪問、諸菩薩の供養恭敬、世尊七多羅樹高の宣言、諸天諸神の大供養、無量劫太古の成道佛の現示

第四十六節 秘密成道相及び成道時の迦毘羅城 一〇四頁—一〇六頁

佛の意體は阿迦尼瑟吒淨土に到て五現正覺より成佛する事、佛は黒赤の夜摩怒明王を化現して魔王を降伏せる事、頻毘沙羅王成道記念塔を佛陀伽耶に建つ、佛成道地及苦行林の現在地、世尊成道と同時に迦毘

第四十七節 成道後の七週間 一〇七頁—一一二頁

羅城にて耶蘇陀羅女羅喉羅を生む

佛世尊三十五歲成道初七日火界定に入て菩提樹を觀す。迦毘羅城中悉達太子死去の風説、耶輪陀羅女世人の疑惑を解く、二七日他化自在天にて大毘盧遮那經、大方廣佛華嚴經等を説く、三七日觀菩提樹、四七日海邊逍遙、五七日目眞隣陀池側禪坐、六七日尼拘盧陀樹下安坐、七七日沙羅樹竹林安坐、二商主の化度

第四十八節 勸請說法 一一二頁—一一四頁

世尊は衆生が深甚の法の解し難きを慮て無言にて深林に住せんとす。大梵天王世尊に説法を勸請す、帝釋天、大自在天の説法勸請、尸棄大梵天王の説法勸請及問答並に説法の事を許さる

第四十九節 世尊説法觀機及び伽耶山にて普走の徒に遇ふ 一一四頁—一一六頁

世尊阿若憍陳如の五人に説法せんと決せらる、菩提樹の四神は適當なる説法處を撰定せられんことを請へり、世尊婆羅痾斯に向ふ、普走の徒

近行と云ふ者世尊に其教師の誰なるやを問ふ、婆羅痾斯國鹿野苑仙人  
墮處の現在地、見美龍種等世尊に午飯を供養す、世尊恒河を渡る、頻毘沙  
羅王特に比丘衆より渡船賃を取ることを禁す

第五章

初轉法輪より靈鷲山說法に至る

第五十節

鹿野苑初轉法輪 一一六頁——一二〇頁

阿若憍陳如等の五人世尊を敬禮せざることを互に約す、五人は世尊の  
徳相に感じて約を破つて世尊を敬禮す、世尊自らを呼んで憍多摩と稱  
することを禁せらる、五人迎佛處の遺跡及び考證

第五十一節

初轉法輪の二 一二〇頁——一二六頁

諸天諸菩薩等の寶座建立、佛身光明を放て十八瑞相を現す、又十方來集  
の諸菩薩梵天帝釋等は世尊に說法を勸請す、世尊未明に五比丘を呼ん  
で苦集滅道の四聖諦の取捨法を三度轉す、三寶存在の起源、總知の解釋  
阿若憍陳如は阿羅漢を得、他の四人は諦を見たり、遂に四人も阿羅漢果  
を得、十方諸佛無言の所由、諸天人等初轉法輪塔を鹿野苑に建つ、其形状

並に其現に存する處

第五十二節

優婆塞優婆私迦の起源及び布教師派遣 一二六頁——一二七頁

婆羅痾斯の長者德賢鹿野苑に最初の精舎を建立して世尊に献す、俗人  
譽持阿羅漢果を得、可畏、迦旃迄子、優陀夷等說法の爲めに諸國に派遣せ  
らる

第五十三節

三迦葉波の化度 一二七頁——一二八頁

世尊優樓頻螺迦葉波の毒龍の火室に宿て毒龍を降伏して同迦葉波を  
化度す、那提迦葉波伽耶迦葉波をも化度して彼等の弟子一千人をして  
阿羅漢果を得せしむ

第五十四節

頻毘沙羅王の奉迎、帝釋天の問訊 一二八頁——一三二頁

頻毘沙羅王世尊を招待す、世尊衆人の疑念を晴らす、頻毘沙羅王諦を見  
る、同王は世尊に自の手にて飲食を供ふ、迦蘭陀竹苑の建立及其現在處  
因陀羅勢羅窟中にて世尊帝釋天の爲に法を説く、及其巖窟の所在

第五十五節

舍利子、目犍蓮子及長爪梵士の得度 一三一頁——一三四頁



舍利弗小傳、目犍連子小傳、舍利弗佛弟子馬勝普走の二人に遇ひ四諦の  
偈を聞いて佛弟子たらんと決心す、目連子舍利子と志を同ふす、魔王は  
二人の佛道に入るを防んとす、二子は二百五十人の弟子と共に佛弟子  
となる、三迦葉波の一千人の弟子にて一千二百五十人となる、五百の  
魔女佛に歸依す、魔王の大悲歎長爪梵士の得度及阿羅漢果を得る事

第五十六節 大迦葉波及諸大弟子の得度、遠國に布教師派遣 一三四頁—一三六頁  
大迦葉波小傳、佛弟子となつて阿羅漢果を得、大迦葉波と名づけらるる  
所由、摩訶拘絺羅の長爪梵士たる事得度後阿羅漢果を得、懺悔基歷法、世  
尊大迦旃延を鄔闍衍國に派して最照王及國民を化度せしむ

第五十七節 火生長者の出生 一三六頁—一三八頁  
ジャイナ教信徒甚賢其妻を殺して世尊の讒言を虚妄ならしめんとす、  
ジャイナ教裸體子世尊を罵詈す、世尊甚賢の妻の火葬場に行き給ふ、著  
婆童子世尊の命を奉じて火中の蓮花中より赤子を取り出す、其子を火生  
と命名す、後に長者となる、火生の原語の異義

第五十八節

逝多林給孤獨精舎の建立 一三八頁—一三九頁

給孤獨長者世尊に法を聞いて優婆塞となる、給孤獨長者室羅筏悉底城  
に祇苑精舎を建立して釋尊及其一行を迎ふ、波斯匿王問答の後世尊に  
歸依す

第五十九節

如來父王に遇ふ、阿難陀の得度 一三九頁—一四三頁

淨飯王優陀夷を使者として世尊に歸城を招待す、優陀夷の出家得度、淨  
飯王尼拘盧陀精舎を新に佛の爲めに建立す、淨飯王の不平、世尊父王の  
我慢心を破る、如來父子相遇の禮、世尊の說法七萬人の釋氏をして諦を  
見せしむ、阿難陀無意識に世尊に隨從す、阿難陀の出家得度

第六十節

孫陀羅難陀、羅睺羅、提婆達多等の出家 一四三頁—一四五頁

孫陀羅難陀の妻女愛着、世尊方便にて彼の愛着を破りて出家得度せし  
む、耶輸陀羅女自殺を謀る、世尊說法耶輸陀羅女諦を見る、羅睺羅出家得  
度す、世尊父王の爲めに父子相遇經を説く、提婆達多、離婆多、善星等の出  
家得度、世尊は摩訶那摩の妻の婢女に法偈を文字に誌して與へらる、同

婢女死して眞珠女と生るゝこと、優波離及六群等の出家得度

第六十一節 世尊母后の爲めに上天說法す並に佛像の起原 一四五頁—一五〇頁

佛、三十天にて項髻より白傘蓋眞言を發聲し給ふ、世尊無垢寶光天子を救護す、世尊阿留母尼迦寶石上に夏安居を結ぶ、世尊不動忿怒明王を出現して暴惡人等を調伏す、婆羅痲斯國の優多羅衍那王牛頭梅檀を以て佛身を彫刻す、目蓮尊者世尊に降天を請ふ、世尊降天、信佛者等降天の卒堵婆を建つ、無煩第一の須菩提

第六十二節 婦女子の家出許可、吠舍釐國等の化度 一五〇頁—一五二頁

優曇彌夫人佛に三度出家せんことを願ふ、阿難陀は夫人の爲めに婦女子の出家を許されんことを強いて願ふ、世尊遂に是れを許す、憍多彌夫人五百の侍女と共に出家得度して比丘尼となる、耶輸陀羅女の出家得度、彌猴池精舎の建立、世尊憍賞彌國王教化

第六十三節 善星比丘の邪見 一五二頁—一五五頁

善星比丘の不和合、善星不救護の難門、十二分教を暗誦して寸信なき所

の善星、裸躄子の懺悔、善星に出家を許せし理由

第六十四節 阿難陀侍僧となる、諸國の化導 一五五頁—一五七頁

阿難陀多聞の博學者となる、世尊侍僧を求む、目連連舍利子合議の上阿難陀を侍僧に奨む、阿難陀侍僧となるに就て三事を要求す、世尊王舎城にて餓鬼道に陥れる五百の商人の爲めに說法す、世尊諸國諸處の教化

第六十五節 諸國に化度して諸經を説く、及靈鷲山の說法 一五八頁—一六一頁

簸有城の成滿深く佛を信じて後出家す、成滿神通力を以て其兄の難船せんとするを救ふ、釋尊簸有城の往復行路中の化度、世尊無熱惱池岸にて同龍王の爲めに說法す、西方光明國に生れたる賢女化度、那蘭陀にて新比丘衆の爲に法念處を説く、靈鷲山の所在、世尊靈鷲山に如來心經を説く、世尊王族の子に問勇施經を説く、又々靈鷲山の說法

第六章 戒律成立より大迦葉波に半座を分つに至る

第六十六節 四波羅夷罪戒律の制立、及看病法の制立 一六一頁—一六四頁

比丘賢施家に到て其妻と媾合を行ふ、世尊第一根本重罪として比丘比

丘尼の男女媾合を禁する制戒を立つ、美歎喜、迦賓那、乾毘羅等出家得度す第二根本重罪盜罪の制立、悲心第一の畢陵陀婆蹉の爲めに世尊は看病の學處を説く、婆羅門因由の弟子五百人出家す、隱覆比丘六十人の比丘を殺す、世尊第三根本重罪として人を殺すことを禁せらる、大魚の濟度第四根本重罪人法師妄語隨罪の制立 一六四頁—一六八頁

第六十七節

諸人の化度、憍梵波提及離婆多の出家得度

蓮華心婆羅門嘲笑の世尊を世人に示す、世尊爲めに教化す、諸方の教化、婆羅門因陀羅世尊の項相を知らんとして失敗せり、佛の教を受けて項相を見て大に佛を信せり、憍梵波提舍利弗に就いて出家得度す、世尊靈鷲山に於て菩薩乘經を説く、阿難陀摩揭陀國の野畔を摸形としたる法衣を世尊に上る

第六十八節

外道の六師等世尊に競争神通を挑む

——一六八頁—一七三頁

クリタ・カール等の外道の六師は世尊に神通競争せんことを挑む、同六師等頻毘沙羅王に世尊と神通を競争せんことを願ふ、世尊神通競争許

容の後七日にして吠舍離國に行く、六師等世尊の後を追ふ、世尊七日の後瞻波國に行く、世尊婆羅痾斯並に迦毘羅城に行く、六師等總て世尊に後を追ふて非常の慢心を起す、世尊室羅筏悉底城に行く、六師等波斯匿王に世尊と神通競争の事を願ふ、波斯匿王大集會を作る、六師等助力者を諸方に求む、阿難陀如來の威神力にてクリシュナの支體を元の如くに還す

第六十九節

如來大神通を現はして六師を降伏す

一七三頁—一七九頁

六師等先づ大集會場に來て使を波斯匿王に派せて世尊の來會を促かす、世尊空中より會場に至る、世尊祇苑精舎に歸て大光を放て會場を燒く、六師等巧の言失敗に歸す、第一日の現七寶大樹神通示現、第二日現寶石大山神通、第三日現七寶浴池神通、第四日現條水法音宣揚神通、第五日現無苦光明神通、第六日現知他心神通、第七日現各々成轉輪聖王神通、第八日大地震動せしかば六師等は仙人等に補助に來れと請へり、五百仙人等來て佛を信じて出家得度す、聲聞共通の神通を示さる、又諸大神通

を示さる、六師は互に譲りて神通を示すこと能はず、世尊示現の羅刹鬼等は六師の座を破壊す、六師諸方に逃ぐ、六師等の弟子九萬人佛に隨つて出家得度す

第七十節

六師降伏後の神通示現及其塔建立 一七九頁—一八一頁

第九日佛身梵天にまで満ちて妙法を顯示する神通、第十日佛身色究竟天まで増長する神通、第十一日佛身消失光音説法の神通を示さる、第十二日慈心三昧の光明、第十三化佛光明神通、第十四日散華大供養神通、第十五日百味食を一々の人々に供施し地獄の苦を減する光明を放つ

第七十一節

第二轉法輪般若部の説教及び化導 一八一頁—一八六頁

世尊靈鷲山にて大般若經を説く、又他の諸國に於て大方廣佛華嚴經、大寶積經、三昧王經等を説く、華嚴等を般若部に屬する事、外道仙人護摩を焚く者五百人を化導す、畢舍遮鬼の降伏及出家得道、迦毘羅衛國林中神鬼類等の教化、世尊室羅筏悉底城に於て須菩提の爲めに能斷金剛般若經を説く、靈鷲山の淨境たる説明

第七十二節

經部第三轉法輪に就て 一八七頁—一八九頁

第三轉法輪は經部の注釋の説、世尊摩羅耶山にて最勝眞實義を説く、三轉法輪時限の異説、般若經は無上大乘の經典なる所由

第七十三節

世尊秘密眞言の法輪を轉す 一八九頁—一九二頁

世尊聖米丘塔に於て吉祥時輪經等の秘密經を廣く説き給ふ、聖米丘塔の所在に就て、四部秘密經説處の諸處、四部秘密經の解釋

第七十四節

秘密經を非佛説なりとする説及佛説なりとの證説 一九二頁—一九六頁

釋尊は經部の諸經のみを説いて秘密部を説かれざりしとする説、佛普陀落山にて不空羅索眞言等を説く、阿迦尼瑟吒國に大毘盧遮那經等を説ける事、世尊聖米丘塔にてシャンバラ國王月賢の爲めに多の無上秘經を説く、彌勒菩薩世尊の秘經を説かれたることを讚歎す、佛烏仗那國にて因陀羅菩提王の爲めに秘密集秘經を説き給ふ、我國眞言宗徒の注意せざるべからざる要點

第七十五節

如來は種々の身と種々の言語を以て法を説かれたる事 一九六頁—二〇〇頁

報身の説法も亦世尊の説法たる所以世尊轉輪聖王の身を現じて劫寶那王を説伏せし事、無上秘經時輪經は應身の釋尊の説かれし事、無上部の曼珠師利名義經及幸福最勝秘經等も亦應身の説、衆生各自の言語を用ひて説法せられし事

第七十六節

諸の秘密經を説かれし事、並に錫蘭王女の化度 二〇〇頁——二〇四頁

世尊前生の父に遇ふ、世尊大乘寶王莊嚴經等の諸秘密經を説く、西藏に初めて佛教の入りし事に就いて、世尊大自在天と其妃中道女に成道の授記を與へらる、錫蘭島王の女眞珠如意樹女印度商人に托して佛に書を上る、世尊畫師に自らの像を畫かして眞珠如意樹女に送る、同女三度上書の前に於て入流果を證す、同女三個の大眞珠を世尊に上る

第七十七節

給孤獨長者の娘結婚して裸體子を拜せず 二〇四頁——二〇六頁

賢女夫家尊崇の裸體子を拜せず、世尊神通力にて甘蔗増城に行いて賢女に説法して入菩薩乘果を得せしむ、世尊賢女の因位を説いて成佛の授記を與へらる

第七十八節

提婆達多阿闍世王に結托して比丘衆の分裂を謀る 二〇六頁——二〇九頁

王舎城の大飢饉、神通比丘衆の自給、提婆達多神通力を得んとして世尊及阿若憍陳如等の五百羅漢に其を教へられんことを乞ふ、十力迦葉波彼に神通を教ふ、提婆達多神通力を示して未生怨王を己の信者となす、提婆達多は世尊に僧伽を付屬せんことを乞ふて許されず、提婆達多僧伽の不和合を謀る、提婆達多善星の比丘五百人を引いて分裂す、舍利弗目犍連僧伽の統一を謀る、僧伽統一の窣塔婆建立

第七十九節

釋尊半座を大迦葉波に分つ、摩登伽女の濟度 二〇九頁——二二二頁

世尊室羅筏悉底城にて大迦葉に半座を分つ、阿難陀摩登伽女に誘惑せらる、世尊摩登伽女を出家得度せしめて阿羅漢果を得せしむ、世尊憍賞彌國に手統を教化す、優陀耶王の教化、世尊病惱耆婆醫藥を獎む

第七章

阿闍世王の父王逆殺より牛角山の讒言に至る

第八十節

提婆達多の支暎により未生怨王其父頻毘沙羅王を逆殺す 二二三頁——二二七頁

提婆達多世尊を滅する方法を考ふ、未生怨王小傳、未生怨王提婆達多の

勸言に依て父王を弑せんとす、未生怨王父王を獄に投ず、未生怨王の子  
ウダヤ・バハドラ潰瘍を病む、未生苑王の感激、父頻毘沙羅王の死

第八十一節 提婆達多佛世尊を弑せんとす 二一七頁—二二二頁

提婆達多未生怨王と共に戦術師を送りて世尊を弑せんとす、戦術師の  
遁逃、五百兵士の聴法、提婆達多大石を以て世尊を打つ、大石の小片世尊  
の足を疵つく、羨婆童子の投薬、哥珂理迦怒て提婆達多を殺さんとす、未  
生怨王市民の佛及比丘衆を供養するを嚴禁す、世尊狂象寶護を降伏す  
裸躰子及吉祥密は火穴又は毒飯にて世尊を殺さんと謀る 二二二頁—二三三頁

第八十二節 裸躰子及吉祥密は火穴又は毒飯にて世尊を殺さんと謀る 二二二頁—二三三頁

火生長者吉祥密の師たる満子を迎へて供養す、吉祥密火抗毒飯を設け  
て世尊を招待す、世尊猛火を蓮花に變ず、吉祥密大に佛を信す、火生長者  
の光輝の宅、頻毘沙羅王七度、家を火生長者と交換す

第八十三節 鬼子母神の化度 二二三頁—二三八頁

王舎城の樂叉薩多婆佐と迦陀囉國の樂叉般遮羅との親交、薩多婆佐の  
女歡喜作後に鬼子母神となる、歡喜作女般地迦の妻となる、歡喜作女二

度王舎城中の赤子を殺し食はんとす、歡喜作女五百の子女を卒いて赤  
子を殺食す、世尊鬼子母神の愛子を隠す、鬼子母神狂氣の如くに其子を  
求む、世尊鬼子母神を化度す

第八十四節 調有僑賞彌國に迦藍を立つ、著婆小傳 二二八頁—二三二頁

調有五百の仙人をして出家得度せしむ、又祇苑精舎と同一の伽藍を僑  
賞彌國に建立す、貧女待作世尊を尊信す、烏陀夷花鬘比丘尼に接吻した  
る罪を懺謝す、著婆の小傳、世尊諸仙人及著婆に對して醫療の秘經を説  
く、四天王の郷里

第八十五節 指鬘婆羅門の化度、世尊過去佛の舊跡を指示す 二三二頁—二三六頁

婆羅門童子無惱、指鬘と名つけらるゝ所由、指鬘世尊を殺さんとす、世尊  
の教語指鬘を懺悔せしむ、菴牟羅女世尊を供養す、世尊ロヒタ國の林中  
に四佛の坐を指示せらる、ロヒタ國四佛座の所在

第八十六節 無量壽經の説法及貧女の一燈 二三六頁—三三九頁

世尊優波拘多に對する讖言を宣す、佛因位五百生間の母に遇ふ、佛阿羅

漢となるの簡約法を示さる、大信心の燃ゆる貧女の一燈、佛の説法、波斯匿王積徳の慢心を消滅す

第八十七節 阿闍世王の化度 二三九頁—二四二頁

十六ヶ國の王等阿闍世王の暴悪を憎んで殺さんと決議す、摩揭陀國の早魃、韋提希夫人阿闍世の積悪を數ふ、阿闍世王特使を派して世尊を請待す、世尊摩揭陀國に行て阿闍世王を濟度す、耆婆阿闍世王を獎めて世尊に大象行列して大供養を行ふ、阿闍世王の大懺悔、阿闍世王と波斯匿王との戦争、世尊阿闍世王癩病を病めるを洗淨及眞言を與へらる

第八十八節 提婆達多の墮獄 二四二頁—二四六頁

阿闍世王は提婆達多及其徒の俸録を斷つ、悉地迦羅迦葉波、提婆達多に死後の無存在を説く、提婆達多世尊の足に毒藥を散す、提婆達多地獄に墮つ、世尊提婆達多に授記せらる、舍利弗目捷連提婆達多を地獄に訪問す、提婆達多の弟子哥迦利迦舍利弗目捷連を怒る

第八十九節 吠舍釐共和國難攻不拔の七原因 二四六頁—二四九頁

阿闍世王吠舍釐を降伏せんとする可否を世尊に問ふ、世尊吠舍釐國の能く和合する等の七徳を説明す、又僧伽の敗られざる七原因を説明す、世尊財有の午飯招待に應ず、財有の大供養を爲す、老生出家得度して阿羅漢となる

第九十節 毘盧擇迦王釋迦一族を塵殺す 二四九頁—二五二頁

毘盧釋迦父波斯匿王を弑せんとして讓位を受く、毘盧擇迦王釋氏一族を滅す爲めに進軍す、世尊枯木の下に立て王の進軍を還さしむ、釋尊釋迦一族をして大抵諦を証見せしむ、大臣母害毘盧擇迦王を煽動す、釋迦一族無抵抗に決す、釋迦王波羅勢羅パークに行て世尊項髮塔を作る、釋迦一族塵殺せられし時世尊頭痛を病む、毘盧擇迦王の死後、世尊廣博仙人問經を説く

第九十一節 妙法蓮華經等の大乘經を説く 二五二頁—二五三頁

世尊靈鷲山に於て舍利弗等の爲めに妙法蓮華經を説いて多くの大衆に成佛の授記を與ふ、普賢菩薩善財童子に普賢の行願を説示せらる、世

尊淨居天にて華嚴部曼珠根本解を説く、大愛道比丘尼及烏陀夷等の入滅  
第九十二節 佛陀の示病、牛角山の讖言 二五三頁—二五七頁

佛陀の示病に就て阿難陀大に憂ふ、世尊摩羅國にて大石を破碎し力士等の慢心を破る、世尊毘沙門天王に牛角教示山を托す、同山に對する讖言青銅國即ち于闐國の事、コマサラカンダハ塔に就て

第八章 釋尊入滅の宣言より入滅に至る

第九十三節 釋尊入滅の宣言、舍利弗目犍連等の入滅、世尊大迦葉波に正法を付屬す 二五八頁—二六一頁

世尊漕波羅塔の前にて阿難陀に在世の請を容れんとの言を三度發せらる、阿難陀睡魔に襲はる、魔王世尊に入涅槃の時至れることを説く、純陀の請を受けて世尊三ヶ月后に入涅槃せんと宣言し給ふ、入滅の凶徴現はる、彌猴地側樓閣にて世尊舍利弗の爲に獲得無量門の眞言を説く、舍利弗の入滅、目犍連の入滅、給孤獨長者二尊者の塔を建つ、世尊大迦葉波を滅後の教主となす

第九十四節 聖米丘塔及曼荼羅の説明 二六一頁—二六四頁

聖米丘塔の由來、同塔内曼荼羅の説明、觀世音菩薩の白石像、多數の瑜伽行者、大自在天、梵天、バルグタイ妃の崇拜者、彼等の身支焼供養、大塔の地勢、聖米丘塔の現所在地

第九十五節 世尊西藏新教派の依經たる時輪秘經を聖米丘塔に説く 二六四頁—二六七頁

シャンバラ國王月賢米丘塔にて世尊より時輪秘經を聽かんとす、シャンバラ國の説明、世尊月賢王の爲めに最初の佛陀時輪經を説く、諸の秘經を總稱して金剛乘と名ける事

第九十六節 入楞迦經の説經、古派依經の説經 二六七頁—二六九頁

世尊楞迦島に行いて入楞迦經を説く、世尊入涅槃三ヶ月前に金剛手集經等凡そ七十五萬偈を説明せらる、外に瑜迦行者行女の秘經無量に説明せらる

第九十七節 世尊有金河を渡り入涅槃地拘斯那揭羅城に向ふ 二六九頁—二七二頁  
世尊拘斯那揭羅への途中背を病まる、世尊有金河にて身を洗はる、有金



河の位地及異同、大唐西域記及法顯傳等の説明

第九十八節 准陀の家及其供養に就て 二七二頁—二七五頁

玄奘の指定せし准陀の家の跡、是れ如來遺體茶毘の處、准陀は世尊に豕肉を上りしとの説、スーカラ、マツダナの二義、如來木耳を受けられし事

第九十九節 釋尊入涅槃地拘斯那揭羅城の所在地 二七六頁—二八二頁

阿奴盧陀巴村の所在地、大唐西域記の記事、現今のマタクワル寺が佛入滅地たる事、拘斯那揭羅の位地に就て法野傳、現今のカーシャ驛、マタクワル寺の佛入滅地たる証説、位地に就て異説、マタクワル寺の現在の實境

第一百節 世尊最後化度の一 二八二頁—二八五頁

世尊拘尸那揭羅城外娑羅林中に入る、佛大涅槃經を説く、世尊諸の羅漢等に入滅せずして法を護るべしと命せらる、阿難陀の悲哀、世尊音樂師の名手最喜を化度す

第一百一節 世尊最後の化度の二 二八五頁—二八六頁

第一百二節 釋尊般涅槃那に入り給ふ 二八六頁—二八八頁

世尊普走の徒蘇跋陀羅を化度す、蘇跋陀羅阿羅漢果を得て先づ入滅す、釋尊般涅槃那に入り給ふ、世尊遺教を説き給ふ、世尊衣を去らしめて如來身を示し給ふ、娑羅双林中如來北首し給ふ、西藏的理由、聖諦不滅の如來、入滅を示さる理由、四月十五日中夜世尊入滅し給ふ

第一百三節 佛遺身の荼毘 二八八頁—二九一頁

佛遺體は轉輪聖王の葬法に隨ふ、遺體を鐵函に收む、遺骸を奉じて拘尸那揭羅城を七週す、荼毘の火自ら消滅す、摩訶迦葉波、摩揭陀國に在り世尊の入滅を知て拘尸那揭羅に向ふ、阿難陀及阿泥盧陀は摩波迦葉波に教主たるべしと請ふ、大迦葉波遺身を拜す、三界の火にて佛身は焼けず、遺骸自身より火を發して焼く

第一百四節 佛舍利の分配 二九一頁—二九四頁

帝釋天と羅刹鬼王佛の牙齒を得て返る、阿泥盧陀佛舍利を保護す、八個の黄金函に佛骨を移す、諸國の國王等集りて遺身の舍利を得んと願ふ

力士等佛舍利の分配を拒む、大に争ひて戦争を起さんとす、阿泥盧陀佛舍利を以て空中に上る、大迦葉波、ローナ等を引いて彼等を説得して和解す、遺身舍利を八部に分つて八ヶ國の國王及族長に分與す、佛舍利八大塔は八ヶ國に建つ、炭塔建立

第百五節

釋尊入滅年代の異同 二九四頁—二九九頁

第百六節

西藏に存する異説二十種、入滅の月日、佛道修行者の異説に對する觀念、教法存在期間及入滅年代の異同に就て 二九九頁—三〇六頁  
如意寶樹史著者智勝得の説、白瑠璃著者佛海の取れる説、南方佛教徒と同説カーチエ、パンチエンの説、佛教存在期間の異説、六萬年存在説の解釋、西藏に廣く用ひらる五千年教、法存在説、佛入滅四月十五日説の確定、善見毘婆沙説の穩健

第百七節

釋尊傳讚 三〇六頁—三〇八頁

佛陀世尊の三密傳記は唯だ佛と佛とのみ知れる境界、梵天帝釋等も知ること能はざる境界、眞實菩提心を起すには先ず佛傳を知るの要ある

事

第百八節

如意寶樹史佛傳十二相と百二十五相 三〇八頁—三一九頁

佛傳十二相、釋尊の傳記中大なりと思はるゝもの百二十五相を撰ぶ

西藏傳印度佛教歷史上卷目次了

# 藍毘尼苑の朝の空

慧海

三六

天上天下唯我獨尊と、

雄勢今も此處に見る、

赫々耀々の旭光は、

銀光殿を照すなり、

世界最高の雪峯は、

おほろに光れり西北には

北の空には巍々堂々、

眞白雪嶽の眞光は

其山列には魚尾雲峯、

無名の雪の峯々は

嗟呼釋尊の生れ給ひし藍毘尼苑、

佛日の光輝に依りて増す、

心性獨立の實を叫ばれし、

藍毘尼苑を朝の空。

雲間に高きひまらやの、

宇宙の莊嚴具足する。

東の空の雪の上、

歡喜ヶ嶽は輝けり。

寰宇を斷破す妙莊殿、

最勝光を待つ如し。

解脫雪嶺聖靈峯。

朝日に如來の光輝待つ

宏壯絶大の妙光は、

法の光のながれ盡させじ。

## 西藏傳印度佛教歴史

河口 慧海 著



### 上卷 釋迦牟尼佛の傳

#### 第一章 拜語より藍毘尼苑名義の起原に至る

第一節 拜語及分類。(初に如意寶樹史に誌せる翻譯の拜語を誌し、次で同著者ス  
ンバケンボの著作の拜語を譯すべし)。

妙音大士に敬禮し奉る

(妙音とは曼珠師利菩薩の異名にして、梵語に Manjughosha と云ふ。法華經の妙音菩薩は梵語に Sughosha にして、大日經大疏の妙音天は梵語に Sarasvati にして即ち辨財天の事なり。譯名は同じけれども原語は皆別なりと知るべし) 無上道心起し給ひて 一切衆生の菩提の爲に

福智二聚の力に依り

解脱の道に有縁者等を

人天の導師と法王子に

老いたる人も若者も

鹿等か叫ぶこへんくの

我を忘れて捕へらる

社會の表に美なるため

或か歴史は支離滅裂

或は省略多きため

佛陀の道のその歴史

次第を説くべしいざさらば

(是の如く著書の初に於て拜語を誌すは、印度、西藏に行はるゝ慣例にして、著者の歸宗する所を明かにす。始の二聯八句は佛菩薩を禮拜して其加被を祈り、次の三聯は佛教歴史を著作することの必要を説き、終の一聯は其著述の所期を述べた

惡魔を下して成佛し給ひて

導き給ふに巧みなる

共に禮拜す吉祥賜はれよ

學者も愚者も其耳は

いろくくに響く快さに

其聲作れる歴史家は

彼等は學者と云はるれども

眞實の精を失へり

意義ぞ少しそれ故に

法王外護者の顯はれし

注意して聽け諸人よ パクサム、ジョン、サン、壹頁

り)

世尊の大業に依りて世界に幸福功德を完全に與ふる所の唯一源泉たる佛教は無垢清淨の者なり。されば是れを永遠に傳ふる爲に説明し又是れを實行成就するは誠に必要なる大業なり。此大業たるや法王及菩薩並に教法を護持する所の諸大士に係れり。故に是れより佛陀と妙法と護法僧俗との起れる所以を稍や廣く説くべし。説明を大に分つて二となす。

第一 釋迦牟尼佛の世に出で、説法せられし事實及び其教法の世に存在せる次第

第二 外護の法王、傳燈高僧諸派宗祖等の起りし事歴を稍や廣く説明す。

先づ第一に於て、普通に無上菩提の心行大願を成就し給へる佛陀は、其國土に於て多くの衆生の機根熟するや、彼世尊は其世に出で給ふ。されば何れの時に佛陀は世に出で給ふか。現在の賢劫時に於ては佛陀は何時何處に出世し給ふか等の次第よりして、特に此娑婆世界に釋迦牟尼佛出世し給ひて説法せられし史實を説くべし。  
第二節 佛陀出世の國土。論藏に依れば業に因りて諸種の事現はるゝあつて、世

界の出現する所以は衆生の共有せる業力の結果として、所依の世界の存在するに至る。其存在するに至るや、壞劫空劫成劫の三期を経て現今の住劫に入れるものなり。此國土は四大洲に分たるゝと雖も、佛陀の出現して住せらるゝ所は南瞻部洲なれば、先づ此洲の特徴を誌すべし。パグサム、ジョンサン、二、三頁

(古代の印度人は南瞻部洲を以て印度國の異名とせり。然れども如意寶樹史及其他の西藏傳には印度外の諸國をも南瞻部洲の内に記入せり。特に如意寶樹史には南瞻部洲の特徴と題する中に此等の國名等を列記したれば以下譯すべし)

三世諸佛の留錫地即ち印度國の中央なる金剛座(昔の大覺寺、今の佛陀伽耶)より四方に百二十八英里の廣袤を有する摩揭陀 Magadha 國は正法の誕生地にして、遙かの東方には曼珠師利菩薩の淨土たる支那五臺山あり。南方には觀世音菩薩の普陀落山(錫蘭或はジャワ)多羅佛母の吉祥山(黑峰峯)並に聖米丘塔(南天鐵塔)があり。西には金剛手薩埵の淨土にして茶枳尼天女の秘藏地たる烏仗那國「現今の Sindh にしてペシヤワラの北」及び迦濕彌羅國あり。北方には七法王並に二十五大外護者の住地たるシヤンパハラ國「現今のバクトリヤ及び土耳其國」にあり。東北には

四圍に雪峯を有する西藏國あり。摩揭陀國より正北方に九の黒山脈を越えて、大白在天(濕婆)の住地たる雪峯チーセ(カイラス雪峯)と藥山との間に阿耨達多龍王の住する阿耨達多池即ち無熱惱池(今のマナサル湖)あり。此池の四方より四の大河を出せり。其名を恒河、印度河、縛芻河、私多河と云ふ。此池の左側に瞻部樹(菩提林樹)あり。其果熟して池水に落る時ジャンプと發聲す。是れ瞻部洲の名の起れる所。以なり。此洲の四大山は、北には崑崙雪峯及カイラス山(ヒマラヤ山脈を含む)聳へ、南には頻泥耶山脈並に摩羅耶山脈連れり。

猶ほ此外に神、人類、捷達婆(香を食する音樂の神)、秘密行者等、即ち兩足者の住する所の黄金洲(ジャワ)、赤銅洲(錫蘭嶋ならんか)ヴダラ、ツイバ(棗樹島)等五百の諸島は海水を以て隔つと雖も、其島根は此南瞻部洲と連續せるなり。此外ヤブナ國(波斯、希臘、或は歐洲を含む)、メツカ(廻教徒の最靈地)、カンボジャ、海隅(日本か)、アングラ(英國)、ウラシヤ(露國)、等あり。野蠻國人には犬顔、狐顔、蜥蜴顔、空顔、無鼻、向運顔、裸體、爬行人等あり。此等の小國一千有餘ありて、此等を總ぶる時は十八或は十六の大國並に三百六十の邊國及び人跡未到の俊嶮なる大谷十八あり(此外秘密佛



る婆羅門にも又成佛の授記を與へられたりき。然して九百九十八人の王子を拘留  
孫<sup>クラクチャ</sup> Krakuchanda 佛等と賢劫出世の諸佛に授記し海塵の侍者五人も、又賢劫中の佛た  
るべしと授記し、千弟子の末座も、成明如來となるべしと授記せり。されば賢劫中一  
千五佛、(海塵、九百九十八王子、海塵の侍者五人、及び千弟子の末座)の出世ある事明  
かなりと知るべし。

次説に依れば、往古明劫の麗現劫中、莊嚴世界に於て無邊寶世莊嚴王佛出世せり。時  
に四洲を領する轉輪聖王の護國王は清淨宮に住せり。彼王に一千の王子及び二の  
大臣あり。一を化生法心と云ひ、他を法臣と云ふ。王は彼佛を禮拜供養して聽法せり。  
其後王自ら千子の菩薩たることを知り、誰か始に成佛するかを知らんと欲し、一千  
王子の名を一々紙片に誌し、此等を寶瓶に封入し、七日間供養の後、一々取出せしに、  
始に淨智王子の名出でたれば、彼を拘留孫佛とし、他の九百九十八王子を拘那含牟  
尼佛等とし、最後は無邊意太子にして、歡喜佛と名づけたりき。(此寶瓶抽籤法の典文  
か後世、西華法王撰定の法規を作りし根據となれり)時に一千の王子は二大臣に汝  
等は如何なる誓願を爲せしかを尋ねしに、法心答へて曰く、臣は一千佛の秘密法藏

を結集する者、即ち金剛手たらんと發願せり。法臣は曰く、臣は一々の佛に轉法輪を  
勸請する者たらんと發願せり。是れ後世釋迦牟尼佛出世の時、尸棄梵天王となりて、  
佛に説法を勸請せり。是の如くなれば賢劫中に一千佛出世すべし。又彼時の護國王  
は既に成佛して燃燈佛となれりと説かれたり。

第六節 賢劫の名の起原。賢劫の以前に、世界が大水の爲に破られて大海となり  
たる、其中に一千の黄金蓮華生じたりき。淨居天の神等は是を見て、此劫中千佛出世  
の善微なりと了知して、此劫善なりと叫びたりしかば、此劫を善劫と名づけたりと  
白蓮華經「悲華經」か、方廣智經等に賢劫の始に千の蓮華を見たりと同一の説明あり。

バクサム、ジヨンスン一五二六丁

(此劫を漢譯には古來賢劫と譯せり。然して藏譯には Bhadrakṣaya 善と譯せり。而して梵語  
Bhadra は善、幸福、吉祥、歡喜、美、善性等の譯ありて、直接に賢と言ふ義なし。若し賢の  
字を卓越善、或は美の意に用ひたりとすれば原語と相違する所なし。されば普賢  
Samanta Bhadra の賢の如きも、此菩薩の行を表する者なれば、賢を知者の意に解せ  
ずして、行の善、美、卓越等に解する方、其當を得たりと云ふべし。但し大論に此劫を  
善劫としたるは西藏譯に一致する者と云ふべし)

第七節 増劫減劫の別 小乘論藏の説に依れば佛は減劫中に出づとあり。人壽八萬歳より百年毎に一年宛減じて、人壽百歳に達する間に於て、人類は大に後悔心あるを以て濁惡其極に達せず「法を聽くの可能性あるを以て」佛は其間に出づるなり。此事たるや賢劫中の佛陀に限ることにして、他の劫波及世界に對しては必ずしも是の如くなるべしと云ふには非ず。何となれば悲華經には拏指世界に於ては人壽十歳の時、其人體の大き拏指程あり。斯かる人類の間に於て、歡喜星佛出世す。其身長一腕七指約「二呎十一吋」あり。又人壽八萬年の前にも多くの佛の出世のあることを説きたればなり。パグサム、シモンサン、二六頁

第八節 人類の起原 劫初の時南瞻部洲に人間の生じたる起原は、既に彼四王天以上の天國に於ては、全く動物「天人」の生存するに至て後、光音天 Pṛabha-Svāra 「天國の天人は光を以て言語に代用す」の天人たる日最照と月無垢との二人化して、此土に生れて後、次第に化生の人間増加せり。當時の人間は非常の長壽にして、其身長も人壽百歳時の人の身長に換算すれば三十二肘ありしと云ふ。彼等は禪定食に依りて、自身より出づる光明と神通力にて遊行する等、殆んど四禪天の神と同様なり

き。然れども其宿福の力減少するに隨つて、滋味に着する衆生即ち摩奴より生れし者等、有形食甘露を味ひしかば、腹中に尿管生じて身體重くなり、光潤美色減退せり。されば彼等は甚だ憂ひ悲みたるが、時に彼等の現狀に相應する法爾の力に依て、日月遊星現はれ、晝夜の別を生せり。其後彼等は其容色の醜醜に隨つて、我慢憎嫉の心を起せしかば、甘露食も亦消滅せり。其後は次第に地精、蘆を食ひ、不耕米即ち刈れば朝に生ずる自然生の米を食ふに至れり「現今の印度に於ける野生米は朝生夕熟に非ざれども、今猶ほベンゴール地方に多く生せり。是れを印度語にネワールと云ひ梵語に Shali 又は Nirāra 云々」此時代を稱して完全期と云ふ。此期間は百七十二萬八千年ありと云ふ（完全期とは不姪、不殺、生不偷盜、並に不妄語の四徳を完全に持ちし故に然か名くとあり）

斯くして粗荒の有形食を常用せしを以て、男女の機官現出して色欲を起し、二官の交合を爲し、家壁を造り、遂に胎生の時代に入れり。斯く四徳の中一徳缺けしかば、此時代を稱して三有期と云ふ。此期間は百二十九萬六千年あり。此時代を過ぎて、或忘惰者が天然米を刈りて、數日間貯ふるに至りしかば、米に穀殼生じて、刈りたる翌朝、



米の生ずる事消滅せり。故に田野を耕作するに至れり。時に或者は他の作れる米を刈取る等の事を爲す者ありて、争論堪へず、我執も強くなれるを以て、彼等は各自の利益を保護する目的を以て、彼等の中より正しき人を撰んで王とせり。衆人一致して敬ひて王となせるを以て、其名を衆敬王と云ふ。バクサム、ジョンサン、一六頁二七頁

(梵語に Maha-Sammata あり、直譯すれば多衆に認められたる或は敬はれたる王と云ふ義なり、然れども起世因本經第拾卷に摩訶三摩多是隋に大衆平等王と云ふ、劫初王の名なりとあり、而して翻譯名義集には摩訶三摩曷羅闍は此に大平等王と云ふ、劫初の民主とあり、摩訶即ち大は衆の義等あれば大と譯するも衆と翻するも通せり、三摩多には平等の義なし、故に起世因本經の如く譯することを得ず、平等の原語は三摩 Samma 或は Sammita にして三摩多に非ず、次に翻譯名義集の摩訶三摩を大平等と譯するは正しと雖ども、劫初王の名は摩訶三摩に非ずして摩訶三摩多なることは、瑜伽論記の一にも摩訶三末多是此に大等意と云ふ、大衆齊等に意樂し、共同して立て以て尊者となすとあるを以ても知ることを得べし、故に翻譯名義集の摩訶三摩は原語に於て相違せりと云ふべし、西藏傳はマ

ハ、サンマタをマンクルワと譯して、多くが敬へる者の意に取りたるは、原語の義に近しと云ふべし)

衆民等は王に對する報酬として、收穫の六分の一を王に收むることとせり。されば王即ち勝者は配分を勝得する意により、斯く名づけたる者なり、是れよりして租税を徵收する所の王族即ち刹帝利 Kshatriya 族の存在するに至れり。或學者は衆敬王の以前に七神王の繼續ありとして其名を、數ふと雖ども是れが確かなる典據を見ざれば取ることは能はず。此衆敬王前後の時代を稱して二有期と云ふ。何となれば不盜の徳を失ひて、不殺生と不妄語との二徳を有すればなり。此時代の期間を八十六萬四千年とす。此後地方長官等を置いて説諭等の柔和手段にて、命に服せしむる能はざる者を、笞刑或は死刑等に處せざるべからざるに及んで、或者は是を怖れて虚言するに至れり。是に於て不殺生、不妄語の二徳をも失へり。此時代を鬪争期と稱す。此期間四十三萬二千年あり。バクサム、ジョンサン、十七頁

「現今印度の民間に用ふる歴本に依れば、既に鬪争期に入て本年即ち大正十年まで五千二十年を経たりとせり」

第九節 四族或は五族の起原。四族とは婆羅門、Brahman 僧族、刹帝利、Kshatri、士族、吠耆、Vaishya 商族、首陀羅、Sudra 農族の四にして、五族とは以上の四族に旃陀羅屠者、Chandala 等の最下族を加ふる者なり。此等の種族の起りし所以を説明せんに、此中王族即ち士族の起原は前節の説明の如くなれば略せん。古昔人あり、家族と其行業を厭ひて市外の山林中に入り、禪定を行ひ、神通を修得して、仙人となれり。然れども彼等の中に禪定を成就せざる者あり。復び家に歸り、彼等の學びし所の吠陀を讀んで、生活の資を得て、清淨に生活せしかば、彼等呼んで、婆羅門即ち淨者と云ふに至れり。是れ婆羅門の起りし所由なり。次に偷盜等を行はず、他の品と交換せんと欲する爲めに、或人より送れる品を受けて、他に其れを賣りて、或人には彼の必要品を渡す。其間に於て手数料即ち利益を取るの主となる。是れ商族の起りし起原なり。次に惡業を行ふこと少く、他の三族に衣食類を供給せんこと爲めに、田野を耕作して生活する者あり。是れ農族となるなり。此外廉恥慚愧の心なく、偷盜殺生を主として、斯かる惡業を以て生活する者あり。是れを旃陀羅族或は賤族と云ふ。メクサム、シロ、ンサン、一七頁

(現今南印度に於ては旃陀羅族を呼んで第五族 Panchama と云ふ。彼等は現今は概して盜殺等の惡業を爲すに非ず。大率ね農業を爲せりと雖ども一般に他の四族よりは賤族の子孫なりとして、今猶ほ非常に蔑視冷遇せられつゝあり。此外四族の起原を梨具吠陀には婆羅門族はブラフマ神の口より出で、士族は其肩より出で、商族は其股より出で、農族は其足より出でたりとあり。是れ現今印度人民の一般に信する説なり)

何故に此世界を娑婆と名づくるやと云ふに、娑婆は忍ぶの義にして、三毒煩惱に抵抗せず能く其等を忍ぶに名づけたるなり。悲華經に此世界を娑婆と云ふは、此に住する衆生等は貪欲に忍え、怒に忍え、愚痴に忍えて煩惱の捕縛に忍ゆるが故に娑婆(忍)と云ふなり。デーセク、チヨエチユン、テルケ版三八丁

第十節 賢劫中過去佛の出生。賢劫中人壽四萬歲に達せる時、千佛最初の拘留孫佛 Krakucchanda 「藏譯は輪廻滅」出世して十二相成道の法行を示されたり。バクサム、シヨンサン、一七頁

(翻譯名義集に俱留孫、此に所應斷と云ひ、又は作用莊嚴と翻す。賢劫第九の滅に人

壽六萬歳の時、出で、佛道を成す、千佛の首となす。次に釋迦譜、因果經等の支那傳は諸佛は八相成道にして、第一降兜率、第二託胎、第三誕生、第四出家、第五降魔、第六成道、第七轉法輪、第八入涅槃なり。我國古來の所傳にも十二相の語は余の未だ見聞せざる所なり。西藏所傳は大抵十二相成道にして是れを單に御行十二シツバチユルコと云ふ。稀に御行八を誌す者なきに非ざれども、普通には十二相なり。十二相とは前記の八相に勝鬪枝、結婚、四門出遊、祇園現神通の四を加ふるなり。

其後麗日王の王子バツドラより續ひて普光輝王に至るまで三十代を経たり。其子孫百代の間、普陀羅城に住せり。同上同頁

「此普陀羅城は錫蘭に非ずして、ナルマダ河の印度洋に注ぐ處にありし市街にして今のスラット地方是れなり」

時に此城市に衛兵を備ふること五萬四千人、婆羅那斯には六萬二千人、キピラ城に八萬人、ハステナブルに三萬二千人、タクシエシラに五千人、曲女城カクノメノシに三萬二千人、膽波國チンパクに一千八百人、拘斯那揭羅城クシナケラに一萬四千人あり。其後又ベナレスに十萬の王、續いて有親王の時に至て人壽三萬歳となりたる時、第二の佛陀迦那含牟尼佛カナムニ Kanag-

amuni 金仙出世し給へり。其後マチャラに於て十六萬八千〇四十九代の王統を歴て又サマanta、ブラバハ城に於て六萬六千〇一代を経て、ワラナーシー城に移れり。此に王統百代を経て拘理拘理王の代となれる時、人壽二萬歳となれり。時に第三の佛陀迦葉波カヤパ Kashyapa 護光オスス「漢譯に飲光佛とあり」出世せり。時にワラナーシーのクリクリ王は無上道心を起して遂に切利天に生れたりき。バクサム、ジョンサン一七、一八頁

第十一節 釋尊の系統。其後クリクリ王の子孫は普陀羅城に移て百代の後を迦盧那王カナと云ふ。彼王に二人の王子あり。長を僑多摩キウタマ Gautama と云ひ、次を婆羅陀波闍ハラタハ Bharadvaja と云ふ。長は出家して迦羅婆盧那カハラナ Kalavarna 仙人の弟子となれり。次男は王位を繼げり。僑多摩は草屋に入り、一心不亂に坐禪せり。或時詐欺師サツクシ蓮友レンユウ Phadmanira は、バハトラバハトラ女を誘拐し、犯し了て、彼女を殺せり。而して其殺すに用ひし血刀を僑多摩の草屋内に棄て置けり。其後王は僑多摩が彼女を殺したる者として、彼を杖に貫くの刑に處せり。時に僑多摩の師迦羅婆盧那仙人は彼王統の絶滅せんことを憂ひ、神通力を以て雨を降して其苦を除き、香風を起して其身に觸れしめ、彼をして色慾の情を起さしむ。僑多摩は仙人の意の如くに二の精滴を地上に落せるが

變じて二個の卵となれり。此二卵は日光の擁護に依りて二人の赤子を發生せり。仙人は二子を甘蔗苑中にて養育せり。其後婆羅陀波闍王は嗣子なくして滅せしかば、僑多摩卵生の長子は王位を繼げり。彼又早世せし故に、彼の弟王位を繼げり。是れを世に精生王と云ふ。此王統連綿して釋尊の子羅睺羅に至るまで、此一族を稱して僑多摩族、Gautma Vansha 日種、Sūrya Vanisha 甘蔗族、Ikshvaku 精生族、Anggaja と云ふ所以なり。

普陀羅城に於て精生王の後百世にして、毘盧擇迦 Viradhaka 王と云ふ、彼王四子あり。長を宇盧迦牟迦 Ulkamuka 次を詞蘇底具路那 Hastighrona 次を揭闍多 Gajira 次を奴布囉 Nipura と云ふ、彼等の母后は早世せしを以て、父王は他の國王の王女を聚るに當て、其王女に生れし王子に王位を繼かしむべしとの條件を以て結婚せり。其後新婦は王子を生みしを以て、已むことを得ず、前の四王子を遠流せり。されば彼等は各自の妹及び其市に住する親族の壯年子女を率ひて、普陀羅城を出で、中印度の神乘河 Bhagi rathi 「是れ恒河の一名なり。併し實際の住處は恒河の本流に非ずして、其支流のロヒタ河」の岸にして、迦毘羅仙人の住する近邊に留れり。彼等は其中に於て

互に血統の遠き者を選んで、結婚せしかば、多くの子女を生ずるに至れり。此事、後に父王に聞へしに、彼は大に驚いて是の如きは誠に釋迦「シタ」能く事を成す者」なりと讚歎せり。此事よりして此一族を釋迦即ち能成事族と名づくるに至れり。

其後釋迦一族は次第に繁殖せしを以て、彼等は他の地方に移らんとせしが、迦毘羅仙人は彼等を留めて、自ら黄金瓶に恒河の水を入れて、其水を以て城市の圖を畫けり。彼等は其圖に従つて城市を作りしを以て、城市を名けて迦毘羅城と云ふ。四兄弟の内、三兄は次第に王位に上りしも嗣子なくして死し、末弟の奴布羅王の子娑羅盧陀 Silarūda 王より王統連綿として相續せり。

(如意寶樹史は此間の王代の數を誌して、五萬五千代として十車王 Dasharata に至り、其後十二代の王を弓持 Dhanurjita と云ひ、其子を師子頰王 Sinhahanu と云ふとあり)

時に多くの家族の生せしより、國土擴張の爲めに、或家族を吠舍釐國に送れり。是れを黎車毘 Lichchhavi 族と云ふ。師子頰王は瞻部洲第一の弓手として其名高し。彼王に四太子四王女あり。兄は曼珠師利菩薩の化身にして淨飯 Shuddhodana と云ひ、次を白

飯 Shbhadana ヲ云ひ、次を解飯 Dronodana ヲ云ひ、次を甘露飯 Amritodana ヲ云ふ。四女の名は淨王女、白王女、斛王女、甘露飯王女と云ふ。第一の王子淨飯は王位を繼承して淨飯大王と云ふ。是れ釋尊の父なり。ヤールセル、三〇六丁

第十二節 釋尊の母后、近親、並に藍毘尼苑名義の起原。天彌城の主、善覺 Suprabuddha の妃を美女藍毘尼 Lumbini と名く。彼女は甚しく花園を愛するを以て、善覺王は天彌國と迦毘羅國との國境に於て、總歡喜苑即ち花苑を完全に造りて、是れを彼妃に與へたりき。故に彼妃の名を苑に號けて藍毘尼苑と云ふ。彼等の間に一の王子と二の王女あり、其中、末の王女は觀世音菩薩の化身なれば、其生るゝや容貌絶美にして、光輝城市を覆へり、其美容恰も神工毘首波羯磨 Vishva karma の大幻術より現はれたる如くなれば、名づけて摩訶摩耶 Mahā Mayā 大幻女と云ふ。時に相者は彼女を見て曰く、彼女は後に一子を生ん、其子は轉輪聖王となるか、或は佛陀となるべし。後、彼王女等の生長するに及んで、善覺王は淨飯王の求めに依り、二女を共に聚るべきやを尋ねしめしに、淨飯大王は摩訶摩耶を聚るべしとありしより、妹が王后として結婚するに至れり。是くて王室の慶事と共に、迦毘羅城は益々繁榮し、庶民も又宿願多き者

なれば、此王城の威力益々強大となれり。彼等は弓術、劍道を學ぶと雖、ども毫も他を害する爲に非ず。而して淨飯大王は釋迦族即ち轉輪聖王の一族に生れて、宿福廣大なれば衆の敬服する所なり。且つ德行完備し、財寶饒多にして、國政を處するに法を以てす。六十四の性徳を具ふる大王なり、而して摩耶夫人は前世に菩薩の母となること五百生なり。清淨性徳の自然に現はるゝや、夫人の絶妙なる美容は、見る者をして毫も不潔の情想を起さしめず、唯だ絶美徳相の光輝に打たれて、自然に敬心を生ずるのみ。三十二の性徳を具へて眞に佛陀の聖母たるに相應せり。ヤールセル、三〇七丁

## 第二章 釋迦牟尼佛本生略傳

### 第十三節 菩提道順喇嘛傳燈史拜語

(此傳燈史の解説は初の序文中にあれば就て見るべし)

拜語

尊聖喇嘛、無縁の大慈悲に住し給へる能成就力、金剛薩埵と差別なき主の蓮臺下に禮拜壽命し奉る。願くは大悲心を以て一切時中擁護あらせ給へ。

佛陀の御名を聞くからに  
たのみをかくれば一切の  
教勅の如く行はゞ  
教祖釋迦牟尼如來に

無邊に列なるもろくの  
世尊のみ業を何くれと  
佛子彌勒と法王子  
我身の菩提を遂ぐるまで

いとも般若の徳廣き  
いとも大なる道行の  
眞俗二諦の法の實に  
大廣行派の傳燈の

邪途の怖畏より護らるゝ  
願望を究竟に満てたまふ  
三身得せしめ賜はるゝ  
禮拜恭敬したてまつる

國土に化身を現はして  
衆生に得せしめ賜はるゝ  
曼珠師利の菩薩がた  
頭に戴き供養する

菩提心なる大木に  
力は枝葉に動くなり  
なべての人を歡ばす  
高僧知識に禮拜す

「唯識派傳燈喇嘛禮拜」

深邃寂靜心行の  
智慧金剛の法爾なる  
衆生の心にはびこれる  
絶妙智見の傳燈の

道も離れし中空に  
光輝を昭々放ちてぞ  
無知の暗夜をば除かるゝ  
心源の師等に歸命する

「中道派傳燈喇嘛禮拜」

深邃大行此二派の  
最勝秘密聖福の  
巧方便の船をもて  
攝聖福の傳燈の

教理の次第を總和して  
實の生ずる彼岸に  
頼に渡らせ賜はるゝ  
法の喇嘛等に恭敬する

「秘密派傳燈喇嘛禮拜」

三派の流れの秘密解の  
寶の粹の菩提心  
北方西藏のひじり等と

法の言葉の結昌體  
湧き出づる不死の甘露にて  
荒き衆生を化し給ふ

我等の主たるアーヂシャに

一心恭敬したてまつる ラムナム、ンガバ、三丁

「新派の遠祖アーヂシャ禮拜」

(以上の拜語は全く印度に於ける教祖及傳燈の高僧に掛れり。以下には西藏に於ける新派の開祖及同傳燈喇嘛等に對する祈願的拜語あれども此には略す。次に著者が著書に對する期願を歌へり)

神ともに生とし生る者皆の 功德幸福の基礎たる

最勝世尊のみ教の なべての精の粹の意義

明かし給へる菩提道 次第の傳燈喇嘛等の

解行の史傳を今此に 述べんと我は願ふなり ラムナム、ンガバ、三丁

第十四節 佛出世の稀有 無邊の空間に存在せる無數の衆生の安樂利益は幾らず何處より生せしか其唯一の源泉たるや最勝世尊の宣說せられし法門、八萬四千の一切の精義にあり。此精義を唯だ一個人として、鍊修する次第を圓滿に組織し、能く成就したる所の菩提道順の教語を善く示されし所の本師教祖「釋尊」と其傳燈の喇嘛等の史傳を此に説くべし。

流水の本源は雪山にあるが如く、妙法の流れも亦其源頭は完全に成就せる佛陀にありと云はざるべからず。されば始に教法の主人たる本師最勝尊、釋迦牟尼佛、大慈悲者の史傳を約して述べべし。ラムナム、ンガバ、三丁

世界に佛陀の出づるは恰も優曇波羅華の開くが如く、實に稀有のことなりと説かれたり。然る所以は世に佛陀の出づるには先づ初めに人ありて無上菩提の心を起し、次で三大阿僧祇劫の長時間を経て、無量の福智の二大徳を修聚して、全く佛國土を淨め、誓願を成就し、所化衆生の機根も能く熟したる等、總べての因縁能く適當に集合して、佛の世に出づるに至るなり。是の如く總ての因縁の適合は甚だ困難事なるが故に、大抵此世界は暗劫に過ぐることに多くして、佛の出世ある明劫は實に稀有なる所以なり。入菩薩行と云ふ書に

黒雲深きさ夜中に ちらと閃めく稻妻の如く

福智圓滿の大方ある 佛の出世は稀に見る

と説かれし如く、三界に迷へる衆生は、僅少の道徳ですら起すことは甚だ難しとする所なり。猶ほ彼の生せし道徳心を佛力のみ依る者なりとして、佛陀を確信し、以て純粹徳行の少しにても行ふ所の者は稀に見る所なり。されば三寶即ち佛法僧を

確信して、法の如くに善行を取り、悪行を捨てることを實行して、眞に有情世間の執着を離れ、堅心以て家を出で、解脱の道に入り、修學する者の稀有なるは云ふまでもなし。是の如く出家して解脱道を修る者の稀なる世なれば、自己よりも他を敬愛する菩提の心實、深心より生じて、佛子の大行、大海の如きに入り、以て無限數の大劫に於て、中折せずして、究竟して修行成就する者の最も稀有なるは是れ亦云ふまでなき處なり。されば佛出世の眞に稀有なる所以は穢れなき所の智慧に依て明了に知ることを得るなり。ラムナム、ンガバ、四丁

第十五節 釋尊の初發心。吾等の本師大慈悲尊が初めて發心せられたる事は賢劫經に下の如く説かれたり。

そのむかし卑賤に我は生れし時。

釋迦牟尼如來のおんに

一器の粥を供養して

初めて道心を起したり

とある如く、陶器師の子、光作 ヒヤラカ *Hiara Kato* と生れし時、大釋迦牟尼佛、世に出でられしに遇ひ、土製の壺に粥を入れ、鏡を蓋として、彼如來に供養して

願くは如來の御身の其の如く。

み年の長さも弟子たちも國土の程も。

其み名も最勝尊の其儘を

全く同じく我にも成就せよかし。

と言ひて菩提心を起したりき。且又吾等の本師大慈悲尊は、吾等三界の一切衆生が六道に輪廻して、多くの煩悶苦患を見るに忍びず。無數の如來の尊前に於て、吾等を救はんとの心を起して誓願せられたりき。此等の例中其要なる者二三を説かんに、報恩經の説に嘗て本師大慈悲尊が地獄の車夫と生れし時、同輩の一人が燒鐵の平地に、閻魔王の車を挽かんとするに當て、彼は小心なれば、恐れて車を挽くこと能はず。時に閻魔王は怒つて、三又の鐵鎗を以て、彼の額を突きしかば、血流雨の如くに降り、苦痛に堪へずして悲哀慟哭せり。是れを見たる一車夫は深心より忍ぶに堪へざる悲心を起して、思へらく願くは此有情の悲痛を免れしめん。是の如き地獄の痛苦を我一人にて受けん。又彼は多くの衆生が前世造りし惡業の力に依り、自然に地獄に墮落し、又墮落せんとしつゝあるを見て、心に勝え忍ぶ能はざる悲心を生じ、菩提心を起して、彼は日へり、嗟呼閻魔王よ。衆生の痛苦是の如きを見賜へ。彼等の痛苦を



我に與へよ。我一人にて是れを受けん。時に王は大に怒て三叉の鎗を以て彼を殺せり。是に依て彼は百劫間に造りし罪惡消滅して、三十三天の神と生れたり。是れ世尊が慈悲心を起されし初めなり。其れよりして成佛に至るまで、一切衆生に慈悲の心を斷へず相續せりと賢愚經にも説かれたり、ラマナム、シガバ、四、五丁

第十六節 本生傳 光有王及無垢腕童子。發菩提心相續の一例として、戒説藥用基礎に説かるゝ所左の加し。或時波斯匿王 Prasenajit か世尊に何處に如來は初めて菩提心を起されしやを尋ねしに、世尊は命せられき。古昔光有國に野生の白象ありき。其色白蓮の如く純白にして、支躰完備せり。光有王是れを見て象師に是れを馴らしむ。然して象師は是れを馴らして王に獻す。王彼象に乗て遊獵に出づ。象師も又彼象に乘れり。林中に入るに及んで、彼白象は牝象の交尾期に達せる臭香を嗅ぎ、牝象を追ひて疾風の如く走りしかば、王は象師に命じて停止せしむ。然れども象師は彼を止ること能はず。象師は王に請ふて樹枝に取り着かしめ、己れも亦樹枝に攀ぢて其難を脱れたりき。王は象師を責めて曰く、汝は象を馴らすして我に獻せり、其罪輕からずと。象師答へて曰く、陛下、臣は能く彼を馴らしたるも、云何せん、彼は牝象の臭

香を嗅ぎしを以て臣の意に隨はざりき。彼の歸り來らん時、臣能く其證を擧げんと。時に七日を経て彼白象は其熱狂の情消えて彼の舍に歸れり。而して象師は彼を王の前に率いて試みに炎々たる燒鐵を持って命せしに、彼は躊躇する所なく、其れを鼻にて持て、少頃にして死せり。王問ふて曰く、汝は斯くも善く彼を馴したるに、彼は前に何故に汝の命を用ひざりしか。象師答へて曰く、臣、能く彼の身を馴せり、然れども其心に至て臣の馴致すること能はざる所なり。王曰く、能く心を馴致し得る者ありや。象師曰く、能く身心共に馴致し得る者は佛陀の外にあることなし。大王陛下、佛陀は徳力廣大にして、煩惱を離れたる力を有する眞英雄なり。されば誰人にも佛陀の行に隨ふて行ふ者は、其眞力、無形の心に存するに至ると是の如く諸佛の大功德を廣く讚歎せり。時に光有王は諸佛の勇猛精進の力を聽いて、大に確信して、施行を盛に行ひ、無上道心を起して次の如く發願せり。

施物を廣く大に行へる徳の力に我いつか衆生の爲に。

成佛し過去の諸佛の化せざりき。總ての衆生を我は殊に解脱せしめん。

人々を善く保護したる。我業に依りあるは正しく。

人々をもてなす業より起りたる。徳の力に成佛して、世の人々の食欲の傳染病を滅さん。

是の如く無上道心を起したりきと説かれたり。

未生歎王 アジャタタタ Ajātasattu

(我國にては普通に阿闍世王と云ふ。觀無量壽經疏吉藏云阿闍世に兩翻あり大經文未生怨と云ひ、又折指と云ふとあり。又大唐西域記第九に未生怨と譯せり。西藏譯には未生歎 マシヤスダ Ma shyes dga とあり。タの藏語は歎にして、此梵語は Shattu なれば矢張り歎と云ふ意にして、怨の義に用ひたる例を見ず、されば漢譯の未生怨は意譯なりと云ふべし)

懺悔經に如來の發菩提心に就て説く所左の如し。

百千萬億無量大劫の古昔に、如來は商主の子、無垢腕童子と生れし時、曼珠師利菩薩の前生たりし説法師智王と云ふ者、彼を伴ひて未得月幢如來の前に至つて、如來及び彼大衆等に午飯を供養せり。無垢腕は僅かに一椀を供養せしが、彼如來は其供養を彼百千萬の大衆に普く與へて、猶ほ多く餘れるものあるを見て、無垢腕童子は大

に歡喜し、信心增長して、如來の前に敬立せり。時に未得月幢如來は、童子の爲めに菩提心を説法せられしに、童子は不退轉の大信心を獲得し、如來に歸命して、無上道心を起されたりき。ラムナム、ンガバ、六、七丁

第十七節 本生傳精進童子、商主慧賢。菩薩藏經に本師は古昔無上菩提心を發せし次第と、修行地の次第に進步する順序とを説かれたり。如來は無量不可思議劫を過ぎたる古昔に、最勝法王の王子精進行童子と生れし時、大蘊如來の出世に遇へり。彼如來は神通力莊嚴不可思議の事を示して精進行童子をして深心隨喜せしめて、後に如來は慈悲心を生じ、菩提心を起すの順序及び布施等の六波羅密行、布施、愛語、利行、同事の四攝法、並に此等に攝する所の廣大なる佛子行を學修する方法を廣説し、猶ほ十力、四無所畏、十八不共法等、佛陀の徳を廣く演せられしかば、童子は大乗道に於て不退轉位を確得せり。然して童子は大蘊如來と彼聲聞の比丘衆を九億六千萬年の間、一切の供養し得べき總べてを以て、供養し奉事して、無上正等道心を起したりき。其後一大無量劫を経て商主慧賢と生れし時、寶支如來の出世に遇へり(此傳記は略ぼ前傳と同じければ略す)

第十八節 本生傳雲童子。其後一大無量劫を経て、婆羅門の子、雲童子と生れし時、如來燃燈佛の出世に遇へり。童子は歡喜踊躍して、一大堅固なる信心を以て、燃燈佛の尊前に於て、十二年間、彼黄金色の頭髮を地に擲げて謂へらく、我は如來より成佛の讖言を得ざらんには、此地に乾死すべしと誓へり。時に如來應供正偏智等の十號具足の燃燈佛は、雲童子の心を知りて、彼黄金色の頭髮を踏み賜へり。時に雲童子は起ちて、青蓮華を兩手に盛り、如來に散華の供養を行へり。散華するや否や、如來項上の空に當て、青蓮華より成れる華屋にして、四隅に四柱あり、絶妙莊嚴趣味深き者となれり。而して蓮華屋中にも如來の身は現はれたりき。時に燃燈佛は雲童子は告げて曰く、婆羅門の子よ、汝は此根本道徳の力に依り、未來無量劫を過ぎて、如來、應供、正偏智、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、世尊、釋迦牟尼佛となるべしと授記せられたりき。時に雲童子は授記を聽いて、最大歡喜し、深意に安靜を得て、無生法忍を證せり。彼は無生法忍を證せし後、空に上ること七多羅樹の高さに至て、六千の三昧に入りて、恒河沙數の諸佛を明かに觀見したりき。ラムナム、ンガバハ、九丁

第十九節 本生傳婆羅門海塵。吾等の本師大慈悲尊は特に五濁惡世の衆生の難

化にして、他の諸佛諸菩薩か棄去せられたる吾人の不幸に對して、忍ぶこと能はず。彼は婆羅門海塵と生れたる時、其事を現はせり。時に婆羅門海塵は寶藏如來の尊前に於て、十方の諸佛諸菩薩を證として觀じて謂へらく、普通には十方の諸佛に濟度せられずして、残りし衆生、特別には賢劫中拘留孫佛を第一として終りの喜光佛に至るまで、九百九十九尊は皆既に各自の時處を有ちたれども、鬪爭期中人壽百歳の時に當て、世は恰も炎々たる火宅の如く、五濁の惡事混雜し、罪業猛烈にして、度し難く父を父として敬事せず、母を母として敬事せず。師を師として敬事せず。恩を報ずることを知らざる無頼の衆生中に誰か能く入て彼等を化度することを得んやとて、彼九百九十九尊も皆放棄せられたり。されば我今寶藏如來の尊前に於て十方の諸佛を證として誓願せんと、其言に曰く、我は誓ふて鬪爭期中人壽百歳の時の悲むべき衆生を必ず濟度せん。若し其以前に成佛する力あらんども、其時に至るに非ずんば我は必ず成佛せず。是の如く誓願せられたりき。猶ほ海塵婆羅門は吾人五濁惡世の衆生の爲に五百の大誓願を立てられしかば、寶藏如來を始め十方の諸佛は異口同音に善哉と讚歎し、華を散じて曰く大丈夫汝は諸菩薩の中に於て並ぶ者な

し。恰も諸の華の中に於て、比類なき白蓮華の如し等と廣く讚じ給へり。されば吾人の本師たる大慈悲尊の他の願行は少頃く措くとするも、是の如く古昔既に吾人の爲めに發心せられたる一事を思ふも其大恩慮るべからざる者あり。況んや吾人の爲めに萬行苦行せられたる大慈悲心を思ふに於てをや。眞に深心より信心供養して彼大恩を報ずるに精進すべきなり。ラムナム、ンガバ、九、一〇丁

第二十節 三無量大劫に供養せる諸佛の數。是の如く大聖世尊は初に發心して次で徳を積まれたる次第を論藏にも誌せり。

寶髻、燃燈、勝觀は、

三無量劫の末に遇へり。

初は大釋迦牟尼佛と知れ、

と説かし如く、大釋迦牟尼佛は發心の始に遇へる佛にして寶髻佛は第一無量大劫の終の佛なり。其れより燃燈佛の出世までを第二無量大劫とし、其れより勝觀佛に至るまで第三無量大劫とす。此無量大劫に於て如來は徳を積まれたりき。戒説にも以下の如く誌せり、

大釋迦佛を始として

護國佛の出世まで

七萬五千の諸佛等を

我こそ供養したりけれ

善行如來を始として

帝幢牟尼に至るまで

七萬六千の諸佛等を

我こそ供養したりけれ

燃燈佛を始めとして

迦葉波佛に至るまで

七萬七千の諸佛等を

我こそ供養したりけれ

と説かれし如く、第一無量劫に於て大釋迦牟尼佛を始めとして護國佛に至るまで、七萬五千の諸佛と、第二無量劫に善行佛を始めとして帝幢佛に至るまで七萬六千の諸佛と、第三無量劫に燃燈佛を始めとして迦葉波佛に至るまで、七萬七千の諸佛とを供養奉事して、不斷に智福二聚の道徳を修められしなり。ラムナム、ンガバ、一〇丁

第二十一節 報身佛の化度。是の如く三無量劫に修得すと説くは、佛教普通の説に従ふて、説きし者にして、大乘の義に従へば、三無量劫に修得する次第は、先に菩薩藏經に説かれし如くなるが、寶雲經には以下の如く説かれたり。善男子、如來は多數の無量大劫を経て成就する者なり。善男子、如來は甚深微妙不可思議なり。時に除蓋障菩薩問ふて曰く世尊よ諸佛は三無量劫に於て、全く成佛せらるゝに非ずや。世尊

曰く善男子其所由は云何と云ふに、菩薩か如來地を成せんとする修行は、實に思慮分別の及ぶ所に非ず。三無量劫に於て全く成道すること能はず。然れども三無量劫を算ふるは、菩薩か平等法智を證得してより後の時を云ふなり。極最初の發心より算するには非るなりと。又月燈經には

千萬億より餘りある。恒河沙數の佛陀等の

靈鷲の峯にお在したる。人天の師にも我は皆事へて修行なしたりき

等、廣く説かれたる如く、本師は往古修行地に於て、無量不可思議恒河沙の諸佛に奉事し供養して、成就好熟、修習の三行を究竟して、華嚴藏基と名づくる阿迦尼瑟吒國土 Akaniṣṭha に於て五證の徳を有する報身を現成して、其身は常に不動の儘ながら、虚空に散在する總ての國土に於て、其各國土に相應せる所の化身を現じて、一切衆生の爲めに菩提の道を示し給へり。ラマナム、シガバ、一〇、一二

(三界中色究竟天の原語も阿迦尼瑟吒と云ふ。然れども此に誌せる華嚴藏基阿迦尼瑟吒國土は色界の最上に位する天國を云ふに非ず。此阿迦尼瑟吒國土は、是れより東方の不動如來及金剛薩埵等の住する處を云ふなり。梵語阿迦尼瑟吒の譯

は最上、或は無下なり。藏譯オクミンは下なしの義なれば原語の意に合せり。阿迦尼瑟吒を色究竟と譯したるは意譯なるべし。不動如來の國土の名も色究竟天の名も同じければ、報身の住處の混雜せんことを恐れて聊か辨じたるのみ)

第二十二節 迦葉波佛の授記。是の如く報身の化度を行はれしより、往古の發心誓願成熟して、娑婆世界に無上の應身を現示する時の近づきしに當て、迦葉波 shiyapa 佛此土に出現せられたり。

(梵語迦葉波、藏語にオエヌルン護光となる、而して漢譯に飲光とあり。然れども梵語の Kashi は光にして、Apa は水或は動作又は行爲等の意なれば、飲も護も意譯なりと知るべし)

時に本師大慈悲尊は婆羅門の子、上主「一説には護光」と生れて、迦葉波佛の會中に於て淨行を修せられたりき。時に迦葉波佛は上主に授記を與へて曰く、我寂滅の後、汝は人壽百歳の時に當て、此娑婆世界に於て成佛して、十號具足せる世尊釋迦牟尼佛となるべし。其壽八十歳に至るまで法輪を轉じて、入涅槃の後も、教法長く存すべし。斯く宣説せられしかば、其名稱十方の諸佛世界に普く聞へたりき。其後、彼の上主

は死して親史多天上に生れて、正妙頂菩薩となられたりき。ラムナム、ンガバー二丁、二丁

三八

### 第三章 佛誕生より防水工事まで

第二十三節 佛誕生前の瑞相。一生補處の正妙頂菩薩は親史多 Tushita 喜足、天上の諸天人の爲に説法して、此土に誕生するに至るまで彼天に住せられき。而して菩薩の誕生の時近づくや、菩薩の誕生せらるべき藍毘尼苑に於て、前兆たる瑞相の現はれたりき。苑の地は總べて手掌の如く平坦にして、其基礎は金剛寶より成りて諸寶充滿せり。寶樹列生して、芳香自然に生じ、勝幢寶雲上空に集り、天の諸華及天衣藏は廣く現はれ、此苑の地は總べて自然の寶藏となり、苑内の池は淨蓮花に満ち、天龍等の八部衆は皆合掌恭敬し、八部衆の婦女子等は樹王鉢刺叉の幹を觀つゝある時、十方の諸佛は、其身の臍より光を放ちしかば、林苑赫耀として、其光中に佛誕生の影現はれ、誕生と云ふ聲さへ聞ゆる等、諸の瑞相現はれたりき。ラムナム、ンガバー二丁

(樹王鉢刺叉 *Plaksha* は無花樹なり、然れども華嚴探玄記第二十に義翻して高顯樹と云ふ。或は阿輪迦樹と云ふ。此に無憂樹と名づくどあり。阿輪迦樹にブラクシャ

の異名あるものか)

(佛誕生地藍毘尼苑は、ネパール國領、ヒマラヤ山下の平原地バガワン、ブル村の北二哩バデリヤ村中の一端にあり。西北ベンゴール鐵道のウスカプザーか或はノーゴルの停車場より北方に約廿三哩の地にあり。油河の西北岸に小丘あり。周廻約四丁、丘上に小祠あり内に石像浮彫の佛誕生の像あり。佛母摩耶夫人は右手を以て無憂花樹の枝を取り、梵天因陀羅の二天王は誕生せられし太子を手に捧ぐるの狀なり。摩耶夫人の像の右側に指天指地の誕生佛像あり、是れ此小堂内の本尊なり。丘を下れば阿輪迦王の建てし石柱あつて佛誕生の事を誌せり。此地よりして北に數哩を行けばヒマラヤ山下のタライ大林に達すべし。此北方の空を望めば喜馬羅耶山脈中の麗妙雪峯、巍然として雲間に聳え、其西に並列して解脱性の奇巖たる雪山脈あり。次に西北方遙かの雲間に渺茫乎として峭立せる雪峯は歡喜ヶ嶽と云ふ。次で吾人の眼を轉じて麗妙雪峯の東を望めば、魚尾雪峯は其名の如くに突出し、次で東に夕陽日出の諸雪峯、神殿の如く寶塔の如く連立し、東北には曉野曉泉等の諸雪峯、泰然巖然として空間を莊嚴せり。而して東方に當

て眼界の殆んど絶せんとする處に、諸山脈の上に超然群を接いて天空に白雲の如く朦として現はるゝ者あり。是れ世界第一の高雪峯妙后吉祥一名エアーレスト」なり。是れ印度の平地に於て吾人の見能ふ最大なる雪山の光景にして、宇宙の大觀なり。此宏壯極まる天然の中心たる藍毘尼苑の丘上に立て、宇宙最大の偉聖たる釋尊の降誕を觀する時は、吾人は先づ宇宙の大莊嚴に打たれて、身心妙融し、無限實相の眞粹たる唯我獨尊の妙相を觀るの思ひあり。藍毘尼苑に於ける無限大なる眞と相との瑜伽妙融は言語を以て現はし得ず。實地に此境に觸れて味ふべし。前記降誕前の瑞相の説明の如きも、是かる實感の小發露と云ふべきか。

大正元年申年十二月十一日第四回佛誕生地參拜の際著者自ら高楠順次郎博士等と共に實地に測りし處を左に誌すべし。

パデリヤ村端より東北ルンビニまで。十二町三十間。

ルンビニより東方油河まで。二町(河幅)四十尺。

ルンビニ苑境内。東西直徑三百四十九尺。南北四百廿九尺。

境内中の釋種浴池より北に石柱まで。九十尺。

池の周圍。凡そ八十間。

石柱より摩耶夫人の堂まで東に。四十四尺三寸。

摩耶堂の東南端より東の道まで。二百六十四尺。

石柱より西の道まで。直徑六十六尺。行路に従て量れば猶ほ二十尺あり。

摩耶堂の東西。四十七尺三寸。南北二十五尺。

石柱の高さ。(但し折れたる柱にして上部なし)一丈二尺五寸。

同 周圍。(高さ地より三尺上の處にて計る)七尺二寸五分。

摩耶堂内摩耶夫人の像高さ 五尺。

誕生佛立像。(佛の指示天地の姿勢) 一尺二寸五分。

帝釋、因陀羅の二天王は別に臥狀の誕生佛を手に捧ぐる狀にして是れ等を皆一枚の板石に浮彫にしたるが、惜むらくは電流に觸れて破れしものか前面一様に木を破りし如くに破れ落ちたり。明治四十四年タイ、ラーマが此に參拜して、數日滞在の時法王臣下の畫師に命じて、平面になれる所に顔及衣服等を彩色畫にて畫かしめたり。余は第三回參拜の時是れを見て其西藏化せるに驚きたるが、第

四回の時には其彩色は全く跡を絶ちて、土人の塗れる赤色にて覆はれたりき。現今當地方の土人は摩耶夫人を以て藍毘尼女神として祭れるに依るなり。

第二十四節 降生勸請の自然樂歌。時に正妙項菩薩は觀史多天上三萬二千の宮殿樓閣に於て、性德莊嚴完備せる最富聖福の殿裡に安坐せり。時に菩薩德の法爾の力と十方諸佛の護念とに依り、適意絶調の聲よりして、八萬四千の合奏音樂種々微妙の音聲を以て歌ふて曰く、

宿福廣大修德あり。宿命神通性智あり。般若の光輝無邊にして。

無等の力と萬行の。徳ある者よ其むかし。燃燈佛のみ前にて。

授記せられしを思はれよ。最勝福の汝ゆゑに。觀史多の天はいと妙に。

美はしくありさりながら。大悲おわする汝なれば。瞻部のあらゆる勝幢に。

甘露の雨を降らしめよ。(中略)只今こそは時なれば。

平意に過し賜はされ。大悲心ある吾君よ。こひぞ願ひぞたてまつる。

是の如く瞻部洲に降生の時來れり等、廣く燃燈佛、迦葉波佛等、無數の諸佛より授記

せられし所の人壽百歳の時に成道する事を、度々樂音より發して懇請せり。時に淨居の諸天人等は菩薩入胎の十二年以前に於て、婆羅門と化して、諸人に對して曰く三十二相、八十種好を具備したる菩薩降生あつて轉輪聖王か或は佛世尊とならるべしと宣言せり。獨覺の仙人等に對しては十二年後に菩薩入胎あらん。汝等の此行其要なかるべしと云へり。彼等の一人は王舍城の尾變山にて獨覺牛と云ふを聽いて石上に足跡を遺して去れり。其後婆羅痾斯の鹿野苑に於て五百の獨覺仙人は空中火定に入りて逝去したり。而して其舍利地上に隨ちしかば後世同處を稱して仙人墮處 Rishi patna といふ。ラムナム、ンガバ十三、四丁

第二十五節 五事觀察。位を彌勒菩薩に授く。其後菩薩は彼大天宮より出でて諸天人の爲に說法する所の高法善性殿と云ふ堂に入り、獅子の寶座に上りて、彌勒菩薩及觀史多の諸天人、並に諸方より來集せる諸菩薩等の爲めに廣く說法なし給へり。而して後、佛陀の正行を顯示すべく思惟して五事に就いて觀察し給へり。五事とは時を觀じ、國を觀じ、種姓を觀じ、血統を觀じ、母となり得る徳ある女に就て觀するなり。第一、時を觀するとは既に海塵と生れし時、寶藏如來に人壽百歳の時成佛せん



と誓ひ、又燃燈佛以來總べての如來も同じく授記せられし如く菩薩も思念し又十方の諸佛よりは此五濁惡世の衆生は完全なる依處を失へる者なれば、是れか依所たらん爲めに速かに降生せらるべしと請はれて當に瞻部洲に降生すべき時、來れりと觀じ給へり。第二國を觀すとは佛陀の出世は唯だ世の衆生の利益の爲めにのみ出づる者なり、而して其所化の衆生の主となる者は、神と人との二類なるが、若し佛にして神の國に出世せんか、人間は彼處に到るの力なきか故に彼等を利益し得ざるのみならず、神等は佛に遇ひ難しとの心を生せず。神等自身の娛樂多き爲めに厭世の念生ぜざれば戒徳の器となり難し。且つ神等にして法を聽かんと欲すれば、瞻部洲に至ることを得べし。されば人間界に生るゝこそ當を得たる者なれ。其人界の中に於ても瞻部洲以外の三洲は財産豊富なれども求法の精進心に乏し。瞻部洲の人々は貧にして短命なれども、信心の機能鋭くして出塵念力の堅固なる者生じ易し。猶ほ瞻部の土には中道を悟り得るに勝へたる丈夫烈女多し。されば此土に顯密二教を廣布せんと、是れ菩薩か國に就て觀じて、此土を擇んで成佛の行相を示さんと決せられし所以なり。第三種族を觀すとは諸佛の應身出世する時は、王族或は

婆羅門族を擇んで降生せらるゝなり。而して菩薩は世情に順ふて王族に生れんと觀じ給へり。第四、血統を觀するとは、王族の中に於ても、菩薩の父母たる人の血統は毫も穢れざる者を擇ぶことなり。既に本書第十節より第十二節まで述べたる如く、淨飯王は國初の王より、連綿たる王統にして、其後摩耶夫人は又清潔なる王族の出なれば、先づ此王と后とを父母とせんと觀せらる。第五、特に母となり得る徳ある女を觀すとは、既に第十二節に述べたる如く、摩耶夫人は前生願力の徳を具へて、佛陀の母たるに相應したれば、夫人を母として降生せんと觀じ給へり。ラマナム、シガバ一三、四、五丁是の如く正妙項菩薩は五事を觀察し了て、高法善性殿より出でて、同じく觀史多天上に於て、六十四由旬の長さある連旗の、空に翻々たる邊りに於て、高幢と名づくる說法殿に入つて、最勝福の獅子座に安坐して、諸神に對して云へり。諸友よ、我身に宿福の百相莊嚴せるを見よかし。又十方世界に於て諸菩薩の我と同じき者の無數なるを見よ。諸神は是を見て讚歎せり。而して正妙項菩薩は彌勒菩薩及觀史多天の諸神に言へり。諸友よ、信心は佛法の輝く門にして、心思安泰となるべし。淨心は佛法の輝く門にして、濁心は清淨となるべし。「中略」不退轉地は佛法の輝く門にして、如來

の諸法を成就するに至るべし。地より地上進する智慧は佛法の輝く門にして一切種智の位に登るに至るべし。入灌頂位は佛法の輝く門にして、入胎誕生出家苦行入菩提座降魔成道轉法輪入大涅槃を示すに至るべし。是の如く佛法光照の百八門を廣く宣説して、自ら寶冠を取つて、是れを彌勒菩薩の頭に戴せて曰く、諸友よ、我は成佛の爲めに瞻部洲に行くべし。汝等の爲めには無勝アツタか我に繼で法を説くべし。斯くして彌勒菩薩をして一生補處の菩薩位に上らしむ。ラムナム、ンガバーセ、八丁

(無勝アツタ Ajita は其名にして彌勒マイトレ Maitreya は即ち其姓なり。アジツタは漢譯に阿逸多とある者は是れなり)

第二十六節 降親史多天。時に淨飯王の官城に於て、八の瑞相現はれき。地平垣にして、殿内座煙なく、清水地に撒じ、蚊蠅蜂蛇の類なく、諸花地に散せり。雪山の杜鵑等庭内の樹木に留て妙音を奏し、殿裡の庭花一時に諸花満開し、池中は千葉の蓮華を以て覆ひ、熟酥蜂蜜等の美味用ふるも盡きず、鏡鉢等の樂器は自然に妙音を發し、七寶の器具は自ら増加し、日月の光輝は徳の光輝に威壓せられて、身心をして柔軟安樂ならしむる所の光輝は現はれたりき。而して菩薩は高幢殿より出でて、總ての宿

悟  
1.

福力に依て完全に生せる諸寶を以て成せる所の天上莊嚴の大殿に入て、諸の菩薩と諸天人とに圍繞せられて、降生せんとし給へり。而して菩薩は九の悅樂莊嚴と名づくる光輝と百千万無數の光輝を以て、三千大千の總ての暗黒を照破して、日月の光を威壓せしかば、其瞬間惡道の苦痛は消滅し、一切衆生は煩惱に惱まされず、非器の者は恢復し、手掌に金剛を入れたる如く護念し、諸種の見解に執着せる業等は總べて消滅せり。

特に母に對して放てる光輝は尊母性徳圓具と名づくるものにして、菩薩の膚毛の總てより發光して、摩耶夫人の齋戒せる身に入るや否や、御身は平安を感じ、一切衆生の身體よりも明かに又高尙にして、其量空の如く軽くなりたれども、人身を離れず、尊母の右脇は菩薩の完全行の徳に依りて、其胎内清淨となれり。時に、正妙項菩薩は無數の天神と種々無量の供養とに圍繞せられて、親史多天より下りて、六牙の小白象の相となり、夜三更に於て、尊母の右脇より入り給へり。入るや否や、生後六ヶ月程經たる、赤子の相好具足したる者となり、尊母右脇の淨曼荼羅内に安住し給へり。此曼荼羅は十方塵沙の徳と齊しき龍精殿にして、菩薩は此中に安住し給へり。ラムナム

第二十七節 宿胎。菩薩入胎後七日間は、大空大地、皆供養性徳果の莊嚴たる大蓮華に満ち、三千大千世界の精たる甘露は彼蓮華上に滴々たる玉と宿れり。大梵天王獨り是れを見て、瑠璃器に入れて、供養せるに、菩薩是れを飲んで御身を増長し給へり。此甘露は他の衆生の消化し能はざる者なり。尊母の胎内に宿れる御身の光輝は赫々として火の如くに輝き、五由旬の間を照せり。時に尊母は云へり。四天王等は毎朝法を聴く爲めに來至し、日中には切利天の因陀羅王等來至し、次で梵天及十方の諸菩薩來至して、皆聽法するを見る。是の如くして十ヶ月間、尊母の胎曼陀羅内に安坐して、十方の諸菩薩、諸天善神、八部衆等、無數の所化の爲めに濟度の縁を結び給へり。

誕生の時近づくや、淨飯大王の庭苑に三十二の瑞相出現せり。苑内の諸花、池中の衆華、及び諸樹の花、皆満開して、綵綺爛漫たり。八寶自ら生じ、二万の秘藏自ら其口を開き、殿裡には諸寶自ら現はれ、水道及寛の水は皆芳香を發せり。穀類熟酥に至るまで皆美香を放てり。雪山より來れる五百の仔白象も來て王官に鼻尖を接觸し、神の童

子等は摩耶夫人の侍女等の歡喜中に交はり、龍女等は供養の花果を以て空に舞ひ、十千の天女等は寶傘蓋、寶旗を以て空に列し、百千の天女は鼓を打ち、唄を吹き、美妙の聲を以て歌へり。空には風塵なく、河水靜にして、宇宙の絶調をしらべ、日月星辰も共に歡喜の色を表はせり。宮殿樓閣は寶幔莊嚴し、武器庫、下馬臺は寶珠嚴飾し、種々の寶衣は倉庫に満ち、自ら其戸を開けり。聲なき梟鳥すら妙音を發して歌ひ、人間惡業の相續を絶ち、四方皆平垣にして、街衢市場等、皆平和の花に満ち、妊婦等は皆安く赤子を産せり。沙羅樹林の神等は樹葉の間より半身を現じて恭敬禮拜して、佛の誕生を待てる等の事現はれたりき。ム、ンガバ二〇、二二丁

第二十八節 誕生。時に摩耶夫人は藍毘尼苑に行かんと命せ出されしかば、淨飯大王及び善覺王は特に諸臣を派して、藍毘尼苑を掃除し、別宮小亭を莊嚴せしむ。時に其苑に於て、誕生前兆の大祥瑞は此地の總べての寶殿に現はれ、寶蓮華蕾其花を開くや、一々御誕生と云ふ歡びの聲を發して華光爛々たり。十方諸佛子の發心より成佛までの諸相現はれたりき。而して淨飯大王は特に臣下を派して、迦毘羅城より藍毘尼苑までの道路を掃除し、香水を撒せしめ、種々の花を散じ、百千の歌女をして

音樂に和して歌はしめ、百千の寶車を列し、守護の勇兵一人をして各要處を守衛せしめて、後に諸寶を以て嚴飾せる寶車中に摩耶夫人を安坐せしむ。四天王は寶車を引き、因陀羅王は先驅し、梵天王は側らに立ちて、王扇を持ち、無數の諸天善神等歡喜供奉して隨行せり。一行の藍毘尼苑に到着するや、摩耶夫人は寶車より出で、林苑より林苑にと歩み給ひ、一々の樹を見て進み給ふに、平坦なる地上に細軟なる青草繁生せり。中に樹王あり、無憂樹アソコカと云ふ。其花天上人界の莊嚴にして、美香馥郁たり。樹幹枝葉は諸寶を以て成れる如く、威容堂々たるものあり。

時に摩耶夫人は右手を延ばして、其樹枝に掛け給ひ、空を見給ひしに、夫人の右脇よりして、黄金塊、百千日光の潤光あるもの、頓に出でたりと見るや、佛身誕生あらせられたり。而して梵天王及び因陀羅王の二神は天衣カーシカを以て尊身を受け、難陀優婆難陀の二龍王は甘露の雨を供し、無數の天人天女は天の香水を以て、尊身を灌浴せり。而して梵天と帝釋とは尊身を空中に捧げんとするや、菩薩は是れを制止して地に下り、四方に七歩づゝ歩行して、天上天下唯我獨尊と一大獅子吼し給へり。而して菩薩の身は千日一時に照耀するよりも猶ほ雄大なる光輝を以て、總ての世界

を照らし給へり。其光地下に至りしかば、地中の衆生は此光に觸れて、皆其苦悶を消滅して、平安の樂を受けたりき。

時に無邊の大空は天人天女の供養寶雲に満ち、苑内の樹木一時に開花して果實を結べり。天空よりは花の雨降り、三途の苦患消滅し、一切衆生煩惱に惱まず、不具者も具足し、大地も震動せり。又菩薩の誕生と同時に四大國の王に王子誕生せり。舍衛國王脇飛淨光に太子生れて、國內光輝に満ちたれば、光照勝 Prasenajit 波斯匿と名づけらる。次に王舎城の大蓮華王 Mahapadma に太子生れたる日、身の光るが如く現はれたると、妙莊嚴妃に生れたるを以て、妙莊嚴精 Bhisita と名づけらる。憍賞彌國の百戰王に王子生まる、世界に日の上り照らす如くなれば、優陀那 Udana 上照と號けらる。耶闍衛城 Ujjayini 現今の Ujjain の無邊際王 Anantane mi に王子生れたるに世は燈光に照されたる如くなりしかば、最照と名づけらる。又同時に釋迦城市に於て跋提梨迦難陀等の五百子生れ、他の釋迦種にも多くの男子出生し、優陀夷等侍従たるべき者八百人、耶蘇陀羅女等釋迦族の女子十千及侍女八百人、並に王族婆羅門族の家族に二萬の女子生れたりき。又金色白顔の韃陟 Kantakanam 「悉達太子の乘馬」を初め

として、二萬の牝牡の馬、及一萬の象、六千の牛等生れたりき。黄金にて莊飾せる二萬の大象は空より聲を發して迦毘羅城に來れり。瞻部洲の中央金剛座の在る所に於て阿濕波他樹「Ashvattha」一名畢波羅 Pippala と云ふ、後に如來は此樹下に於て成道したれば後世此樹を稱して菩提樹 Dohi druma と云ふ「生じ、無熱惱池の岸に於て優曇波羅華等の花開き、諸小嶋には白檀林生じ、山上には寶樹生じ、ロヒニー河の岸には徳の精と名づくる樹生じて、一日の中に二十五尋の高さに長せり。旭日の出づる前には爪先にて摘み去り得る程の小木なりしが、日出でて後は火も焼く能はざる程に生長せり。藍毘尼苑に於ては蓮華形の如き率堵婆(塔)を造りて佛身誕生塔と稱せり。菩薩愛用の爲めにとて花苑を獻する者五百に及び、五百の秘寶藏現はれ、迦毘羅國周圍の小王等は貢を收めて大王の下に伏せり。是の如くなりしを以て淨飯王は謂へらく太子生れて我願ふ所の意は一切成就せり。故に一切成就太子と名づくべし」[Sarvārtha siddha 俗に略して悉達太子と云ふ。ラムナム、ンガバニ、二四丁]

第二十九節 仙人等太子の相を觀す。時に父王及母后は觀相師等に尋ねられしに彼等は讖言して曰く、雪山の麓にしてバハギラチー「Bhagirathi」恒河の一名なれども雪山より出づる諸流は皆恒河と呼び特にロヒニー河をバハギラチーと呼びたるなり「河の岸にして、迦毘羅仙人の住居と甚だ遠からざる所の釋迦族に生るゝ童子は、若し家に在らば轉輪聖王となつて四天下を有すべし。若し出家せんか、完全なる佛陀世尊となるべしと云へり。

菩薩は是の如く誕生の大瑞相を以て、無數の衆生に濟度の縁を結び、廣く天上人間の供養を受けて、七日間藍毘尼苑に住し給へり。菩薩誕生の光輝か總ての世界を照せし時、ヒマラヤ山中の普持雪峯 Sandhara に住する黒無煩惱 Kalā a ita と名づくる仙人及同處に住する多くの仙人等は彼光輝を見、且つ諸天善神の空間に於て歡喜の聲を發して菩薩は誕生し給へり。將に成佛して法輪を轉じ給ふべしとて、廣く發する歎美の聲を聽いて、彼等は互ひに告げて曰く我等は彼菩薩を禮拜する爲めに出發せんとして熟議一決せり。彼等の中の一人、智者仙人は云へり。今は大梵天王及因陀羅王等諸神の有力なる者等は多く彼菩薩の前に在れば、吾人は菩薩に拜謁する機會なし。されば菩薩が迦毘羅城に御歸着の上遇ひ奉るべしと決したりき。七日の後、天神人間等が無量の供養を以て行列して、菩薩を迦毘羅城に歡送せり。ラムナム、

尊母摩耶夫人は菩薩を生んで七日の後、崩御して三十三天に生れ給へり。是れ菩薩の出家せられん時、尊母にして世に在しまさば、心臓破裂せんばかりの悲歎を受けらるゝことを、菩薩は知られし故に、誕生後七日を経て定命の終れる時を計算して其時を以て胎内に宿られしものなり。ヤール三二二丁

第三十節 悉達太子神祠の参拜。當時國俗の習慣として、赤子の生れし時は、其生後幾日もなく、其赤子を抱いて、各自の國神を祭る爲めに、其神祠に詣づることなるが、此習慣は釋迦族の間にも行はれて、彼一族中男女の何れかゞ生るゝ時は、竹林中に住する有名なる神、釋迦婆縷陀那藥叉シツキ、ワル、カク、ナ、イケンヤの足下に禮拜の爲めに、其祠に詣づることなれば、釋迦族中の老人等は、太子の神祠参拜を大王に奏請せり。大王は其請を容れて、總ての市街を清潔ならしめ、且吉祥莊嚴せしめたりき。又大王は摩訶波闍波提夫人「Mahaprajapati 大生主」一名橋曇彌トウミ Gautami 明女と云ふ、佛の伯母にして、摩耶夫人の結婚後、淨飯王に結婚せりと云ふに命じて太子を神祠に詣でしむる前に、太子の両耳朶に穴を穿ち、獅子形の耳飾を着けて後に参詣すべしと。時に太子は云へり。神

等は我に隨ふて禮拜する者なれば誰れが我上に立つ者あらんや。然れども世の習慣に隨ふて行ふべし。道路中多くの人に遇はゞ彼等は歡ばんと。而して大王は太子を膝に乗せて、諸寶の嚴飾せる馬車に乗じて行幸せられしかば、釋迦一族の勇者等は太子の威相に勝へずして、少しく低頭せり。下等の動物に至ても、吠吼咆哮の聲を發せず。太子の行列を敬して觀望せり。是の如く太子は釋迦一族の勇者等に勝ち得たれば、大王は太子を釋迦の勝者なりとして釋迦牟尼と名けたりき。而して太子は神祠に着いて祠内に入らんとし給ふや、藥叉釋迦婆縷那は驚いて太子を迎ふる爲めに、祠外に出で來て、太子の両足に彼の頭を接けて敬禮せり。太子が右足を一步祠中に入るゝや、日天子、月天子、四天王、因陀羅王、自在天王、大自在天王、梵天王等の神等は各自の天國より、瞬時に來て、菩薩の足を禮拜せしかば、大地爲めに震動せり。時に父王是れを見て諸神さへ太子を敬禮するなれば、是れ神中の神なりとして、亦神中神と名け給へり。ラムナム、シガバ二四、五丁

第三十一節 阿私陀仙人の菩薩觀相。當時印度國民の尊敬の中心たりし阿私陀仙人は其眷屬と共に菩薩に拜謁の爲めに皆空を飛んで行けり。然れども迦毘羅城

に近づくに及んで、菩薩の威力に依り、彼等は皆其神力を失ひ、地を歩んで、城宮に到着して、淨飯大王に太子に拜謁の事を願へり。大王は大に歡んで、仙人等を敬遇し、美なる榻床に坐せしめて、太子に謁せしむ。仙人等熟々太子の相を観るに三十二相八十種好具足したれば大に信心歡喜せり。且つ太子は何時法輪を轉せらるべきやを觀するに、御壽二十九年にして出家し、六年苦行し、次で成佛して法輪を轉せらるべし。然れども彼等自身は其れまで長命する命數なければ、無上法の甘露を味はずして死すべしと知りて、悲歎の余りに泣涙潜々として下れり。時に大王、仙人の泣涙するを見て、大に異んで太子に不祥の相ありやと仙人等に問へり。仙人等答へて曰く、太子に何等不祥の相なし、太子は確かに成佛して、法輪を轉せられん。我等は其時まで、世に住する壽命の力なくして早逝せん。されば如來の甘露法に潤はざる不運を悲歎して泣涙するのみなりと云へり。而して仙人等は菩薩に善縁を結びたるを喜び、未來の善導を願ひて、山家に歸去せり。

是の如き事實を能く注意して、自心に判する時は、菩提道次第の修練の方法に於て一層の確信を生ぜん。彼梵天王因陀羅王の大神力を以てしても、又彼阿私陀仙人等

の五大神通力ある者を以てしても、菩提道次第の要法は誠に聞き難き者なることを知るべし。されば菩提道の次第法を修練し得る時は千萬劫にも遇ひ難き者なることを能く知りて、一度遇ひ奉れる此無上法を相續して、菩提道次第を確に修練すべき者なり。ラムナム、ンガバ二五、六丁

第三十二節 太子學術技藝を學ぶ。太子七歳の時、冠を戴くの式典を擧げて祝宴を開けり。星王に宿れる時、寶飾を着け始めり。其實飾は釋迦族の大王、太子の爲めに擇んで造らしめし特種のものなれども、太子の身に着くるに及んで其實飾、光を失ひて暗昧のものとなれり。時に其前苑に住する無垢天女は其天身を明かに現はして曰く、太子には自然の相に具足せる莊飾こそ美なれ。人工の莊飾を爲すは却て醜しと云ひて彼天女は消失せり。

菩薩は工巧明の技藝を以て衆生を化度すべき時來りしかば、父王は先づ太子をして學校に入らしむ。當時兒童の教師に一切友 *Sarva mitra* 一名兜蟲 *Krimi varma* と稱する一切の字類を知れる所の學者の學校に、大王は太子と多くの大臣侍従を率ひて到着せり。彼教師は菩薩に遇ふや其威嚴に打たれて失心平伏せり。時に觀史多の天

子來て曰く人間の中には菩薩の上に立て教へ得べき者一人もなし。然れども菩薩は衆生濟度の爲めに學校に入り給へりと云ひて、彼天子は柔輓の手を以て、一切友を助け起して去りたりき。而して淨飯王及大臣等は歸城せしが、太子に隨從せる侍童子等五百人は太子と共に學校に留りて一萬の學童等と共に學べり。

太子は龍心白檀木に天黒色を塗れる習字板の其端は金飾の穴と寶玉を飾れる物を以て坐し給へり。ラムナム、ンガバニ五、六丁

(現今印度の古風の學塾には生徒は長方形の黒色塗板を持ちて其上に白粉を一面に布き、竹の先の尖れるものを以て習字せり。此習慣は今猶ほ西藏人の一般に用ふる所なり)

教師一切友は一種の字類よりして五百種まで誌せしに、太子は是れを見て是れ皆余の知る所なり、其他を誌すべしと。一切友曰く此世界にては是れより以上は用ひざるなりと答へしかば、太子は梵天に屬する文字の種類等、前古誰れも聽かざりし所の文字語類を多く説明し給へり。ラムナム、ンガバニ六丁

教師一切友に修學せらるゝ如く示し給ひし時、教師は一字類五百種まで献せしに、

菩薩は是の如きは皆知れり。蓮華心等の字の種類六十四の中より汝の知る所を誌せと命せられしかば、教師は其名すら知らざりしが故に只管驚歎するのみなりき。菩薩は自ら字を誌して此字體は何なりやと尋ねらるゝも教師は知らざりき。是れは梵天の字なりと示し給へり、時に梵天王は空中よりして是れ梵天の字體なりと云ひて證したりき。ヤーセル、三二丁

太子は説明し給へり。文字の自性に就いては阿と發音する時は一切萬法空にして無我なり又總ての行の苦なる自性等の意義の確實に出だせる字體及法の聲性等を説明せられたりき。されば教師及び他の一萬の兒童等も是れを驚歎して菩提道に縁を結びたり。ラムナム、ンガバニ七丁

次に數學部に於ては、數學専門の大學者有得 *Arjuna* の許に行かれて數學を學ぶことゝなれり。然れども教師は却て菩薩より彼の嘗て名をだに知らざりし所の數法を聞かされ、且つ極微塵に入るの數法を示されたりき。即ち三千大千世界の極微塵數が幾何ありやを知るの數法にして、是れを示されし時は、天人共に驚歎して多くの衆生も共は佛道に縁を結びたりき。次で弓藝、擊劍、柔術等の武藝を學ぶことを示



されしが一々從來誰も爲す能はざりし所の名手たることを示されたりき。されば多くの觀る者をして驚歎せしめて一々道縁を結ばれたりき。ラムナム、ンガバニセ丁菩薩は天文学及醫學等にも深廣の智識あることを現はし、又歌舞音樂の類に至るまで、其蘊奥を極めたることを示されたりき。ヤーセル、三二三丁

第三十三節 悉達太子理想の婦人。太子十六歳を終りし時、釋迦一族の老人等は大王に太子誕生後觀相家及仙人の豫言もあることなれば、早く妃を迎へて、出離の道を防ぐに如かずと奏聞せり。而して父王は悉達太子に其意向を尋ねられしに、太子は答へて云へり、別に婦人を望まざれども、若し其心優美にして欠點なく、后妃の性徳を具へたる者あらば娶るべしとて、其要を詩句として、文字に誌して、父王に上れり。ヤーセル、三二三丁

誰れにてもあれ性質と  
信實の言語を話さざる

我こゝろをば慰めつ

其行狀の善くなくして  
つねなみくの婦人等は

わか望みにはあらぬかし  
喜ばしめて事へなん

たれにてもあれ恥を知り  
血統清き家系より  
詩句に綴りて誌すなり

おのれを省み戒めず  
我のぞみにはあらぬかし  
まして美はしき身をもてご  
赤子の母を慕ふ如と  
物施すにいさみつゝ  
かゝる娘のあるならば  
誰人をしも慢らす  
自欺嫉妬の思ひを棄て  
夢のうちにも假初の  
おのが夫に満足し

身は美はしく年若く  
得られん女の其徳を  
かゝる娘のあるならば

我は受けんと願ふなり  
理由なく過す婦人等は  
いと年若き光潤に  
美を驕る心更になく  
愛情の心深くして  
比丘淨土に供養する  
父よ我身に與へかし  
怒らず虚榮の心なく  
正しき記憶の續きつゝ  
あだし夫をば思はざる  
常に慎み恥を知る

尊大ならず卑屈ならず  
 我慢を離れ僭越を  
 美音芳香美味にさへ  
 欲を離れていやしくも  
 足る事を知りて善く用ふ  
 道に迷はずたゞよはず  
 嬉々戲笑を樂ます  
 常に其身の行爲の  
 こゝろと口と身のわざは  
 昏昧き心はさらになく  
 理をわきまへつ善き道の  
 精神の師に事ふる如く  
 下男婢女を使ふにも  
 論書に誌せる式禮を

中和の禮儀を善く習ひ  
 爲さざる故に婢女の如と  
 執着離れて酒飲ます  
 得んとはなさで我財に  
 正義を守りて假初の  
 謙遜の衣を常に着て  
 神や祭禮に執着せず  
 徳つむことにはげむなる  
 いとく清く睡眠にも  
 愚のこゝろを考へず  
 わざをば常に行ひて  
 舅姑に善く事へ  
 なべて我身を愛する如と  
 遊女の如くに善く知りて

朝あしたに早く起きいで、  
 母の愛情なさけの清きこと  
 柔和にもてなすたほやめの  
 時に父王は此詩を得て、大臣等に命じて、迦毘羅城中に是の如き者あるやを尋ねし  
 め、且つ一詩を附加して注意せり。  
 王族と婆羅門族との別はなく 商族農族何れにてもよし  
 誰れにてもあれ其徳の かくる娘のあるなれば  
 此處に來よかしわが愛子は 種族の區別を問はずして  
 眞に道徳ある者を 歡び求めて迎ふなり

カンジュール、ドー、カハバ、一〇六、七丁

第三十四節 太子婚を擇ぶ。是くて諸臣等は城中に是の如き徳ある者あるやを  
 尋ねしに、一婆羅門あり能持笏 Sakya danda pāni と云ひ、彼の妻を美麗眼と云ふ。其間  
 に一女あり。彼女は生れし時より非常の美貌にして、其名稱高かりしを以て持名稱  
 女 (Yashodharā) 耶輸陀羅女、法華文句には華色の譯あれども典據なし。大日經の持名

稱者を正しとすと名づけたりき。諸臣は耶輸陀羅女を見しに非常の美人なりしを以て、父の婆羅門に對して、太子の詩を示して、彼女に是の如き徳あるやを尋ねしに、婆羅門は廣く彼女の徳を説明して、彼詩の意に適合する者は耶輸陀羅女なることを明かにせり。

諸臣等は是れを大王に報告せしが、大王は大臣と謀りて、太子か何れの娘を好むや慮り難ければ、其れを判する爲めに、城中の總ての娘を集めて、太子をして彼娘等に施物を與へしめんには、其何れに意あるやは判然せんと。此に於て太子を寶座に坐せしめて、彼城中の娘等に一々施物を與へしめしに、彼娘等は何れも太子を見ること能はず。唯だ速かに施物を受けて外に去れるのみ。而して其施物の全く終はりし時、最後の一人たる耶輸陀羅女出で、熟々太子を見て、曰く妾に與へらるゝ物は一もなし。妾に惡戯遊ばされしかと問ひしに、太子は我は惡戯せず、汝の遅れたるなりと云ひて、御手の指より價值百千金の指環を抜かれしに、耶輸陀羅女は楷段を上つて太子の前に近づき、是れを受けて曰く、是れのみを乞ふには非ず。時に太子は頸に掛けられたる眞珠の瓔珞を取て與へられき。是に於て淨飯王は太子の耶輸陀羅女

に意あることを知れり。依て父の婆羅門に彼女を與へんことを請ひしに、彼は云へり。我一族の慣例は娘を弓術擊劍柔術等總べての武藝に卓絶なる者に與ふるなり。其の他の者には決して與へずと。是れを聽きし所の大王は大に怒り且つ憂に沈みたりき。後に太子は此事を知りて、父王に奏して曰く父王城中に於て我と武藝を競ふ者あらば、我は是れに當らんと。父王は汝能く武藝を競ひ得るやと尋ねられしに、太子は能くせんと確答せられたりき。ヤール、三三三丁

第三十五節 競技結婚。一名自撰結婚 Svayamvara 時に競武の事、大城中に普く知られたれば、摩訶波闍波提の子、弟美歡喜、甘露飯の子、提婆達多、棍棒持の子、弓持、釋迦族の青年にして自負心ある者及侍従の子の優陀夷等多くの大力者等は皆競武の爲めに集りたりき。而して彼等は皆前約して曰く誰れにてもあれ、總べての競技に勝ち得たる者は耶輸陀羅女を得べしと。始めに競武場に入り來りし者は提婆達多にして、彼は其途に於て、吠舍釐國共和政治の國の梨車賈人が將來轉輪聖王たらん悉達太子に、一疋の美はしき象を獻せんとして卒ひ來れるに遇へり。彼は此事を知るや、嫉妬心を起して、左手を延ばして象の首を握み、右手の拳を以て、象頭を一度壓

して、即時に象を殺して曰く是れを汝等將來の轉輪聖王に獻すべしと云ひて場内に入れり。次に來れる者は弟美歡喜にして、彼は其死象を擧げて七歩の外に投げ去れり。次に悉達太子は是れを見て曰く此死象を此處に置かば尸骸腐爛して其奥に勝へざらんとて、其尾を片手に握り、他手に象を擧げて空に投げしに、象は城市の高壁を越て二哩前の野中に墮ちたり。其墮象の處は深く窪みしを以て、世人名けて象谷と云ふ。後世其側に塔を建て記念とせり。

競武場には多數の觀客集りて、時の至るを待てり。而して競武者は皆集りしを以て先づ始めに文學數學等を始めとして高飛、游泳、競走、投石、劍術等を競べしに誰れも悉達太子の右に出づる者なかりしを以て、天人共に讚歎の聲を放てり。次に射術を競ぶ。的は七重あり。大抵は一二を貫けるが、提婆達多是三重を貫けり。然るに太子は七重を貫きて、其箭は飛んで地を穿ちて、泉水湧出せり。世人稱して箭泉と云ふ。後人其傍らに塔を建てたり。而して何れの競技に於ても、悉達太子は最勝の地に立ちしかば、耶輸陀羅女は太子と結婚する事となれり。時に太子十七歳丙子の年、盛大なる結婚の式を擧げて、耶輸陀羅女を娶れり。ヤールセル、三二四、五丁

(迦毘羅衛城)の位置及箭泉。此兩者の位置は確實なる決定を見ること殆んど不能ならんかと思はる。本來吾人が此等位置の決定の標準とせざるべからざる法顯傳と玄奘の大唐西域記とは其位置及距離に就ては全く異なるが故に其何れに従ふて眞の位置に相當する者なるかは判明せざればなり。先づ其異點を擧ぐれば、

迦維尼衛城の東五十里、八哩餘にして王園あり。論民と名ぐ。夫人池に入り洗浴して池を出づ。北岸二十歩にして手を擧げて樹枝を攀づ。東向太子を生む。法顯傳十六丁城の南門の外路の左に窰堵波あり。是れ太子諸釋と藝を桶べて鐵鼓射給ひし處なり。此れより東南三十餘里、五哩余、小窰堵波あり。其側に泉あり、泉流澄鏡なり。(中略)之を箭泉と云ふ。夫れ疾病ある者は飲み沐すれば多く愈ゆ。(中略)箭泉の東北に行くこと八九十里、十五哩にして臘代尼林に至る。釋種の浴地ありて、澄清皎鏡にして雜華彌漫せり。(中略)大なる石柱あり、上に馬の像を作れり。無憂王の建つる所なり。大唐西域記卷六、十二丁、十三丁

是の如く法顯の迦毘羅城は藍毘尼苑の西方八哩余にして玄奘の迦毘羅城は藍

毘尼苑の西南西約二十哩の地にあり。是れを實地に徴する時は、玄奘の迦毘羅城は法顯の指定地より西南約九哩を隔てたる處にありしこと明かなり。想ふに此二大三藏の觀たる迦毘羅城は各々異なる處なりしならん。當時迦毘羅城跡と云ふ者二三ヶ處ありしなるべし。恰も現今拘尸那揭羅城跡と云ふ處はカーシヤ地方とアツサム地方との二ヶ處にあるが如き者なりしならんか。釋迦氏の主なる種族は佛在世の當時毘盧遮迦王に滅されて、其支族の各處に遣りし者等が釋尊の一族と云ふの故を以て、釋尊の滅后隨處に迦毘羅城跡を建てしに非るかと思はるゝなり。若し是の如き事が事實なりとすれば、法顯の迦毘羅城跡が玄奘の異なることも承認せらるることゝなるなり。然れども此に一の困難なることは其の果して何れか眞の迦毘羅城跡なりしかの不明なること是れなり。

現今其遺跡及遺物の存在せること等よりして見る時は、法顯傳が眞に近しと思はるゝ點なきに非ず。現今の藍毘尼苑の西少しく南に約十哩の地に「ピブラーワ Piprava」と名づくる遺跡あり。西曆一千九百年十月此地の窣堵波より發掘せられたる佛の遺骨を收めたる一小石壺を王立亞細亞學會に送れることあり。

其小壺の表面に刻文あり。其文に曰く此塔は釋迦牟尼佛陀の遺骨の爲めにして彼清淨設立者の兄弟姉妹子供及其妻等に依てとあり。是れ佛滅後其遺骨の八分の一を受けし釋迦族か、其居城の附近に窣堵波を建て、其遺骨を收めたるものなるべし。當時シヤムロ王は其遺骨を受けて、其一部を吾國の佛教徒に送れり。今の名古屋市外大覺王山日暹寺に安置せらるゝ者は是れなり。

玄奘の誌せる所の迦毘羅城に相當せる遺跡はシヨハラツト、ガンジの西方二哩半の地にあるバリガワ Parigava と云ふ遺跡是れなり。著者は三度此地方に行いて探查せしが、此地方に塔跡十數個あり。只惜むべきは其塔の煉化及石等を鐵道用材となす爲めに、多く運び去られて諸跡の煙滅に歸せし者も少からず。此處より東南五哩余にして現今マハーデーヴ、マンジャハー(大神座と名づくる井戸あり。其側に往昔小窣堵波の建ちし跡あり。又井戸の中には煉化石に彫りたる文字あり。余は是れを石摺りとなさん爲めに井中に釣臺に乗り下りて、其文字を幾枚か石摺したれども、其煉化は餘りに古くして、文字判明せず。故に其何事を誌しあるかを確かむること能はず。然れども其井水は土人が遠くより來て、靈水として取

り去ること玄奘の誌せる所の如し。而して此井戸よりして東北に十六七哩を行けば前記の藍毘尼苑に到達す。此靈水の井戸の數丁附近には古代は大寺或は大窠堵波のありしものが其遺跡諸處に存し、石造の古佛像等を土人が印度教の神として祭れる者あるを見るなり。是れに依て見るに其距離方位等よりして云ふ時は、玄奘の迦毘羅城は現今のバリガワにて箭泉は現今のマハーデーヴ、マンジヤハー井戸なりと言ふべし。

此外に迦毘羅城跡としてカンニンハム氏はチャンド、タハル湖の東岸に存在するナガル、カハ市を擧げたり。而して考古家のベンゴール人ムカルジー氏は子パール領のテラウラ、コートを以て其城跡とせり。余は此地にも親しく行いて探査せしこと三回なれども兩三藏の記事と其距離方向の一致せざれば、余は是等の説を取らず。只兩三藏の傳へし異なる迦毘羅城の遺跡に就いて、其等に最も善く相當する所の二の遺跡を擧ぐるに止るのみ。

第三十六節 太子の防水工事。慈悲心鳥類に及ぶ。太子二十二歳辛巳の時、ロヒタ河の岸に立てる七由旬余の高さある徳心樹は、洪水の爲めに其根を洗はれ、大暴風の爲めに倒され、河中に横はりて水通せず、河水氾濫して迦毘羅城の邊を浸し、明

有<sup>ン</sup>Yunnan 國は水なくして困難せり。然れば是れを除く爲めに、悉達太子は釋迦一族の子弟等と共に彼地に向へり。途中或林苑に於て提婆達多は其空に翱翔する大雁を見て是れを射たるに、其雁太子の前に落ちたり。太子は是れを取て、其矢を抜き、藥を疵口に着けて愈やせり。提婆達多は是れを太子に請求して曰く、是れ先に余の射たる所の者なれば、返却せよと云へり。太子曰く我は總べての衆生を守護せんと發願せり。汝は是れを取ること能はずと是れ太子と提婆達多との間に閒隙の生ぜし始めなり。ナールセン、三三四丁

是かる問答の間に一の毒蛇穴より出で來れり。是れを見たる優陀夷は害の他に及ばんことを恐れて、劍を抜いて蛇を胴より二つに切斷せり。蛇は大に苦んで毒氣を優陀夷に吐き掛けしかば、彼は其顔色眞黒となれり。是れより彼を呼んで黒色優陀夷と云へり。同上、同丁

其れより彼等は進んで大木の仆れし根本なる河岸に到着せし時、提婆達多は大木を壓して少しく動かせり。美歡喜は大木を擧げて少しく前に引きたる外、何事も爲し能はざりき。悉達太子は兩手に大木を擧げて、空に投げしに落ちて二に拆斷せり。

其各部を兩岸に分置して氾濫の口を防げり。而して歸城の途中多くの觀相家に遇へるに、彼等は異口同音に此太子にして七年後に出家せずんば、必ず轉輪聖王となるべしと、侍臣等に告げたりき。同上、三二四丁

又釋迦族の振鈴聲の娘、土養女の容色美にして意に適へるを車上より見て、彼女を聚り給へり。ヤーセル、三一五丁

(漢譯の一説にはゴーパー女は耶輸陀羅女の異名なりと傳ふるものあり)

### 第四章 四門出遊より成道まで

第三十七節 四門出遊、老病死出離法を觀す。其後諸天善神等は太子が後宮三千の侍女等の娛樂に時を過てして、出離の大事を忘るゝことなきやを掛念し、歌舞音樂の聲に和して、出離を勸むるの歌を歌へり。

もろくの苦にくるしめる 一切衆生を見給ひて

我願くば一切衆生の 救済のあるじとなるべしと

いまして誓ひ給ひにし 前生のねがひを思はれよ

今こそ決意の時なれや 仙人の君よ出家あれかし

と請ひ、又妃耶輸陀羅女が奏する音樂よりも本生傳を歌へり。

三界は老とやまひの火ぞもゆる。斷へすにもゆる。火宅なる。

此處に救済のあるじなし。はや三界より出でたまへ。

有情の暗く、迷へるは、壺中に蜂の飛びまはる。狀にも似たり。

三界の常なく變はる、ありさまは、秋の雲にも、似たる哉。

衆生の生命の短きは、束の間過ぐる。電光の消ゆるにも似て。

山のまに、鋭く落つる、瀧水の。早く行くにも似たりけり。

と云ふよりして(中略)

本の誓願、思はれて、愚痴や無明の、雲深く。

迷へる衆生に、嗟呼君よ。般若の妙の、光輝をば。

放ちて法の無垢の眼の、煩惱なきを與へよや。

等、廣く諸願の意を表したれば、太子も最早出家の時、來れることを、内心に考へられたりき。其後太子は林苑觀望の爲めに、乗車して、東門より出で給ひしが、淨居天の神

等の化したる衰顔せる老人の、苦に打たれたる者あるを見給ひて、太子は御者に問ひ給へり。御者よ、

いかなる人か、瘦せ悴けて、

元氣も威光も、更になし。

肉さへ血さへ、枯れ果て、

皮膚筋肉も、骨に着き。

頭髮白く、齒は、落ちて、

その身は全く生氣なし

杖にすがりて、よろ／＼と。

歩める者は、そも誰ぞや。

御者答へて曰く、殿下、彼は年老ひたれば、其身體衰敗して、全く精力を失ひて苦めるなり。恐くは親族の顧みる者なくして、此林中に枯木の如く、棄てられたる者ならん。太子又問ふて曰く、

かゝるためしは、此人に、

限れることか、さはなくて、

すべての人にも、あることか。

知らねばならじ、告げよかし。

御者曰く、殿下、此事たる、特別の例はなく、人皆青年、壯年を過ぐれば、老衰するなり。假令殿下の御両親、御親戚と雖も、老衰より免るゝの道は更になし。太子曰く、然らば御者よ、車を返へせ。是の如き大事のあるを考へずして、云何でか優遊娛樂すべき、我

にも老の來らんとはするなり。老いて後、何となすべきやとて、其日は林苑に遊ばずして宮城に歸り給へり。

其後、南門に出でられし時、病人を看て問ひ給はく、

御者よ

顔色青ざめ、肌膚は荒れ、

五官のはたらき鈍くして、

呼吸の息もなし難く、

手足は枯れて腹いたみ、

苦み叫んで已かせし、

尿尿の中に居るは誰ぞ。

御者答へて曰く、殿下、彼は甚しく病氣に悩み、病氣の爲に死なん事を恐れて、一層苦めるなり。病氣の爲めに顔色、光澤、脉力等、總べて消滅せり。太子は、

苦しき病氣の、なくてさへ、

うつせみの世は、夢のうちに、

たはむれ遊ぶと、同じきを、

まして病氣の、苦惱や、

恐怖のかゝるものありて、

忍ぶに難き、ことなるを、

觀たる識者は、云何にして、

娛樂を歡び、美女を戀ふ、こゝろ生せん、

とて其日も車を返へして、宮中に歸へられたりき。其後、西門に出でられし時、死人を



見て云へり。

御者よ

床の上にぞ横はる。

頭上に土をふりかけて。

いろ／＼の事を云ひつゝも。

彼運ばるゝ其人は。

人を見よかし、頭髮はなく。

彼を圍める、人々は。

悲歎に腦を、打はたく。

そも／＼誰ぞや、告げよかし。

御者曰く、殿下、彼は此世より死し去りたる人にして、最早彼は復び父母妻子兄弟親戚を見ること能はず。又其財産親友等の總べてを棄て、彼世に去れるなり。故に彼親族等は悲歎せるなり。太子謂へらく。

老の苦み現はれん。

若き者とぞ、なり得ざる。

苦しみ惱める、いかなれば。

此世に長く留まらず。

不死の生命を持ち得ざる。

何故常世にかはらざる。

千々の病氣ゆ身を害し。

無病の者となり得ざる。

いかなればにや學者等か。

幸福歡樂たれもみな。

受くるを願はん何故に。

たとひ老なく病氣なく。

五蘊の身をもつ我々は。

況してや常に老と死と。

いかにしなば脱かるべき。

我は此等の苦を脱かる。

學者の是れを見いださざる。

死の苦みの、なくなるも。

大なる苦痛を脱れず。

病氣の苦の輪は廻れるを。

車を返へせやよ御者よ。

道修めんと願ふなり。

とて宮中に歸へられたりき。其後北門より出でられたるに、一人の沙門に遇へり。太子問ふて曰く、

御者よ、この人は、心靜かに、穩かに、脇目もふらず、ひとすじに、眼前六尺、ほごを見て、

歩行なしける。

其身には、黄色三衣手には鉢、つけて持ちて、高ぶらず、荒ますいとも、徐ろに、行きつ

つあるは、誰なるぞ。

御者答へて曰く、

我君、彼は、沙門とて。

五欲の樂を振り棄てよ。

信實に心を正しつゝ、

家を出でたる者にして、

食を乞ひてぞ、世を送る。

太子は歡喜して云へり。

善くこそ言ひたれ、我も又。

眞の出家は識者等が。

この業こそは自己をも。

衣食も安く、思想をも。

果をば得られん。ラムリム、ンガバ、二七丁、三〇丁

自ら寂滅、求めてぞ。

貪欲瞋恚を遠離して、

修行者にこそあれ。

是くぞならんと願ふなる。

常に讚歎、し給へり。

他の衆生をも利するなれ。

安く過して、不死滅の。

第三十八節 瞻部樹下の禪定。 錚飯王は太子が西門出遊の後、大に憂愁苦悶する情あることを知られて、是れを慰め且つ出塵の念を斷たしめんと欲して、太子に田舎農家の作業を見せしめ給へり。大王は自ら太子を伴ひて、遠く田舎に行きしが、其途中に於て、或者が地下の秘藏を開掘して、無數の寶器を得たれば、太子に獻せん、一見せられたしと請へり。太子は是れに對して、我は斯の如き者に要なしとて退け給

ひたりき。太子は彼等が重き黄金等を抱いて、汗を流して、苦み行くを見て、其苦痛を憐み給ひて、汝等安くあれかしと命せられたりき。

又農民耕作上の辛苦、非常なるを見て、深く思想を凝らして、瞻部樹の下に坐し、一心に世の實相を觀じ給へり。是くして時、正午を過ぎたるに、太子の坐處には、樹影留りて、太子を覆へり。是れを觀たる所の大王始め從臣等は、大に驚いて、其不可思議の徳を大に讚歎せり。歸路に就くや、途中に墓所あり。遺棄せる死體の散亂せるを見て、死に對する觀念特に深く、車を止めて觀念に入り給ひしが、父王は太子を促して、宮城に歸り給ひき。ヤーセル、三一五丁

第三十九節 父王に出家の出願。 耶輪陀羅女との別離。 太子二十九歳、戊子の年「ラムリムも同年の説吠舍迦月、陰曆の四月なり、ラムリムは陰曆の秋七月とあり」の八日に愈々出家なさんと決心せられしが、其月の始めに當て、宮庭に前兆あり。樹枯れて、蓮華開かず。孔雀鳥等聲を發せず。立琴の糸、自ら切斷し、宮女等睡眠に壓せられ、何を爲しても、歡喜の心を生せず。されば父大王は御心安からず。摩訶訶闍波提夫人は八の惡夢を見、父大王は二の惡夢を見、妃は十二の惡夢を見給ひしかば、觀相家

等に尋ね給へり。彼等は皆曰く太子にして今後七日の間に出家せざれば、必ず轉輪聖王となるべしと。

釋迦善時の娘、鹿生女ムリガシヤは最も勝れたる美人なるが、彼女は窓より子の通過するを見たるに、太子は首の瓔珞を投げ賜ひしに、彼女の首に懸れり。父王は此事を知り給ひて、鹿生女と其侍女二萬人と共に太子の妃に迎へ給へり。ゴーパー女の侍女と、耶輸陀羅女の侍女と、以前より父王の給せられし者等、合せて八萬四千人の侍女ありて、完全に遊戯せらるゝと雖ども、色慾に汚されず、正行と相應して住し給へり。然して父王は愈々太子の出家を防がんとして、大臣及親戚を集めて、太子の出家を防ぐことに就いて凝議したる結果、城市の周圍の七重防壁の城門戸を鐵板にて作り、其れに大鈴を結びて、戸を開く毎に大聲を發せしむ。又太子には多くの美女をして音楽歌舞の中に日を過さしめ、其外部には大臣等、晝夜交替して守護せり。而して城の四門には淨飯王及他の三弟は各々一門を守れり。斯の如くして六日を経たる時、太子自ら謂へらく、我父王に出家を請はずして家を出んか、是れ父王の許さざる所なれば爲すこと能はずとて、其夜人々の眠に就かんとする時、父王の前に行き、敬禮して

曰く、父王よ我が出家の時來れり。出家の防碍を解き給へと願はれしに、父王は眼に涙を濺へて、三度まで嗟呼我子よ此處に居らば我等を益せんに善く心せよと命せられき。太子は更に願はれたりき。父王よ我は老病死苦を解脱する道を行はん爲めに行くなり。父王は曰へり。我子よ、我は許すこと能はずと。太子は又願はれき。此事を許し給はずば、今後我に輪廻の苦を受けざることを與へ給へと。父王仰せられき。されば汝の思を成就せよとて許し給ひたりき。ヤール、三一五、六丁

父王は將卒を率ゐて城門を護られたるが、余りの疲勞に一睡せられしに、夢に太子は出家せんことを願はれたれば、父王は仰せられき。汝は既に教師の資質清淨にして執着なく、眞實言の究竟に達したれば、誰も其言を左右すること能はず。故に汝の眞實言を成就すべしと許容せられたりき。ナム、チヨエ、コルギニル、二二三丁

斯くて太子は父王の御前を退き、寢床に入て、觀じ給ふに、我若し此儘にして出家せんか、世人は我を以て、中姓の者と誹謗せん。是の如き誹謗の罪を避けしめんが爲めに、我は耶輸陀羅女と同衾すべしと。時に傍らの寢床に眠らるゝ耶輸陀羅女の夢に、宮殿の棟梁折れ、齒落ち、頭髮亂れ、太陽東より出で、東に入り、悉達太子は大地を寢

床にして、妙高山を枕にし、臍の中より一道の氣管起て、天空に至り、身體より光明を放つて、闇黒を照破する等の事を見て、夢覺めて恐怖に打たれて、其事を太子に告げられき。太子告げ給はく、其れは心勞なり、不安の心を去るべし。然れども妃は太子の出家せられんことを怖れて云へり。殿下は何處に行かれ給ふとも、妾を伴れ給へど、涙と共に強く請ひ給ひて悲痛已まざりければ、太子は汝の爲めに悪くはなさじと慰め給へり。時に太子は心中一點の汚念なくして、英雄行三昧に入り、妃と同衾して、彼胎中に金剛薩埵の化身を宿し給へり。而して太子は念すらく、是れ婦女女子と同衾することの最後なり。今後婦女女子と一瞬間と雖も、同衾せざるべしと謂はれたりき。ヤール、三一六、七丁

第四十節 出家。悉達太子は戊子の年孟秋の月、八日の未明以前、即ち星王に宿れる時、宮殿の上に行いて、十方の諸佛を禮して、一切衆生菩提成就の爲めに、速かに成佛すべしと誓願せられし時、空間に満つる所の諸の菩薩並に梵天、因陀羅、四天王等の諸天善神、八部衆、及金剛手等、來集して、菩薩が出家する道路を、殿上より作るべし。然らざれば菩薩の出づる道なし。殿中の總べての門戸は堅く守護せらるればなり。

即時に毘沙門天王神工を督し、梯道を造り、乘馬健陟クシヤカを上れり、次で菩薩は健陟に乗り、梯道より下り給ふに、因陀羅王は祥瑞の東門を開き、梵界の諸天子は健陟の右側を捧げ、欲界の諸天子は左側を捧げ、梵天王、帝釋天王は鼻を引き、一天皆供養の具に満ち、諸天善神供奉し、四天王は乘馬健陟の二足づゝを持ちて、急速力にて釋氏の國境を越え、馬窟國、英雄國、Vinaを過りて、迷寧耶國、Menevaの城市より、猶ほ六瑜繕那を過ぎて、弗栗特、Vivika城の側に流るゝ適竟河、Gandaki今のガンダク河の岸に着かれし時、夜は明けたりき。或歴史家の説に依れば、釋氏の宮城よりメナヤ國まで六瑜繕那なり。而して、メナヤ國より適意河まで六瑜繕那にして、計十二瑜繕那即ち八十四哩、朝まで着きたりどあり「ヤールも此説に同じ」

其の處には過去三佛の結髮を剃りし所の三結髮塔、Tivviniの清淨なるものありき。太子は其前に於て馬より下りて、首の瓔珞等の莊飾を解き、此等を馬丁車匿チヤンナに渡し、是等を父王及妻等に送れど命せられしかば、車匿は泣涙雨の如く流し、嗚咽しつづ口へり。殿下、宮中に於ては多くの從者を従へられしに、今より唯だ一人にて此肅しき山中に云何で過さるべきと云ひしに、菩薩は慰めて云はれき。

何人も生るゝ時は唯だ一人。

臨終の時も單獨にて。

死に逝くぞかし此世にて。

苦しむ時もひとりなる。

六道輪廻の世の中は。

おのれ單獨の其ほかに。

友はあらしと知れよかし。

而して菩薩は自ら刀を抜いて、頭髮を斷ち、空に散じ給ひしが、帝釋天王其等を空中より集めて、三十三天に持ち行き、塔に收めて、神等か供養の所依となし、毎年其日を以て、剃髮記念の祭禮を行へりと傳へらる。而して菩薩は念すらく、斯の如く美なるカーシー衣を着くるは、出家として不適當なれば、粗末なる黄色衣を着けんと念せられき。時に帝釋天王其意を知りて、黄衣を得て菩薩に供せり。而して帝釋天王はカーシー衣を頭上に戴き、三十三天に持ち歸りて、頭髮と同じく供養の目的として、毎年祭禮を行へり。此名跡即ち適意河の側に於て、剃髮塔、着黄衣塔、並に車匿返還塔の三塔ありと稱せらる。ラムナム、三〇、三二丁

是れより先、無模城に於て、一の老母が十人の獨覺に大麻布の黄壊色衣を奉りたりき。然れども獨覺等は云へり。我等は直に死去せん。釋迦牟尼は佛と成られん。彼方に

供すべしと云ひて返還せり。老母死なんとせし時に、彼娘に其れを托し、娘の死に當て、彼女は是れを樹神に托して遺存せり。此事を知れる因陀羅王は、樹神より此衣を受け、獵師の姿に變じて、此衣を着けて、菩薩の前に行けり。菩薩是れを見て、彼の麻布黄壊色衣と、自己のカーシー衣とを、交換し給ひて、其衣を着け給へり。其處に黄壊色衣を受け給ひし記念の塔あり。因陀羅王は其カーシーを三十三天に持ち行き、て供養の目的とせり。ヤーセル、三二丁

(三)結髮塔の所在。迦毘羅城より東方約八十餘哩の地にして、ガンダキ河の岸なる山地にして、ヅリゼニーと云ふ處あり。現今此邊りに住する土人は、適意河と時河と金林河との三河の合する所なれば、然かく名くと云へり。くは主なる意義は結髮のことなり。或は二以上の河の合する處と云ふ義に用ふることあり。土人等は後義を取れる者なれども、時河の如きは平時は水なき一小河床にして、河らしき者に非ず。三河の合處とは其名に過ぎたる觀あり。故にゼニーを其字の主なる意に用ひて、結髮とし、ヅリゼニーを三結髮として、三佛の結髮を斷ちし所の意に用ふること適當なりと思ふ。此地は西北ベンゴール鐵道中のマザハルブー

ル及バガハ間支線のバガハ驛より北方約二十哩の地にあり。此地はガンダキ河が喜馬羅耶山中より印度平原の大林中に流れ出でんとする處にして、其對岸は碧々たる綠水を隔て、青山の上に皚々たる雪峯、泰然として聳ゆ。其對岸の青山をマヅフルパール、即ち蜂蜜山と云ひ、金林河の東岸にある村を花の里と云ふ。是れチパール領なり。金林河及適意河を以て英領印度とチパールとの國境とせり。此地今猶ほ娑羅樹の大深林あり。此深林中に仙人の末流なる散若師の住するあり。大正元年十一月廿八日余は高楠順次郎博士等と共に此地に至り、深林中グドラ、ラーマ、ギリと云ふ散若師の仙居にて果物畫飯の供養を受けて親しく實見せり。三塔の遺存せる者を見出すこと能はざりしも、佛像等の此仙居に存するを見たり。ラムリム傳の過去三佛の結髮を斷ちし遺跡は其名の今に遺存せるツリエニ一は其距離方向地域の共に其傳に合する者あれば、此處を以て佛斷髮の遺跡とすることの適當なりと思はるゝなり。

斯の如く本師は權力無上の王位及び最愛の妻等、總べて世の貴重なる者を唾沫の如くに棄て、金殿玉樓寶冠衣飾も省みず、出家して食を乞はれたるは、吾人所化の者

に對して、是の如くに爲さざるべからずとの模範を示されたる者なり。是れ過去諸佛の解脱の方法に隨ふて、弟子等の修鍊の方法に備へられたる實例なれば菩提道の次第に於て、精確なる修行を爲さんと欲する者等は、本師大慈悲尊の如き行爲に習ひ、先づ初に、自己の郷里、親族、故舊等、何等にも執着せず、家を出で、世尊の教法に進入すべし。而して鳥の如く鹿の如く何等の貯蓄をも爲さず、生命を乞食にて捧え、菩提上進の道を修むべき者なれば、本師大慈悲尊の貴き此傳記を、幾度か拜讀して、自己の修養に資すべし。ラムナム、ンガバ、三一、三二丁

第四十一節 菩薩、頻毘沙羅王の施國家を辭す。次で菩薩は娑羅林中無模村 Anupama の棄惡仙人 Bhūgava の住處に行かれしに、棄惡仙人は花と果物とを菩薩に供せり。次に婆羅門族或は云ふ拘理迦仙人等の四人は菩薩を請じて供養せり。其れより菩薩は吠舍釐國に行き、幻術力 Kalā の子鞠鞠 Atala 仙人が三百人の弟子と共に梵行を行ふ所に行き、彼仙人に對顔せり。而して次第に行いて恒河を渡りて、摩揭陀國に入り給へり。ヤーセル、三一、三七丁

阿囉羅、迦囉羅の二仙人より、菩薩は無所有處及び悲想非々想處の心の口傳を受け

て其等を行じて明確に知られたれども、此程度に於ては解脫を得ざる者なりと知られて、彼二仙の處を去て尼連禪那河に向はれたりき。バクサム、シヨンサン(二九丁)時に菩薩は王舍城に行いて食を乞ひ給へり。ラムナム、ンガバ、三三丁

(王舍城の所在、王舍城は梵語に Raja Srinā と云ふ。東印度鐵道のバクテヤ、プール及ラー ज्या、ギリ支線のラー ज्या、ギリ驛より南二町程の處に城砦の跡あり。是れ頻毘娑羅王の新王舍城の跡にして、舊王舍城は其れより約半哩南の山門を南に入りて、周圍山にて廻れる山間の平原にあり。此平原の東北に寶山の北に當て、奇峯重巒、夏雲の如くなる小連山あり。是れを靈鷲山シリドラクレータ、ブルグワ、或は鷲峯山と云ふ。梵語に Gridhira-Kūta-Parvata と云ふ。今猶ほ大唐西域記に誌せる頻毘娑羅王の造りし山道石を敷ける大道あり。處々破壊せし所あれども、舊狀を忍ぶに足るものあり。靈鷲山中には如來の禪定せられし巖窟、阿難の入定窟、説妙法華經紀念塔等あり。此外王舍城の地方には竹林精舍、第一藏經結集處たる南山の石室、大衆部結集處の塔跡等、佛傳に關する名跡の判明せる者甚だ多し)

時に摩揭陀國王舍城主頻毘娑羅王 Bindisara は臣下と共に菩薩に遇ひしに、直ちに

菩薩は迦毘羅國王の太子、薩婆悉達多なることを知りて、非常に驚愕せり。次で菩薩に敬禮して曰く、君に吾國の半分を上らん、願くば吾友となりて、今後山谿叢林の間に住み給ふこと莫れと請へり。菩薩は是れに答へ給はく、

大塊巍然と虚空に並べる。 千萬雪峯の山の根が。

大風の爲めに搖動とも。 解脫に進む我こゝろ。

世の欲風の力にて。 動かされんや大王よ。

と云ひて、大王に別を告げ給へり。ラムナム、ンガバ、三三丁

而して菩薩は王舍城の山間、靈鷲山に遠からざる處に住する仙人の住處に行いて、彼等の行へる何れの苦行にも、一々二倍せる所の苦行を行はれしかば、彼仙人等は驚いて云へり。此行徳者 Śramaṇa は實に大なりとて、其後菩薩を呼んで大行徳者、即ち大沙門と稱せり。其頃淨飯大王の處に、太子は侍者なくして、王舍城の邊に獨り飄浪すと聞へしかば、大王より三百名の侍者と摩訶波闍提夫人より二百人を送り、然れども菩薩は念じ給はく、是の如く多くの侍者を率ゐて、修行を爲すは道に相應せずとて、其中、道心深き者五人を留めて、他は皆歸國せしめられたりき。其五人と

は父王の送りし者に就て阿若憍陳如(總知カウデニヤは姓) Ajñāta-Kauṇḍīnya 馬勝  
 Ashvajit 婆師波蒸氣) Vāśpa の三人と伯母夫人の送りし者に就て大名 Mala-Nama  
 と跋提梨迦賢者 Bhadrīka の二人なり。彼等五人は菩薩の侍者となりて、五仙人とし  
 て王舍城邊には名高かりき、而して菩薩は此處に法を修めて三月二十二日間過し  
 給へり。ヤールセル、三一七丁

第四十二節 菩薩、尼連禪那河岸の苦行。其れより王舍城より遙かの南方に於て  
 地境甚だ佳にして、淨水、尼連禪那河の南より北に流れ、住處安穩にして、邊際廣大に  
 草木繁生して、侍者の必要品を得るに便なる村落あることを見られて、此處に住せ  
 んと思はれたりき。而して尼連禪那河の西岸なる林中の一樹下に禪坐して、五濁惡  
 世の邪道、邊見の教を執着する者の解脱ならざるを解脱なりと思へる者等と天人  
 の禪定等を修する者等を化導せん爲めに、大苦行を修むることを誓ひ給へり。而  
 して陰曆十二月八日の夜の第一更より、齒を堅く閉ぢ、舌を頰に着け、意志を以て意  
 志の前行を止め、虚空に遍滿する所の禪定、即ち一意専心不動と云ふ禪定に等しく  
 入り給ひしかば、次第に感ずる所の痛苦と、御身に劇しき熱生せり。是れを見たる天

人等は悉達太子は死去せりと思ひたる程なりき。ヤールセル、三一八丁

時に菩薩は尼連禪那河の岸なる林中に入て苦行を修せらる。初は日々に米一粒宛  
 を食し給ひしが、後には其れをも食せず、無食にして六年間、結跏趺坐して三昧に入  
 り給へり。此六年間苦行の力に依て、十二千萬億の天人に三乗の菩提縁を結び給へ  
 り。時に天人八部衆等は菩薩の苦行に感じて、日夜に早く菩薩の成道せられんこと  
 を念じて供養せり。又天人の中に於て廣大行を願ふ者等には、菩薩は性寶殿に住し  
 て安穩に過ごし給へり。又法を説くことを歡ぶ所の天人等には、菩薩は  
 説法し給へり。而して普通の人間には、菩薩は大苦行を爲し給へり。而して菩薩  
 又此修行に依て、四百二十萬の外道の仙人等に、菩提の縁を結び給へり。而して菩薩  
 は觀じ給はく、苦行の一道を以て成佛すること能はず。安逸行も又成佛の道に非ず。  
 此二の極端を棄て、中道の法に依り、以て成佛すべきなり。時に十方の諸佛も苦行  
 より起ちて菩提樹下に成佛の相を示さるべしと請はれたりき。されば菩薩は苦行  
 より起ちて、安穩に住して、少しの食物を味はれしかば、體力次第に増長せり。 ラムナ



時に菩薩はハリヌカ *Harinuka* の實を食せられしかば、其體力増長して、美相となりたれば、美相沙門と名けられたりき。ヤーセル、三一八丁

而して菩薩は孟夏の月即ち陰曆四月八日の晝、宿緣深き村女の一を善生女サウジヤウと云ひ、他を悦力女と云ふ者、一千疋の牛より乳を搾り、其乳を少數の牛に飲ましめ、其少數の牛より得たる乳を、更に少數の牛に飲ましめ、是の如く次第に減ずること十六回にして得たる所の乳を以て乳粥を作りて、黄金の器に入れて、是れを菩薩に上れり。菩薩は怪んで其大供養の所由を尋ねられしに、彼女等は云へり。妾等は美相沙門は轉輪聖王とならるべしとの讖言あれば、其時には妾等は妻妾たらんことを許されよと願ひしに、菩薩は家を棄て、眞實出家したる者にして、成佛せんことを願へる者なれば、汝等の願ひを棄つべしと云はれしかば、彼二女等は菩薩の願の如くなるべしと發願廻向して乳粥を供養せり。菩薩は是れを受けて先づ尼連禪那河に入て沐浴して、糞掃衣を着け、龍王の奉りし獅子坐に着いて、總ての乳粥を食せられしかば、三十二相、八十種好の妙相は威光赫耀として輝けり。菩薩は乳粥を盛りし金盤を尼連禪那河水に捨てられしが、海龍王は供養の目的となさん爲めに是れを持ち去

らんとせしに、因陀羅王は金翅鳥王に化して、其器を奪ひ、本身に歸り、三十三天に持ち歸りて供養の所依となせり。獅子座は龍女が塔中に收めたりき。其外天人八部衆等は各自の食物を菩薩に供養せしが、菩薩は平等に彼等に授福加持して、其供養を受けられたりき。各自が己れの供養を受けられしことを悦ぶ所に、總て菩提の縁を結び給へり。而して菩薩は何處に成佛せんかと其場處を擇ばれしが、一大巖窟ブス、ハリス華果有 *Fushpa-phala-man* と名づくる窟内に入り給へり。然れども諸天善神等は異口同音に此處は成佛の處に非ず。是れより尼連禪那河を渡つて、西岸に金剛寶座 *Vajrasana* と名づくる處ある。是れ三世諸佛の成道し給ふ處なれば、彼處に到られんことをと言へり。菩薩も亦然かく觀じて菩提樹下に向はれたりき。ヤーセル、三一八、三一九丁

(華果有、大巖窟は大唐西域記卷八には鉢羅笈菩提山 *Paṭṭa-Bodhi-Ciṃ* 前正覺山とある處にして、現今の土人は此名を知らず、此巖窟のある山を稱してヅンゲ、シリール *Dunge-Siri* 云ふ、今の佛陀伽耶即ち大覺精舍金剛寶座の在る處より東北に尼連禪那河と摩訶那提河を渡つて三哩を隔てたる小山の上部の處にあり、今猶ほ大唐西域記に誌せる記事と一致せる遺跡の存せる者あれば、古昔を忍ぶに足る者あり)

第四十三節 華果有巖窟フスバ、バハラケンより菩提樹下キトキ、ツレまで。斯くて菩薩は五十四の大人の威儀を具へ、一切如來の見處を觀じて、一步々々、深三昧に住し、徐々として進まれたりキ。ヤール、三一九丁

時に地賢等アミ、バハダラに住する所の諸神は、大千を掃除し、香水を行路に撒せり。又手に花盆を持ち、花蔓を捧げ、花の雨を散せり。四天王、帝釋天王等、六欲の諸天子は種々の寶花を以て莊嚴せり。尼連禪那河より菩提樹下に至るまでの行路は、清風の神是を掃除し、妙雲の神は香水を散せり。四邊大地の草木も皆其頭を菩提樹の方向に向けて禮拜せり。行路の邊りに散在する池畔には、孔雀等より鸞鶴等の水鳥に至るまで皆歡喜の歌を謠ひ、八萬四千の華の天女等は散華香風送の供養を行ひ、行路に並列せる多羅の木々は寶果を以て盛飾し、唱歌奏樂の萬の天女は妙音劉朗たる供養を爲し、色界の諸神等も亦種々無量の供養を行へり。又十方無量の諸菩薩等も各自國土の妙莊嚴を以て菩提樹邊の虚空を大に莊嚴せり。歩毎に三惡道の系統を斷ち、一切衆生の憂苦煩惱を除き、幸福安穩を増進する所の光明、諸佛に照見する所の光輝を發し

給ひて、十方佛土を震動して、至妙の奏樂と淨華の降雨との間に菩薩は菩提道場に着き給へり。ラムナム、ンガバ、三三、三四、三五丁

菩薩は菩提樹下に、着きて、過去の諸佛が成佛の時、草を敷かれし故事を思ひ出されしが、淨居の諸天子も亦菩薩に草を敷き給はんことを請へり。時に帝釋天王直ちに香山に生ずる所の草にして、柔軟なること綿の如きを取り來りて、自ら草賣吉祥の身に化して、其草を供せり。猶ほ又人間の草賣吉祥に菩提の善縁を結ばしめんが爲めに、菩薩は彼れが路の右傍に於て、草刈れるを見て彼に告げ給はく、

吉祥くさをすみやかに。 我に與へよ今日こそは。

この草われに大いなる。 用を爲すなれ五蘊等と。

共に住する大魔王を。 降伏なして上妙の。

寂滅菩提を成就せん。ラムナム、ンガバ、三五丁。アイトン、チョエチユン、七五丁

と云はれしかば、草賣吉祥は固より善縁ある者なれば、大に歡んで、孔雀の首の色の如く青くして、香氣芳ばしく、柔軟なる草を右脇に一抱して、菩薩に獻じて謂へらく、此草を敷かれて、成佛せられんには、是かる善縁に依りて、我も又佛道を成ずるに至

らんことを念願せり。時に菩提樹を七度圍繞して觀じ給はく、一切衆生の心情を歡喜せしめん爲めと、草座を以て満足することを示さん爲めと、過去の諸佛の行法に隨ふ爲めに、自ら草を樹下に敷き草の葉端を内にして、厚薄なく、能く調へて、圓形に爲し給へり。斯くして菩薩は其上に坐し給へり。

第四十四節 降魔。是の如く草座上に結跏趺坐して、東方に面し、明確なる觀念に住して謂へらく。

此座に我身は枯るゝとも。

骨肉皮膚の破壊るゝとも。

たとひ生命の終るゝとも。

無量劫にも遇ひ難き。

無上菩提を成せずば。

此座を起たじ動くまじ。ヤールセル、三一九丁

一切苦患の終末なる。

漏盡を全く得るまでは。

臨命終に至ることも。

此結跏趺坐を解かじとぞ。

誓はれたりき。時に十方の諸菩薩來集して、彼等は種々の神通力を以て花の殿堂を現じ、或は身體より千種の色光を放ち、或は日光の如く光を放ち、或は大地に四大海の香水を散じ、或は寶塔を空中に現じ、或は空中より散華して華鬘と變じて大千を

覆ひ一々の皮膚毛孔より千萬經典の音聲を發生し、或は一々の葉に菩薩の半身を現はしたる大樹を現はし、或は大身を現じて世界の最高山を手に持ち、或は足に大海を飾り、或は壯大なる大鼓を打ちたる聲よりして、菩薩は成佛せらるべしとの大音、十方世界に響けり。是の如き等の種々無量の事を示現せり。又十方世界の諸佛は右手を伸ばして、大導師は將に成佛せらるべしと命せられたりき。ラマナム、シガバ、三五三六丁

而して菩薩は觀じ給はく、四洲及欲界中の最權力者は、他化自在天の王、魔罪有、*Ma-ra-Raja* 惡魔王なれば、彼を征伏すれば總べての欲界を制御し得べし。又八部衆の總ても獅子勇猛の力を見て、發心して、道縁を結ぶに至るべし。大戰爭を好む者には、菩薩の大威力を示し、道德の根ある者には、菩提縁を熟すべし。又所化の修行者をして、道果を得んとする修法の途中に於て、中折する等の事を避けしめんが爲めに、惡魔を降伏する事必要なりと觀じ了て、眉間の白毫相より、征伏惡魔の大光明を放ちて三千大千世界の惡魔の國土を照破し給へり。是れに依て惡魔等は其光明を失ひ大に戰慄せしめられたりき。特に大光明の至る處に光音を發聲して、釋迦太子今に成

佛して、魔王の國土を征伏すべし。汝等魔王行いて戦ふべしと宣言せり。ヤールセル、三一  
九、三二〇丁

時に魔王は千萬億の魔軍を引率して、菩薩に刀劍等の雨を降らし、先づ菩薩を菩提道場より動かさしめんとして、戦争を開始せり。然れども菩薩の心地は不壞の寶鏡を着け金剛の如くに堅固なる上に、萬法は幻化の如くに見給ふが故に、是の如き魔軍を以て攻撃するも、菩薩は寸毫も動じ給はず。全く彼大軍なき時と同然なり。此惡魔等を戰慄せしめん爲めに、菩薩は魔軍の口中に火を燃やすの神力を示し給ひしに、魔軍は一時に敗走せり。彼等は敗走の後、何の苦痛も感ぜざりしかば、是れ唯だ一時の迷想なりとして、復び返つて菩薩に刀劍等を雨の如くに投撃ちたれども、皆中途にて花と化し、花殿と變せり。又彼等の火舌より、毒氣を發するも、皆白葉蓮華と變せり。時に菩薩は右手を頭上に置き給ひしに、魔王は菩薩が火の燃ゆる如き劍を持ち給へりと見て、南方に逃げしが、是れ又何事に非ずと思ひ軍を返して大に攻撃せり。然れども魔軍の發する投矢飛刀は皆花環となりて、菩提樹を莊嚴せり。ウムナム、ン  
ガバ、三六丁

魔王は是の如き菩薩の行徳の威神力を見て、嫉妬忿怒に勝へやらず。菩薩の前に來て曰く、汝何が故に菩提道場に坐するや。菩薩曰く、無上菩提を成せんが爲めなり。魔王曰く、嗟呼太子よ、能く我言を用ひて、王位に上られよ。汝が如き斯ばかりの福力を以て、云何でか解脱を得ん。菩薩曰く、魔王よ、汝は滅し易き供物を施したる一事に由りてすら、欲界の王となり得たり。されば我は三大阿僧祇劫に於て、幾千萬億無量の供養を爲し、一切衆生等の爲めに修せし諸の苦行を菩提に廻向せる故に、將に無上菩提を得べきなり。然るに其れを得ざるべしと云ふ理由は何處にかあると云はれしに、魔王は云へり、されば太子、余が一の供養を施して欲界の主となれりと云ふ證人は、汝なるが其の如くに汝が無上菩提を得る爲めに、三大阿僧祇劫に於て、無量の供養をなしたり云ふ證人は、何處にかあると、大音聲にて叫べり。時に菩薩は大悲心を生じて、少しも躊躇する所なく、卍字輪相の莊嚴ある右手を御身に觸れ、十方の諸佛を眼前に請じ、優に追らず、右手にて大地を指示して、我證人は大地是れなりとて、

此大地こそ一切の。

生ある者の住家にて。

動も不動も平等に。

乗せて親疎の別をせず。

是れぞ我身の證人なる。

我に詭言あらぬかし。

さて地の神こゝに來て。

我言証せよ地の神よ。

と言ひて、右手を大地に觸れ給ふや否や、大地は六種に震動して、十八瑞相顯現せり。時に大地の女神教妃と云ふ者、寶莊嚴身にて百千萬の眷屬と共に、大地の中より忽然現はれて、菩薩を禮拜合掌して曰く、菩薩よ、誠に菩薩の言はるゝ所の如し、此事たるや妾には誠に明確なり。唯だ是れのみならず、菩薩無邊の功德は天人及一切世界の共に證明する處なり。大地女神は魔王に向ひて曰く、魔王よ、世尊の言はれし所は皆事實なりと云ひて、其處に眷屬と共に消失せり。ラムナム、ンガバ、三七丁

斯くて魔王は顔色を失ひ、只黙して頭を垂れ、心に怒を含んで立てり。時に菩薩は再び右手を大地に觸れ給ひしに、其聲よりして魔王等は剋滅殺戮せよとの猛聲を聽けり。彼は千萬億の魔群と共に戰慄して、皆救を求めて、悲哀なる歎聲を發せり。魔王は大に喫驚して、叫んで曰く、大聖人、我を容せと請へり。魔王及其眷屬は恐怖失心して、逃げんとするも、逃ぐるること能はずして大に苦痛せり。時に菩薩は一道の光明を

放ち給ひて、彼等の恐怖を消滅せられたりき。ラムナム、ンガバ、三七、三八丁

後に魔王は麗美、愛欲無比の三女を菩薩の所に送れり。彼女等は三十二の誘惑法を以て、菩薩を墮落せしめんとして非常に勤めたれども、遂に動すこと能はざりき。而して彼三女は老婆の姿と變せしを以て大に驚懼して、他化自在天に逃げ歸りたりき。彼女等が菩薩の前にて歌ひし歌に以下のものあり。チヨエ、チニン、二七丁。ブートン、チヨエ、チニン、七四丁

優しうつくしいをしの。

妖姿や婀娜の女郎花。

香ばしき口に妙のうた。

いとも嬉しき愛のぬし。

住むふる里の極樂に。

一なる妾等のたのしみを。

受け給はねば世の中に。

これより上の愚はあらし。

ギヤーチエル、ロールバイ、ドー、二、三七丁

而して菩薩は總ての暗黒を照破し、總ての魔群を降伏して、後七日間全く安靜に三昧に入り給ひき。パクサム、ジョンサン、〇三頁

時に魔王の眷屬八十万千萬億の者等と九十九百千萬億の衆生は菩提心を起せり。而して宿昔修行せし所の八萬四千の神等は無生法忍を得たりき。ラムナム、ンガバ、三八丁

(ラムリム傳、バクサム傳、ヤールセル傳、及ブートン傳等皆降魔の後七日を過ぎて成佛すること説けり。然れどもチヨエ、コル史は七日の後と云ふことを誌さず。多くの漢譯經説にあるが如く、前半夜に魔群を下し、次で曉明に成道することを説けり。第四十五節 成道。然して菩薩の心内に四禪三智を生じ、吠舍法の満月即ち陰曆四月十五日の朝、明星の出でし時、十二因縁、四諦の法を完全に知り、其瞬間廓然大悟の智慧に依て、全く四魔を降伏し、新たに無上正等菩提を證して、成佛し給へり。バクサム、ジョンサン、三〇頁

一切の衆生は如來の性を有せり。故に一切衆生は兄弟なり、姉妹なりと釋迦牟尼佛は説き給へり。ソルモイ、テソツ三三二丁

時に大地は六種に震動し、光輝、世界に満ちて、一切衆生は少しも争鬭、打撃、忍怒等の害を受けざりき。斯くして、世尊が一切智を得らるゝや否や、金剛手は如來の心中に入られし事を百八名を以て讚歎し給ひしが、一切如來は善哉金剛手と讚じ給へり。時に諸天子等は互に告げて曰く、世尊は既に成道し給へり。吾人は將に花を散すべし。中に過去佛成道の例を知る者あり。曰く其徴を現はさるゝまで待つべし。其

時十方の諸佛は告げ給はく、善哉如來よ、正覺を圓成せられたりと云ひて、右手を伸ばして、告げ給はく、佛身安穩なりや、疲勞なく成道せられしか、自然に諸法を證せられしかと訪問せられたりき。又諸の菩薩を遣はして、此三千大千世界に満たしめ、寶蓋を以て光明莊嚴して光輝赫々たり。此等の諸菩薩は如來の足を禮して恭敬訪問せり。

時に世尊は結跏趺坐の儘、七多羅樹高の空上に上りて告げ給はく、道の絆緒を斷てり。憂苦は近く寂滅せり。諸漏は盡きたりと宣言せられしかば天人等は皆散華せり。而して淨居の諸神は白檀の粉を散じ、光明の諸天は線香と勝幢とを供し、梵種の諸神は寶幔を献じ、他化自在天の善際魔等は寶天蓋を供し、自在の諸天は蓮華を奉り、樂變化天の諸神は絹飾總を上り、觀史多天の諸神は天衣幔を掛け、夜摩天の諸神は香環を献じ、帝釋天は香油、四天王は種々の妙華、空間の諸神は寶鈴、地上の諸神は大地に諸花を莊嚴して、供養讚歎し以て菩提道場を好く莊嚴せり。是れと同じく十方の空間に満ちたる一切の菩薩も又供養讚歎せり。世尊は又宣言し給へり。

修福の結果福を得て。

もろくの苦患を除きけり。

修福の人は何時にても。

願望の總てを得らるなり。

惡魔の王を降伏し。

無上菩提を願に得て。

摩訶涅槃那の寂滅の。

不壞の樂をば成じけり。

是の如く成佛の相を示さるゝは、所化の衆生の爲めに、無上應身の行を示されしものにして、實際は無量塵點劫の古昔に成佛せられたることは、前に述べたる如くなるが大悲蓮華經にも、此如來は昔時不可能言無量の大劫を経たる古代に於て、成佛せられし方にして、今又五濁惡世の此土の衆生の爲めに、無上應身を現じて、其行を示し給へり。猶ほ一切衆生の盡くるまで、斷へず應身を現示せらるべしとあり以上誌したる所は佛教普通の説に隨つて成佛せられたる相を述べたるものなり。若し夫れ秘密乘より成佛せらるゝ相に至つては以下に説くべし。ラムナム、ンガバ、三九丁

第四十六節 秘密成道相及び成道時の迦毘羅城 吠舍佉月の八日の晝、菩薩は菩提成熟の身體を尼連禪那河の岸に置いて、意體は阿迦尼瑟吒淨土に到り、眞性金剛の大曼荼羅會中に住し、五現正覺 Pancha-Abhisam-Bodhi の門よりして成佛の門を示し、瑜伽秘密經を説法し、次で秘密會 Guhya-Samāja の大曼荼羅會中に入りて、金剛菩

提頓生智相の灌頂をなし、假空二相の細惑、究竟に滅盡して、中道實相の體相現成し、無上の秘密乘を宣説せられたりき。又降伏魔王の事に至ては、黑夜摩訶怒明王、赤夜摩訶怒明王の二王を化現して、完全に魔王を降伏して、後に、此二王に關する秘密經を説かれたりき。是の如き事等無量不可思議の事は無邊に示され給ひき。ラムナム、ンガバ、三九丁

其後此成道の地に於て、頻毘婆羅王は成正覺の宰堵婆を建立せられたりき。ナール  
三三三丁

(佛成道地、苦行林等の現在處。カルカッタより西北二百九十二哩東印度鐵道にて行けば伽耶(Gaya)を誌しあれども、實はGayaを誌さざるべからず、ギヤにては全く通せず)停車場に就く、此處より南方七哩の地に佛成道地あり。今は佛陀伽耶と云ふ。昔は摩訶菩提寺 Maha-Bodhi-Vihāra 大覺寺と云へり。西藏人は金剛座梵語 Vajra Asana と云ふ。此座は今猶ほ菩提樹下に存せり。此座の東に大塔あり、尼連禪那河の岸までは東に約一丁餘りあり、伽耶町の西南數丁の處に伽耶山あり。佛在世の當時此山にて伽耶山頂經等を説かれし處なり。伽耶町を離れて南方佛陀伽耶に

向ふに當て左側に廣き河の流れを見るべし。是れ尼連禪那河の下流なり。此流を隔て、南北に奔れる山脈を見るべし。是れ當今のヅング、シユリー山窟のある所にして西域記の所謂前正覺山是れなり。西藏傳の華果有窟は山脈の北端にある小山と其南の山脈間を數丁上りたる右側にあり。苦行林は菩提樹下金剛座より南方約一哩にしてムチャリン村の傍に目眞隣陀池あり。是れ目眞隣陀龍王の住せし池なりと云ふ。此池と尼連禪那河との間に一小林あり。是れ佛世尊の六年苦行せられし林なりと知るべし。

菩薩は二十九歳出家せらるゝ以前に於て、耶輸陀羅女の胎内に子を宿されし事は既記の如くなるが、妃か前生因縁の然らしむる所と、胎内の子が前世王たりし時、清淨行者を六日間、飢餓せしめし因縁の然らしむる所に依りて、胎内に宿れる事六ヶ年、世尊成道の時と同時に誕生せられたりき。其時月蝕ありしかば、其名を羅睺羅即ち覆障と名づけらる。然るにターム、ローツアアの譯せし秘密史傳第四章には、世尊出家の時、羅睺羅は誕生せられたりとの記事あれども、是れは宿胎せられたりと云ふことの誤字なるべし。ヤーセル、三二二丁

第四十七節 成道後の七週間。是の如く世尊は三十五歳の時、成道せられたり。即ち甲午の吠舍佉月十五日の明星出現の時、究竟圓滿成佛の行相を示されたりき。初めの七日間は菩提樹下に觀坐し、第二の七日間は三千大千世界に於て遠く遊行せられ、第三の七日間に菩提樹を觀じて安坐し、第四の七日間は四洲の東西の大海に至るまで遊行せられ、第五の七日間は目眞隣陀龍王「Muchinda-Naga-Kija」ムチリンダ池を云ふの住處に留り、第六の七日間は尼拘盧陀樹下に禪坐して阿伽摩等を化度し、第七の七日間は龍行樹の林に入られしに、商主黃瓜「Trapusa」及賢者「Bhadra」の二人より供養を上れり。時に四天王の各自は一個宛石の鉢を供したるが、世尊は此等を受けて一となし、其れにて供養を受けられたりき。時に世尊は二商主の爲めに、祝福の言を宣し、彼等二人の未來の成菩提の事を授記せられたりき。ラムナム、ンガバ、

三九丁

通途の説に依れば、初の七日間は火界定に入て、結跏趺坐の儘菩提樹を觀じ給へり。此佛行に歡喜を生じたる三萬二千の天人等は菩提心を起したりき。是の如く法味歡喜と安樂の甘露味とを以て、身を養ひ給ひて、徐ろに禪坐より起ち給ひしに大地



震動せり。欲界の二萬の神等は如來と菩提樹とに沐浴を奉りて、其用水を彼等の身に塗りて、菩提心を起したりき。華神は世尊に問ふて此七日間入り給ひし三昧の名を何と云ふやと云ひしに、滿歡喜食三昧と答へ給へり。ヤール、三二丁

又迦毘羅城に於ては、釋迦牟尼は金剛坐に於て、死滅せりとの風説起りて、大王始め伯母及妃等は、大に憂慮せられしが、後其然らざりし事明かになりて、大に安心したりき。然るに淨飯大王は耶輸陀羅女が太子と別れてより六年の後に赤子を分娩したるを見て、太子の子に非すと云へり。是れを聞きたる妃は大に世を厭ひて、池の側に立ちて、悉達太子の膝程の大きさの石塊に赤子を乗せて、水に浮べて曰く、汝は釋迦牟尼の實子なれば、此處より彼岸に達すべし。然らざれば沈むべし。斯く信言を發して、其れを放てり。然して赤子は安穩に彼岸に到着せしかば、父王も其疑を晴らされたりき。ヤール、三二丁

世尊は第二の七日間に於て、他化自在天の自在變天王の宮殿に在て、他方國土より來集せし金剛心菩薩等、諸の佛子集りて、解脫月は金剛心に問ひしに、金剛心は如來の許可を受けて十地の法を説明せり。時に如來は身口意平等性の法を示して、光明

を放たれしに、寶智菩薩等、十方世界の十佛子が、十佛の眞言を持ちて、此處に來集して、世尊を敬禮して、一面に立ちたりき。世尊は金剛曼荼羅を畫きて、金剛手菩薩に灌頂して、其法を授け給へり。次で大毘盧沙那成佛神變加持大方廣經の灌頂を説き給ひ、次に金剛手菩薩は其經の後篇を説きたりき。而して初めに佛者宮殿に入り給ひて、普眼菩薩の法の次第を尋ねしに對して、普賢菩薩をして尋ねしめよと命せられし如くに問ひ上りしに、十三昧と十明慧とを示されたりき。心王菩薩も又數と大住處とを説きたりき。又如來の加持力に依て、青蓮華心菩薩は不思議法を説き、普賢菩薩は佛名海を示せり。又世尊は掌寶菩薩に三十二相、光輝現示の法門を説き給へり。又普賢菩薩は普賢行を示せり。次に世尊は白毫相より光明を放ち給ひて、族生德菩薩を招き給へり。彼菩薩をして普賢菩薩に法を問はしめられしに對して、普賢菩薩は生如來品の法門を示せり。又普賢は佛大方廣の三昧より起ちたれば、普眼菩薩は尋ねしに對して、出世間品を廣く説きたりき。然れども普通人の眼には、此第二の七日間は、只三千世界を逍遙せらるゝと見たりき。

第三の七日間は、既に生老病死の苦患を終はりたれば、菩提樹に對して、眼瞬きもせ

すして見給へり。第四の七日間は南瞻部洲の東西の海邊にまで逍遙し給へり。第五の七日間は目真隣陀池側に禪坐せられしに、龍王は身を以て如來の身を覆へり。蛇身の後光ある佛像は此傳説より起れり。又池中の火舌の燃ゆる蓮華中に如來は安坐して、金剛手に大勢至菩薩の眞言を説き給へり。第六の七日間に尼拘盧陀樹の下に安坐し給ひしに、普走と赤裸體子の二人が斯の如く國の現狀惡しきに、御身は安樂なりやと尋ねしに世尊は答へ給はく、

妙のみ法を見聞して、

靜地を好めば安樂なり。

生とし生けるものごもを。

憐み害を爲さざれば。

世界は誠に安樂なり。

壓迫の苦も更になし。

貪欲離れて世は安し。

我てふ我慢を伏すれば、

最勝樂を得らるゝなり。

と説かれたりき。第七の七日間は娑羅樹と竹の生ずる林中に安坐し給へり。時に北方の二商主ツラプスとバハドラは南方より歸路、此處を過ぎて、千牛の乳を煮つめたるものを寶器に入れ、猶ほ蜂蜜、砂糖、果實等を多く持ち來て世尊に供じて曰

く、我等を憐んで此小供養を受け給へと請へり。然れども寶器を以て食ふは、外教徒の爲す所なり。過去諸佛の食器たりし鉢を用ひんと觀せられし時、四天王は出現して始めに瑠璃等の寶鉢を上りしも、比丘の法に非すと受けられず。遂に石鉢を受け給へり。「以下は略ば前記ラムリム史に同じければ略す」ヤール三三三丁、三三五丁

第四十八節 勸請説法。而して世尊は觀じ給はく、我法甚深微妙にして幽光照徹、知り難く、解し難し。普通論理を解する者等の了會する能はざる所なり。故に何をも説かずして、安處三昧に入るべしと、斯く念じ給ひて。

甚深寂靜離塵光照。

漏なく集なき甘露の法。

微妙の一乘我得たり。

我身が是れを説くことも。

他の一切衆生は悟り得じ。

されば何をも云はずして。

林中深くか奥山に。

過さんところ思ふなれ。

と宣言して寂然として坐せられしが、十方世界の無數の諸菩薩、無數の諸天善神等は世尊に法を説かれんことを懇請し、特に三千大千娑婆世界の主たる大梵天王は世尊に説法せられんことを勸請せられしかば世尊は默然として其請を容し給へ

り。此事を知りて大梵天王は自己の國に歸去せり。而して世尊は他の衆生をして、歡喜せしめ且つ法を悦ぶの心を生せしめん爲めに、又梵天王にして再三説法を勸請せんには、其徳本を増殖することなるが故に、斯くならしめんと願ひ給へる。且又微妙の法を云何にして衆生に示さんかと觀じ給へり。然して大梵天王は猶ほ世尊の説法せずして觀坐し給へるを見て、彼は帝釋天、大自在天等、欲界色界の諸神等と共に、世尊の前に至りて、説法せられんことを懇願せり。然れども世尊は説法の甚だ爲し難きが如くに見へ給へり。尸葉大梵天王之れを知りて、未明に六萬の梵天子に圍繞せられて、世尊の前に至て合掌して曰く。

古來摩揭陀に教はあれど。正しくもなく知も又汚かれたり。

されば甘露の法の門。開きたまへよ汚れなき。

覺了の教を説き給へ。牟尼世尊よ法燈を。

かゝげて暗黒を照されよ。如來の旗を押したてよ。

妙音説法の時いたる。法鼓打てよ獅子王の。

一吼奮迅する如く。法説き給へと請ひ奉る。

佛世尊は命せ給はく。

梵天王よ今われは。

總べての過惡を滅したる。

執着なせる衆生に。

萬行苦行の功を経て。

微妙の法を世の欲に。

説くとも善くは悟り得じ。

梵天王曰く世には機根の鋭鈍種々あれば、中に化し易き衆生も多くあるべし。若し彼等にして法を聽かざる時は却て墮落する事とならんか故に、説法せられんことを庶幾ふと言へり、且つ世尊を讚じて如來の本生中には法を求むる爲めに、幾千度か生命を捨て給へり。特に本生中にも妙色王及蘊多羅仙人と生れ給ひし時は、妙法の爲めに、彼が如き苦行を爲し給ひて、今日既に法の大海を度し給ひて、法燈の眞光を明瞭になし給へり。されば何故に説法せられずして般涅槃し給ふべきやとて、大に懇請せり。

甘露の門戸を開くべし。

梵天王よひとゝに。

誰が聽かんと懸念なし。

廣大無邊の法門を。

宣説するも受けざれば。

その一端を先づ説かん。

と告げられて説法の事を許容せられたりき。ラムナム、ンガバ三九、四〇丁

第四十九節 世尊説法觀機及び伽耶山にて普走の徒に遇ふ。世尊は初めに法を誰人に説法せんかと觀じ給へり。嘗て成道の後は説法せんことを依頼せし所の阿羅々、迦羅々の二仙人に説かんと念じ給ひて、何處に彼等の居るかを觀見せられしに、最早彼等は死去せしことを知られしを以て、此に婆羅那斯に住する阿若憍陳如等の五人の爲めに説法せんと決せられたりき。ヤーセル、三二五丁時に菩提樹の法愛等の四神は世尊に對して、何處に初て法を説き給ふやと尋ねしに、世尊は婆羅痾斯なりと答へ給へり。四神等は彼處は人衆多からざれば他を撰ばれたしと請へり。世尊は婆羅痾斯は古來仙人等の住する處にして、多くの供施を行ふ處なれば、彼處こそ初て法を説くに適當の地なりと云ひて、婆羅痾斯に向ふて出立せられたりき。ヤーセル、三二五丁途中伽耶山に着かれし時、普走の徒、近行と云ふ者に遇へり。彼は世尊に問へり。汝の身支顔色、眞に清淨微妙なり。何れの師に就いて斯の如くなられしやと云へり。

世尊答へ給はく。

教師は我に誰もなし。

我に齊しき者もなし。

我こそ獨り成佛して。

煩惱の火は消滅し。

もろくの漏を盡したれ。

彼は云へり。憍多摩佛陀となり給ひしか、是れより何處に行き給ふやと世尊は答へ給はく。

婆羅痾斯にぞ我は行く。

光有城にわれ着きて。

盲目の如き世の人に。

無比の光を與ふべし。

(光有カウシは婆羅痾斯城の異名にして現今のベナレス市なり。カルカッタ市より西北方四百二十九哩の地にして、恒河の西岸にあり。伽耶より西北に百三十七哩あり。東印度鐵道孟買行に乗り、モゴルサイにて乗換へ、十哩にしてベナレスのカン  
トメント停車場に着く。是れより東北約五哩にして鹿野苑ムリガタイ仙人墮處シバスタ即ち佛世尊初めて法輪を轉せられし舊跡に着く。現今は此地を呼んでサラナートと云ふ。現今の印度人は鹿野苑ムリガタイ仙人墮處シバスタの舊名を忘却して、此舊跡の東數丁にある印度

教の神サラナート(濕婆神の異名)を祭れる神名に因んで此地方を呼ぶに至りしものなり)

と言はれしに、彼は善哉佛陀と讚歎せり。時に見美龍種と或家主とが世尊を詣じて午飯を供艱せり。而して世尊は恒河を渡らんとして、渡場に行かれしが、船頭は先づ船賃を得んと迫りしかば、世尊は空を踏んで彼岸に渡られしが故に、船頭は是れを見て慚愧せり。其後此事が頻毘婆羅王の知る所となるや、王は法令を發して比丘衆には渡船賃を取ることを禁せられたりき。ヤール、三二五丁

### 第五章 初轉法輪より靈鷲山說法に至る

第五十節 鹿野苑初轉法輪 世尊は光有國 *Kāśhī* 國に行き婆羅痾斯城市に着いて、食を乞ひ食し終て、仙人墮處、鹿野苑 *Rishi-Patna, Mriga-Dava* に行かれしが、阿若憍陳如等の五人は、遙かに世尊の來たれるを見て曰く、沙門憍多摩大食して苦行の制禁を破りたる者、今將に此處に來たらんとす。若し來らば吾人は彼に談話すべからず。起立すべからず。禮拜すべからず。又敷物を與ふべからずと互に制禁せり。然れども

阿若憍陳如のみは心中に此事を承はざりき。世尊は阿尸婆河の岸なる彼等五人の住せる處に着き給ひしに、彼等五人は世尊の徳相と威嚴の大るに打たれて、前約の制禁を打忘れて、皆我知らず起ち上つて、敬立し。阿若憍陳如は敬んで侍立し、馬勝は迎へて上法衣と鉢とを受け、婆温波は敷物を布き、大名は踏臺を置き、大賢は御足を洗へり。而して彼等は云へり。長老憍多摩、善くこそ來着せられたれ、先づ此座に坐し給へと云へり。時に世尊は座に着き給ふや、彼等は從來の如く、長老憍多摩と呼びつつ談話せり。時に世尊は彼等と呼んで、汝等如來に對して、是の如き名に依て呼稱することを得ざれ。若し然かなさんに汝等長く苦患を受くるに至るべしと告げ給へり。彼等は問ふて曰く、憍多摩、汝は從來修せし所の苦行に依て、人法の師範たる最勝の法を得ざりき、されば今云何にして、彼が如き修法に依て、人法の師範たる最勝の法を得たるやとて、不満足を以て説きたりき。世尊は命せ給はく、出家の法は二の邊見を修すべからず。其一は欲心等に住して、乞食行を勵んで下卑賤惡に住すべからず。他の一は自己を疲勞せしむることに勵むが故に、聖道の修行に害を爲す所の總べての行爲を云ふなり。汝等此二の邊見を離れて、中道の智眼を以て、靜寂にして明

かに知り、以て菩提道を圓成して、涅槃を得るに至るなり。中道とは八正道を云ふなりと示し給へり。ラマナム、シガバ、四一、四二丁

(五人迎佛處の遺跡、婆羅那河を渡つて東北に向つて、ガジ、ブール道を行くこと約三哩半にして左に曲て北少しく東を望めば、小き岡の如き者あり、高さ凡そ七十尺、其上に高さ二十五尺の煉化にて造れる八角形の塔あり。現今は是れを稱してフマユンの塔と云ふ。フマユンはマホメット教徒の大王アクバルの父にして、彼は嘗て此地に來住せしことありしを記念して其子アクバル大王が西曆一千五百八十八年に建てたるものなる事を、此塔内に存する阿剌比亞文字の碑文に記せり。然れども玄奘の大唐西域記に依れば、此地は正しく阿若憍陳如等か佛を迎へし舊跡に相當せり。而して頂上の八角形の塔のみは其材料の新しきより見るも西曆一千五百年代にアクバル王の建てしものなる事は疑を容れず。雖ども其岡を形成せる煉化は、非常に古代の物にして佛教隆盛時代の作品たること明かなれば、マホメット教徒が例の手段に依て、佛塔を破壊して其上に同教徒の八角塔を建てしものなるべし。西域記には、鹿野の號此處よりして興れり。伽藍の西

南二三里、七八町にして窰塔波あり。高さ三百餘尺、基趾廣く峙て瑩飾奇珍なり、既に層龕なくして便ち覆鉢を置く。表柱を建てたりと雖も輪鐸なし。其側に小窰塔波あり。是れ阿若憍陳如等の五人人制を棄て、佛を迎へし處なり。大唐西域記七、五丁現今此フマユン塔より東北七八丁にして鹿野苑精舎の遺跡あり。此塔跡を以て五比丘が佛を迎へし處とすれば全く玄奘の誌せる所と一致せるを見るべし。然るに西藏傳に依れば五人の住せし處は阿尸婆河の岸とあり。而して現今は此塔の附近及鹿野苑の附近には阿尸婆河と云ふ河なく又他の名の河もなし。假りにアシ河を以て阿尸婆の省略せられたる者なりとするも、現今のアシ河はベナレス市の南にありて、鹿野苑とは約七哩を隔てたれば、現今のアシ河に非ること明かなり。且つ現今のアシ河は河と云へる程の者にあらず。只一の大なる溝なれば、彼河は古代のアシ河に非ざりし者ならんか。而して現今の鹿野苑附近にはサラナート岡より鹿野苑附近まで八町余りの間に河形の池あり。其下にフマユン塔の方向に稍や底き地勢の續きて、古代の河床ならんかと思はるゝ所あり。是れ西藏傳の阿尸婆河の遺跡ならんか。因みに誌さん。印度の諺に河か旅行すと云ふこ

とあり。是れ印度の河には強固なる堤防なければ、洪水毎に大抵其位置を變ずるか故に此諺の起れるなり。鹿野苑の南約一哩の地に小河あり是れ阿尸婆河の旅行せしものに非ざるか。

第五十一節 初轉法輪の二。其後世尊は此鹿野苑の何れの地に於て、最初の法輪を轉せんかと念せられしが、過去の諸佛の轉法輪處に一千の七寶座現はれたりき。時に梵天は高さ四萬二千の由旬の獅子座を建立し、因陀羅及び十千萬の菩薩等は前同様の獅子座を建てたりき。地上の神等は法輪を轉する爲めの大樓閣、輪奐壯麗、周圍八百由旬のものを出現せり。上空には天蓋寶幔等にて莊嚴し、欲界の天人等は八萬八千の座を献じ、是れに坐して法輪を轉じ給へと請へり。

時に世尊は過去の如來を歡喜せしめん爲めに、三座を圍繞して獅子王の如くに、猶豫する所なく第四の座に結跏趺坐して坐し給へり。梵天帝釋及諸菩薩の献せし座にも佛陀は一々坐し給へることを示されたり。五比丘は如來に禮拜し終つて一面に敬立せり。其時世尊は御身より光明を放ちて六道の苦患の相續を斷ち、十八の瑞相を現じ、娑婆世界の國土は平坦にして、一切衆生は互に相慈愛せり。其光明より光

音を發して曰く。

千萬大劫の修行經て。

其法聽かんと願ふ者。

法聽かん爲にいざ來よと。

佛陀を成じ給ひたる。

今こそ時なれ速かに。

是く宣說せしかば天龍夜叉乾達婆等の八部衆も亦知りて佛前に集れり。十萬無數の菩薩等も亦集れり。要を取て云へば、三千大千世界は秋毫の末程も滿さざる處なきまでに集れるなり。而して此等十方集來の菩薩と娑婆世界の梵天帝釋の大有力者等は世尊の足を禮して、一切衆生利益の爲めに法輪を轉じ給へと奏せり。又梵天王は特に奏して曰く、法の醫王よ、煩惱の心病に苦しめらるゝ所の此等一切衆生の爲めに、妙法輪を轉じて、其苦患の根本を斷ち給へと願ひて、天の瞻部檀金にて造れる千輻輪の千光明あるものにして、過去の諸佛の受け給ひし例ある者を奉りて、重ねて法輪を轉じ給へと願へり。時に天空に充滿せる所の諸菩薩等及八萬の天人を主として、天龍等の八部衆並に阿若憍陳如等の五人を始めとして世尊の光顔を凝視せり。

時に世尊は夜の將に明けんとする前に、五比丘を呼んで、苦集滅道の四諦の法を説き給へり。而して其四諦の取捨の法及其四諦を完全に知て、明かに禪觀するに要する所の八支法、即ち二の邊見を離れたる中道を三轉して、十二行法輪を轉じ給へり。其法音の至る所、聽者の人格に隨つて、各自解する所を異にしたれば、此時既に三乘に相應したる所の法を聽きたりき。元來此三千大千世界には、四諦に九十四百千萬億の名ありて、皆各身の言語の如くに、諦を悟らしむる所の御心を以て法を示し給へり。時に憍陳如及八萬の燃威殿の神等は法眼淨を得たりき。世尊は憍陳如に對して、汝は法の總べてを知れりやと問はれしに、彼は總て知れりと答へたりき。其れより憍陳如を總知憍陳如と稱せらる。是れより以來世界に佛、法、僧の三寶存在するに至れり。天人等は互に歡んで曰く世尊は婆羅痾斯に於て三度、四諦の法輪を轉じて、十二行輪を示し給へり。是れ世に誰も轉する能はざる所の妙法にして、是の如き無比法の世に出でしが故に、天人の族繁殖して、非天人の種は衰頽するに至らんと云へり。ラムナム、ンガバ、四一、四三丁

(西藏傳は阿若多を總知と譯せり。然れども漢譯の多くは無知と譯せり。法華疏光

宅第一には此人無生の空理に從て智を生ずる故に無智憍陳如と云ふとあり。法花文句飾宗記は前記と同説なり。阿若多の阿字か短音なれば、無と譯するも正しけれども、此阿の字は長音なるが故に西藏譯の如く總てと譯するを正しとす。彌勒上生經疏の上には阿若多是解なりとあり。西藏譯に近き者と云ふべし)

其後二度世尊は此法輪を轉じ給ひし時、阿若憍陳如は諸漏を盡して阿羅漢(Arahant)敵を降伏したる者(果を得たりき。其時は此世界に於て、一人の阿羅漢あり。他は世尊自身なりき。他の四人は諦を見たりき。是の如く五人が正智を得たるや否や、外道の表象、勝旗等、瞬時に廢滅せり。即ち剃髮して三法衣を着し、鉢を持し、全く出家して比丘(乞士、即ち善知識に乞ふて道德を上進する者)となれり。而して世尊は解脫法幢の衣を持つ者の最勝者は阿若憍陳如なりと讚歎し給へり。而して世尊は他の四人の比丘の爲めに、身は我に非ず、苦惱の集なり。無常なり等と廣く説かれしかば、彼等四比丘も亦阿羅漢果を得たりき。されば世界には五人の阿羅漢ありて、第六は世尊自らなりき。而して一億四千萬の天人と八萬四千の人々は諦を見たりき。是の如く世尊の妙梵音は十方の佛國土に響きしかば、十方の諸佛は各々何をも云はずして



住し給へり。時に各自の侍者は其所由を問ひ奉りしに、諸佛は其各自の侍者に對して、世尊釋迦牟尼佛成道して、法輪を轉じ給ふが故に默然たるなりと答へられしかば、百千萬億無量の衆生は菩提心を起したりき。

世尊成道の後、說法せらるゝ事甚だ困難の如くに見へたる。幾度か說法を勸請することゝを要したると。又法を示さるゝに當ても、初めより深遠なる空性等の法を説き給はず。法衣を圓滿に着すること、正午を過ぎて食せざる事、衣食に就ても二の邊見たる一は裸體にして殆んど絶食する者、他は衣食を豊かにして放逸に流れ易き者との二を離れたる等の行道を示されたり。此行事を賢者が能く觀察する時は菩提道順の修行法の云何なる者なるかを明確に了知することを得るなり。最初に聚善行道の根本は善知識なるが故に、先づ是れを十分に擇ばざるべからず。何人にても可なりと云ふこと能はざればなり。弟子たる者は先づ師徳の有無を能く觀察して、教師たるの資格ある者を擇んで、隨習することゝを要すると同時に、又教師たる者も誰人にて法を示せば可なりと云ふに非らず。先づ其弟子たらんとする者の器を能く觀察して、法を授くべし。又弟子に法を示すに當ても、慈母の小兒を育つる如

く、醫師の患者に藥を與ふる如く、弟子の人格性癖等に從つて善く導き、次第に深法に入らしむるなり。特に總べての妙法の根源は、戒律を清淨に行ふことにあれば、是れを堅固に行ふことを要するなり。而して此世を厭ひ、輪廻世界の諸の苦患を脱れん爲めに、先づ行集は皆無常なることを觀じ、特に有漏の此身は無常なれば、此身此世に執着なく、後生菩提の大事を觀じ、一心に此生に輪廻を解脱せんと願ふべし。是の如き心の生ずる時は、輪廻の根本即ち一切苦の基を知ることを得て、次第に菩提行を上進する方法等を學んで、本師世尊の行法を吾人の修法に資することを得べきなり。世尊最初の轉法輪處、婆羅痾斯國、仙人隨處、鹿野苑に於て、其後天人及び五比丘並に信仰者等は轉法輪塔を作れり。其形は四邊相にして四段あり、一段毎に四方に隆起したる所に八門戸あり。是れを稱して、カーシー國、轉法輪塔とて古來有名なものなり。ラムナム、ンガバ、四三、四五丁

(轉法輪塔はフマユン塔の東北八丁を隔てし處に現存せり。現今のベナレス人は此塔を呼んでダンメクと云ふ。此ダンメク塔より西に數十間隔てたる處に鹿苑精舍本堂の跡あり。其後部に阿輪迦王の建てし石柱あり。西域記に誌せる如く、石

玉潤を含んで鑒照映徹なり。此石柱の上にありし四頭の獅子の彫刻は阿輸迦王時代の美術の精粹を表せるものにして、現今は鹿野苑内にある英領印度政府設立のサラナート博物館内にあり。其外多くの佛像等其館内に保管せり。

第五十二節 優婆塞、優婆私迦の起原、及び布教師派遣。世尊は五比丘と共に野獸劫盜の徘徊する林中に住せらるゝを以て、婆羅痾斯市の長者、德賢 Kaeyinn-Bhadra が、鹿野苑に最初の精舎を建立して、献せしかば、世尊及五比丘は此處に住し給へり。時に阿尸婆河の岸に住める在家の子息にして、譽持 Kitti 無垢 Vimala 成就 Purjā 牛主 Gōpati 及賢手 Bhadra-Pāni の五人は多くの藝妓と戯れ居りしが、藝妓等皆醉狂の餘りに裸體となりて、女根顯露し、醜狀見るべからず、狂態亂狀、墓處にあるの感に打たれて、五人の中、譽持は甚だ是れを厭ひて、世尊の前に行き、禮拜して四諦の法を聽けり。是れ優婆塞「Uṣāsaka 徳に近く者」の始めなり。而して藝妓等は譽持の他に去りしを見て、其跡を追尋せしが、世尊の保護にて彼等は譽持を見出すこと能はざりき。譽持は再び世尊の説法し給ふを聽いて、法眼淨を得たりき。後に譽持は在俗の儘にて阿羅漢果を得たりき。次で彼の母及び妻は優婆私迦「Uṣāsika 近徳女」なりたりき。其

後他の四人も亦譽持の名譽を知りて、世尊の前に行き、法を聽いて阿羅漢果を得たりき。是れを世に五近徳部と云ふ。次で可畏 Rūdra 等の五十人及び曲女國 Kanya-kubja の迦稱廷子 Katyāyana-Putra 等の五百人、及優陀夷等が佛の説法を聽いて、阿羅漢果を得たれば、世尊は彼等を説法の爲めに諸國に派遣し給へり。ヤーセル、三二七丁

第五十三節 三葉迦波の化度。復び世尊は摩揭陀國に行かんとする途に於て、王は婆羅門の身に變じ來りしも、障得を爲すこと能はざりき。迦毘羅城より來たる婆羅門及其妻並に嘗て乳粥を供養せし所のスジャター等の二女等は、世尊の説法を聽いて眞諦を見たりき。此に優樓頻螺迦葉波 Uruvicva-kāshyapa 木瓜林護光とて其壽百二十歳に達し、有頂の禪定を修得せり。彼は時人等より阿羅漢と尊崇せらるゝ者にして、五百人の弟子を有せり。其弟に那提迦葉波 Nadi-kāshyapa 河護光、伽耶迦葉波 Gaya-kāshyapa 伽耶護光との二人ありて、彼等は各々二百五十人宛の總卷髮行者 Jainika の弟子を有せり。世尊は尼連禪那河の岸邊に苦行する優樓頻螺迦葉波の許に行き彼の求めに應じて、毒龍の火室に宿り給へり。夜中迦葉波は天象星行を見つ

ありしに、世尊の宿れる毒龍室に、火焰の炎々たるを見て、毒龍か世尊を焼殺せりと思へり。然れども世尊は吐火の毒龍を化して、鉢中に入れて安坐し給へり。翌朝世尊は其鉢を持ちて、迦葉波の許に至り、鉢中の龍を彼に示して、我、汝の毒龍を化したりと云ひ給へり。迦葉波及其弟子等は、大に驚歎せしが、世尊の威神力を見て、大に世尊を信せしを以て、世尊は彼等に告げ給はく、我に從て解脱の道に入れよと命じ給へり。他の二弟の迦葉波等は云何なる事の起りしかを見に來たりしが、兄の迦葉波始め其弟子等も世尊の前に在て、法を聽けるを見て、何の事ぞと尋ねしに、兄は云へり、是れ實に世の最勝尊なりと此に於て二弟も亦世尊に就いて得度せんと願へり。世尊は汝等の弟子等を見よと命じ給へり。彼等は其の如く彼等の弟子等を見てありしが、世尊は此に來れ、解脱の道に入れよと命じ給へり。次で世尊は伽耶山に住せられたるが、千人の大總結髮行者は法を聽いて阿羅漢果を得たりき。彼等は世尊に一切智明燈仙人と云ふ尊稱を上れり。ヤール、三二七、三二八丁

第五十四節 頻毘娑羅王の奉迎、帝釋天の問訊。五明學を非常に歡ぶ所の頻毘娑羅王は、或者より太子悉達多是成佛して、法を説き給へりと聽き、使を特派して、世尊

に王舍城に光來あらんことを請へり。而して世等は千人の阿羅漢と共に、最善塔の前の林中に住し給へる時、頻毘娑羅王は多くの從者を卒いて、此林中に入り、世尊の前に至りて、禮拜し歡喜して奉迎せり。時に王に從へる多くの婆羅門及び家主等は、優樓頻螺迦葉波の大衆中に居るを見て、此大沙門と迦葉波とは何れか何れに就て習學したる者なるかとの疑念を起せり。世尊は彼等の疑念を知りて、迦葉波に命じ給はく、大衆懺悔心を生ずべしと。時に迦葉波は其座に消失して、種々の神通化現を示し、如來の前に禮拜して、世尊は我の導師なり。我は世尊の聲聞なりと云ひしかば、總ての人は其疑念を晴らせり。而して頻毘娑羅王を始め八萬の天人、七十萬の人々は、諦を見たりき。王は法令を發して盜賊の輩に盜を爲す勿れと命せり。

其後世尊は時來れりと知らるゝや、大衆と共に國土を歩行して、王舍城の近郊なる大樹の下に着かれし時、頻毘娑羅王自ら奉迎して、其翌日王自らの手を以て食を如來に上り、黄金の壺を以て淨水を供せり。而してカラシカ鳥の棲みたる花苑に世尊の住せらるゝ精舎を建て、佛に上れり。ヤール、三二八丁

(此カラシカ精舎は西域記九には山城の北門、一里餘を行いて、迦蘭陀竹園に至

るごある處に相當せるものなるが、玄奘の傳ふる所は此王舍城中に大長者あり迦蘭陀と云ふ。如來の法を信じて竹苑に精舎を建立して如來に上れり。是れを世に迦蘭陀竹園と云ふありて、西藏所傳と相違せり。然れども西藏傳のカランタ精舎も王舍城附近あれば西域記の迦蘭陀竹園と同一なるべし。其遺跡は現今のラージャ、ギリ停車場の南方約六七町にして、バイバル山下温泉の北三町余の處に其舊跡存す。

其後世尊は摩揭陀國、因陀羅勢羅窠詞山の沙羅樹窟に於て火界定に入り給へり。時に帝釋天王に死徵現はれしかば、彼は恐怖の余りに、瞻部洲の行者婆羅門等に尋ねしも、却て彼等は皆帝釋天に歸敬せしかば、帝釋天は已むことを得ず決心して、世尊の定に入り給へる處に、彼の妻及び五結髮乾達婆王並に八萬の天女を引來て、五結髮乾達婆王及五百の樂手をして、立琴を彈せしめしかば、如來は定より起ち給へり。而して世尊は帝釋天の問に對して、災禍を全く消滅する所の眞言を説ひて、帝釋天をして其座に死滅せしめて、又其座に生せしめ給へり。ヤーセル、三二八丁

(因陀羅勢羅窠詞山 Indra-Sikhar-Guha-Giri 帝釋巖窟山は現今のラージャ、ギリ停車場

より東南約四哩程にある山にして、此山に玄奘所傳の帝釋窟今猶ほ存せり。西藏傳の沙羅樹窟は玄奘の帝釋窟と同一の遺跡の異名なるべし。釋迦方誌卷の中廿九丁にも帝釋窟の説明あれども沙羅樹窟の名なし。是れ西藏傳のみに傳ふる名ならんか)

第五十五節 舍利子、目蓮子、及長爪梵志の得度。那蘭陀村の住人、婆羅門、得處の娘舍利迦 Shatika と婆羅門星王 Tichya との間に、除蓋障菩薩の化身たる赤子誕生せり。父よりの名を近王 Uparaja と云ひ、母よりの名を舍利子 Shari-Putra と云ふ。又舍羅途和底 Shradhati の族なれば、シャーラ、ヅワヂ、ブットラと云ふ。彼は十六歳の時、論議に於て其敵なかりき。又王舍城の前に僑陳如族のポタラカ Potalaka とマウンガラー女との間に一の男子を得たり。其生るゝや親族等は母の膝より生れたりと見し故に膝生子と云ひ、母の名を受けて目健蓮子 Nandagalyna-putra と云ふ。彼等兩人の父は各々婆羅門五百の子弟の教師なりしが、彼等兩人は學友として非常に親しかりき。彼等は初めに外道の六師に道を問ひに行きしが、彼等の答ふる所、其意を満すこと能はず。歸路、商低羅山 Shantila-siri の教師全勝有に遇ひ、全く降伏すと云ふことを聽